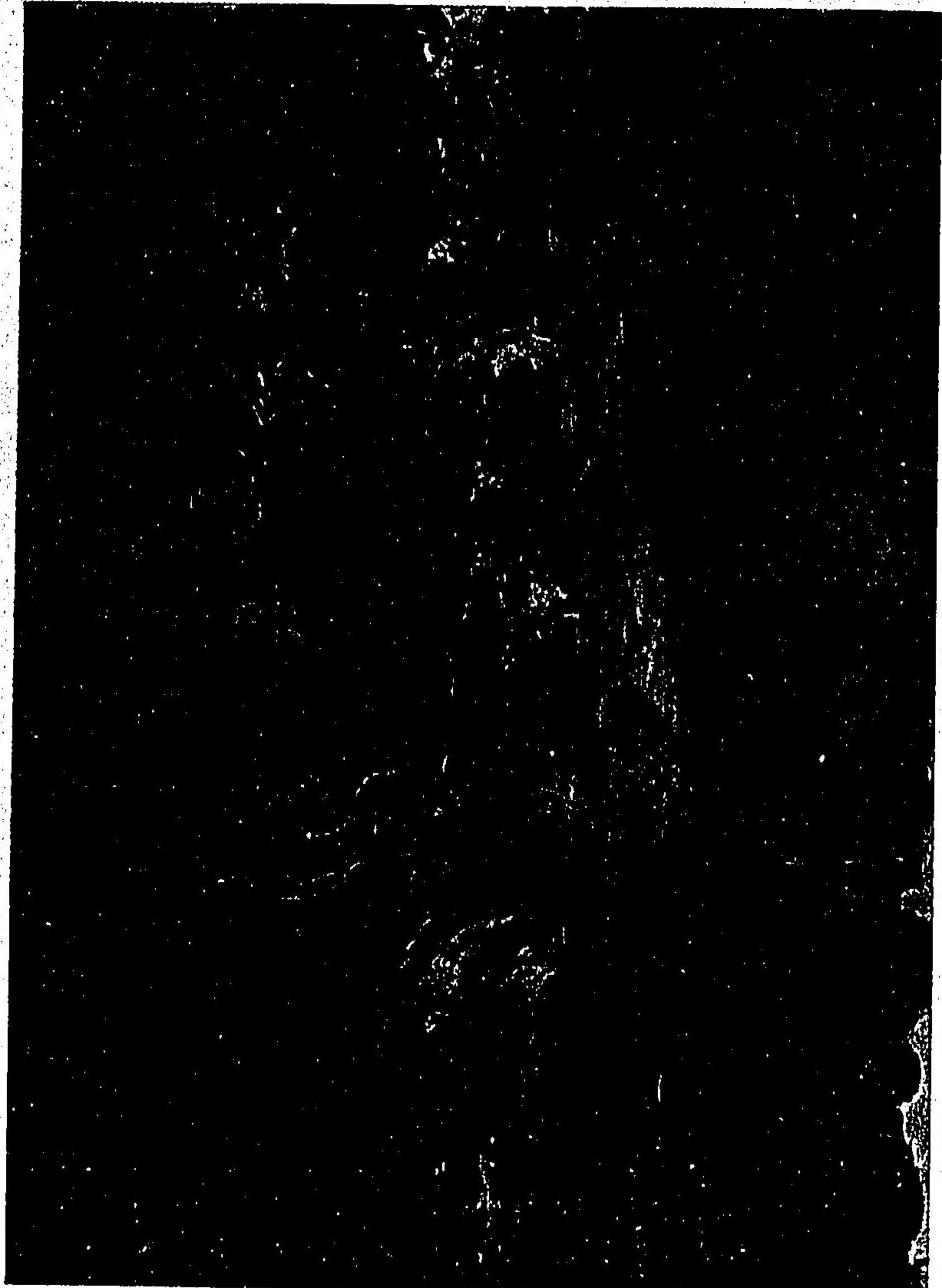


第八圖 墓みの雨

遺告に曰く、神泉苑の池の邊りにして御願によつて法を修して雨を祈る。此池に龍王あり善如と名づく元は是れ無熱達池の龍王の類なり即ち眞言の奥旨を敬つて池中より形を現するの時悉地成願す形宛も金色の如し長八寸ばかりの蛇なり長九尺ばかりの蛇の頂に居在せり云々



註の用は別本あり云々
 人十以のりかしの類は只只のりかしの
 の如き部取願う事終り金母の時し其
 の真言本抄の了部中より部が取らる
 け難然部部部部王の部はり部る部有
 此部は部王はり部部と部いふ部其
 了部部はり部部部部了部部部部部
 部部部部部部部部部部部部部部部

部 八 部 部 部 部

空 兼 の 書 法

内 藤 湖 南 述

弘法大師は其の宗教に於て、其の學術に於て、當時の日本に一つの紀元を劃したのみならず、其の書法に於ても亦新しい紀元を造つて居る。大師以前の日本の書法は六朝並に初唐以來の風であつて、多々のものは寫經體の一派を脱しなかつた。其の正書の方から言へば、六朝以來の書風の外に、或は歐陽詢の法を取つたと見える華嚴音義（西本願寺藏）の如きあり、又歐陽通の風に類して居る金剛場陀羅尼經（小川爲次郎氏藏）などのやうなものがあり、それから房山の石經に類して居る世に景雲經と稱ふるものなどの種類もあり、いろいろであるが、唐では玄宗の開元、天寶の時代に於て、文物の一轉化を來した結果として書法も一轉化を來して、顏真卿、徐浩などの

2
やうな人が出来て、それが段々流れて中唐の頃の柳公權などの風になつて行く順であるが、大師の書風云ふものは、即ち其の當時の唐の流行の書風を取つたものである。其の用筆に於ても従來は多く雀頭筆云ふものを用ゐて居つたのに、大師は長鋒を用ゐるこゝになつて居る。其の書風で言ふと、最も多く顔真卿の感化を受けて居るやうであつて、それが即ち我邦當時の書法を一變した譯である。其の細かい楷書などには既に柳公權などのやうな風を開いて居る點も見える。それから後百年ばかりの間は大分この大師の書風に依つて世の中に變化を生じて居るが、併しまだ悉く大師の風を學ぶ云ふ所には至らなかつた。それで或る者は大師の風を書き、或る者は従來の六朝初唐以來の風を書いて居るものもある。勿論其の當時に於ても既に非常に大師の書云ふものは重んぜられて居つたのであるが、併し大師が全く筆道の祖云ふやうなこゝになつた云ふの

は、もう少し後であつて、恐らく延喜時分からであらうと思はれる。延喜の頃に大師の書である所の三十帖策子云ふもの、箱を作つたこゝがあるが、其の時分からして非常に貴重にせられて、それより後即ち道風以後に至つては、大師の書に對しては常に書法のみならず、一種の信仰を以て之を尊んで居る傾がある。それから以來大師の書云ふものは全く日本の書道の元祖となつて居つて、何人でもそれを學ばなければならぬこゝになつて居る。併しかく非常に尊崇された大師の書云ふものは、一種妙な書風だけが最も尊ばれたのであつて、即ち扁額に用ゐる所の字體などで、六朝から唐へかけて石碑の額、墓誌の蓋などに用ゐられた字體から流れ來つた、大變に奇怪な形をしたものが尊ばれて居る。後世に至つて大師風云へば必ずさう云ふものに限るやうになつて居つて、どうかすると非常に能く出來た眞蹟をば却て大師の書でないと思つて居つたことなども

ある。併し今日に至つては大分それ等の點が明かに分つて來て、さうしてどう云ふのが大師の眞正の特色か云ふことも明かに分るやうになつて來た。それで今試みに大師の書の源流、それから現在遺つて居る筆蹟に就て少しく言つて見やうと思ふ。大師の書は、世間で傳へる所では、大師は唐に於て韓方明と云ふ人が筆道を授かつたとしてある。此の韓方明と云ふ人も勿論唐で書家として名のある人であるが、大師が其の人から傳へたと云ふことは頗る怪しい。世に大師の書法即ち執筆法使筆法と稱するものがあるが、是は段々傳寫を経て、又段々幾度も印刻を経て、其の書は頗る奇異なるものに變つて居るけれども、其の文と云ふものは恐らく大師の作として差支のないものである。然るに其の中の書法の議論が韓方明と云ふ人の議論と一致しない點がある。韓方明と云ふ人には授筆要説と云ふものがあつて、矢張り筆法の事を書いて居るが、それでは雙苞

即ち筆に人差指と中指と二本掛けて用ゐることを言つて居る。然るに大師の執筆法は、其の雙苞と云ふものを取らないで、單苞と云つて人差指だけを筆に掛ける法を取つて居る。その上韓方明と云ふ人はどれだけの名筆か知らぬけれども、恐らく大師がそれから稽古するに云ふ程の人ではあるまいと思はれる。大師の使筆法と云ふものも、多くは唐の太宗などからして以來段々傳はつて來た法を斟酌して作つたものであつて、此の韓方明とは何の關係も無いやうに思はれる。されば此の筆法の傳授と云ふものは怪しい。大師自ら書いて居るのにも、解書の先生に逢うて畧ぼ口訣を聞けりと云ふことも書いてあるが、誰から稽古したと云ふことは書いて居らぬ。此の説は必ずしも信ずることが出来ぬ。

それから大師の筆蹟と稱するものは、從來は世の中に随分いろいろなものがあつたものであるが、今自分が親しく見て、さうして

疑ひのないものと信するものだけに就て、其の書風なごのを考へて見るに(尤も自分の見ないものもあるから、今茲に言つたもの外は皆偽物だと云ふ譯ではない、併し又世の中に有名なものであつて、著しい偽物もある)最も少年の書と稱せられし高野山の聳鷲指歸は未だ一家を成さぬ前故、姑らく論外として、入唐中に書いた所の三十帖策子が著しい者である。此の中には勿論大師の眞蹟の分もあり、又他筆の分もあるが、從來の説の如く其の中に橘逸勢の書もあると云ふことは自分はあまり信じない。此の中の第二十帙の大部分、それから第二十二帙、第二十六帙、第二十七帙等は殆ど全く大師の筆であつて、殊に第二十帙の中の金剛經瑜伽經十八會指歸一巻は大師の楷書である。大師の楷書は極めて稀なものであつて、此の外には東寺の七祖像讚の梵字の傍らに數字を註して居るの位に過ぎない。此の外にも第十四帙、第十五帙の末、第十七帙の中二十餘行

なごは大師の眞蹟であつて、其の外毎巻の目録、それから校正した文字、悉曇の梵字なごは悉く大師の眞蹟と思はれる。それで是は大師入唐中であるから三十二三歳の頃と思はれる。然るに其の文字と云ふものは既に立派に一家を成して、絶妙の域に達して居る。實に書法の天才と謂つても宜い位であつて、恐らく當時彼の地に在つても立派に書を以て名を得ることが出来た位のものであつたらう。其の楷書の如きは殊に顔真卿なごよりかも又少し後の風になつて、中唐頃からして柳公權の風に遷らんごするやうな書風を現はして居る。是等は日本に其の時まで行はれて居つた從來の書風と大に異つて、實に人の目を驚かしたものであつたらうと思はれる。尤も天平の末あたりの東大寺の日記なごの中には、既に中唐頃の趣を備へて居るものもあるけれども、それは勿論大師なごの如き名筆でもなし、又一代の書風を形作るに至らなかつた。大師に至つて全く一代の風氣を動か

した譯である。それからして年代から言ふと、其次に見るべきものは弘仁三年の高雄山灌頂記である。是は極めて倉卒に書いた草稿であつて、古人は其の書の絶妙だ云ふことを知らずして、或は門弟子の書たものだらうなご云ふ説を言つて居る人もあるが、是は決してさうではなくして、大師の自筆たること疑ひもないのである。尤も其の最初の四行は全く偽筆のやうに思はれる。それから其の末の方には他筆も少々混つて居るけれども、大部分は顔真卿の風、殊に郭家廟碑若くは東方朔畫讚などのやうな極めて雄渾の趣を現はしたものの筆意を能く得て居つて、是は實に當時に於ては日本では大師の外に斯の如き書風を書く人は無かつたらうと思はれる。其の他東寺に在る風信狀は行草を交へて書いたものであつて、其の草書の筆意などには王羲之傳來の筆意を含んで居つて、極めて意を用ゐずして能く出來たものである。其の外は東寺に在る所の七祖像讚であるが、

9

是は大字の方は飛白を用ゐて書いて居る。此の飛白云ふものは唐代には盛んに行はれたけれども、今それが傳はつて居るのは極めて稀であつて、勿論眞蹟として遺つて居るものは一つもない。然るに大師の飛白云ふ者は非常な名筆であつて、極めて大字なのが其の儘遺つて居る。勿論大師の飛白は或は梵字などからして悟入した點があつて、唐人の通例の飛白とは多少異なる點もあるかも知れぬ。併し兎に角其の絶妙な點に於ては、唐代の石碑などに遺つて居る飛白でも是だけの者はない。それから其の讚の文の小字の方は其の波撇に一種の飛揚するやうな筆意があつて、是が所謂後世の大師様と稱する所の標本とも云ふべき者である。勿論斯う云ふ筆法は唐の初めから段々あつたので、唐の高宗、則天武后、睿宗などの御書の石碑に既にさう云ふ體を備へて居る。大師は矢張りそれらを學んだのであつて、殊に其の筆路の自在な所からして、大師は屢々遊戯半分に斯

う云ふことを好んで書かれたものに見える。併し後世大師の贋作なごをするものは、動もすれば此の筆法ばかりを用ゐるが、是は必ずしも大師の特色ごばかりも言へない。大師の妙絶なる點が必ずしも茲に在る譯でもない。

先づ自分の知つて居るので寸毫の疑ひもない眞蹟ご云ふ者は以上の如くである。其の他零殘の物では猶ほ眞蹟ご思はるゝ者がある。即ち灘の嘉納治兵衛氏所藏の手鑑中の二行なごの種類で、他にも此種のものゝ幾らかある。併し又有名なものであつて、さうしても眞蹟ごは思はれぬものもある。それを今一々擧げると云ふことはせぬが、以上の確かな眞蹟に依つて考へたならば、蓋し思ひ半ばに過るごご思はれる。

緒言

四國は余が父母の國なり。初めて字を習ふに際して、「いろは假名は弘法大師の粉め作られし所なり、一字を書き得るに至らば、深く大師の恩徳を感銘して、ゆめゆめ忘るべからず」との教訓を受くるに先だちて、余は既に弘法大師の、我が四國の有する唯一の誇なることを知り得たりき。晩春首夏の頃、一たび城外に出れば、一様の笠ご一様の金剛杖ごを携へたる男女の、口に「南無大師遍照金剛」を稱へつゝ、參々伍々相携へて、同一の方向に旅行するものあるを見る。是れ即ち「お四國巡り」又は「お遍路さん」と敬稱する、八十八ヶ所靈場の巡禮者にして、淳良なる大師の歸依者なりとす。余は此の「お遍路さん」に就て、夙に大師の偉大なることを學び得たり。そは四國に狐の棲むことなきは、大師が結界を修し給ひしに因るが如く、大師は現身の生佛にして、今尙ほ高野奥の院に詣らば、靈窟の底より鈴の響の起るを聞くことあり。或時は遍路乞兒に化身して、日本國中を巡錫し、忠邪淑慝を洞觀して、賞罰の冥報を下し給ふ。大師は

生前に於て、明星口に入つて吐く唾悉く星光を放ち、咒を誦すれば狼に食はれたる死
 兒も蘇生し、定に入つて觀すれば守敏が封じたる八大龍王をも看破するが如き法力あ
 りしを以て、定後佛化せる通力は、決して人の思議すべからざるものあり、汝等誰ん
 で畏るべき大師の冥罰を被る勿れとなりき。

殊に幼童の視聽を聳やかして、甚しく好奇心を刺戟したるものは、手足と口とに五
 管の筆を持し、五行同時に書き得たりといひ、指頭を以て虚空に書せば、字畫空中に顯
 はるといひ、柱及び舷に書せる文字の削るに随つて滅せざるといひ、河を隔て八瓊を
 書くに、墨霧の如くに來つて筆に随つて字を成すといふが如く、神變不測の道士の幻
 術的弘法大師なりしなり。故に余は所謂眞言秘密なるものは、則ち神出鬼没の行法の
 謂にして、大師は一種畏るべき鬼神なりとの迷信を破る能はざりしなり。

美術鑑賞の事漸く盛んにして、余の年齢も亦漸く長じ來れり。一日龍池會に遊びて、
 初めて弘法大師の眞蹟を目睹するを得たり、そは「益州城外觀妓」の詩にして、夫の眞眞
 卿の行草の如き勁健の筆路なりしが如し。固より眞贋甄別の明なしと雖も、世に傳ふる

大師様とは、全く別手に成りし如き觀ありしかば、頗る奇異の感を抱けり。後年京都
 に遊んで、また所謂南院裂と稱するものを觀たり。其書は前の觀妓の詩よりも稍や温
 潤なりしかども、亦彼の大師様とは、何等の交渉沒きものなりき。數年を経て偶々急
 就章の法帖を得、試みに二三字を臨するに及んで、力足らず筆弱くして、苟くも髣髴す
 べからざるを覺り、是に於て初めて大師入木の妙、古今海内に冠絶する所以を察し、以
 て弘法大師の偉大なる點の、決して余が信じ來れる點ならざることに想到するを得、
 衷心大いに慚愧たらざるを得ず。乃ち余が大師に對して抱き來りし畏敬の念は、翻然
 として其の根本より顛覆せらるゝに至れり。

爾來余は大師墨蹟の熱心なる信徒となれり。請來目錄、鼠心經の如き、幾たびか研
 究を経たる後に於て、一たび風信帖に接するや、大師の面目躍如として毫端より生じ、
 以て一代を睥睨するが如き神威を見るに追ひ、遂に余をして、縱令閩門五十里を相隔
 つるも、同じく四國の島民に生れ得たることを以て、絶大なる光榮とするの感を深か
 らしめたり。

書に於る余が信仰は此の如し。然れども靈界に於る大師の眞面目は、未だ毫釐の知識にも有せず。余をして露骨に心腹を披瀝するを得せしめよ、余は謀叛氣ある一個山師坊主の幻影の、肚裏の那邊にか彷徨するを覺えたりしなり。而して教祖傳記叢書の第二卷として、新に弘法大師を傳せんとするに方り、多く大師の事蹟に接せんがため客臘教王護國寺に詣りて、眞言根本の道場を訪ひ、今日も尙ほ玉體加持を行はるべき灌頂院を拜し、遺寶とにも遺徳の萬一を窺ふを得て、微しく大師眞意の存する所を付度するの端を啓きぬ。更に去つて高野山に攀登し、雪を踏んで靈廟に奏するや、聖光炳然として胸臆を照破し來り、覺えず上下三千年唯一無二なる大師の靈徳の今に於て尙ほ無邊無際なるを感知し、乃ち油然として深く敬虔の念を抱くに至れり。

然り而して、初めて大師の傳を読み、初めて大師の遺著を味ひ、以て大師化度の大志の單に未來の救誓を以て足れりとせず、現實に於て世を利し民を濟はんとするに在りしことを知り、而して其の書畫彫刻の妙技も、神水施藥の仁術も、製筆墨紙の授業も、開聖種茶の興廢も、種藝種智院の開校も、いろは假名の拵作も、五十音圖の調製も、

皆な即身成佛の結縁に過ぎざりしことを解し得たり。絶大の常識、深奥の哲學、崇高の理想、洞然として千古に磅礴するもの、我が大師の如きは、則ち稀なり矣。余の菲才淺學如何ぞ其片影を捕捉するを得ん。

加之、余をして最も意外の感を抱かしめたるものは、文章上に於る大師の、快刀亂麻を斷つが如く、意氣殆ど當るべからざるものあるに反して、實際上の大師は、心を世塵の外に住め、常に山林を愛して、錦茵蕙帳を厭離するに努力したる事是なり。法に順ふや忠誠、弟子を誨ふるや敦厚、友と交るや篤敬、常に南都北嶺の中間に介立して、互ひに親緝を破らざりし如き、其の德渾然玉の如きものあるに非ずんば、焉ぞ克く此の如くならん。是に於て、余は「謀叛氣ある山師坊主」の迷想に對して、深く愧ぢ且つ恐れざるを得ず。

嗚呼我が弘法大師は、獨り我が四國の有する誇たるのみならず、實に我が大日本國の有する大なる誇なり。謫劣余が如きの徒、豈能く其眞を傳ふるものならんや。

一大師の遺徳廣大なりと雖も、之を國家的に視る時は、凡そいろは歌の製作より偉大

なるは莫かるべし。而るに古來學者の考證を重ねて、今尙ほ不明なるが如く充棟の大師傳中、一つも顯著なる動機、正確なる年代を傳ふるものなきは、誠に物足らぬ心地なり。故に余も先聲と同じく遺恨を存して、只僅かに推量の文字を留めたるに過ぎず。庶幾くは大方博雅の高教を得て、無限の遺恨を散せんことを。

一 清涼宗論、即身成佛の一條は、孔雀經音義にのみ獨り其文を見る、古來宗の内外に傳唱する所にして、鳥羽院長承の官符にも「初入開持觀、現座開悟、後遊清涼殿、即身成佛」とあり、因て以て宗の大事管見の及ぶ所にあらずとする所なり。然れども、官符の文字は、此の續きに「投三密金剛、示當山靈勝、傳萬德寶珠、增我朝祐福」の句に對するものにて、飛杵の句と對照すれば、思ひ半に過るものあらん。且や、列座の龍象は年齢相應せず、中には未生以前の人すらありて、一も信憑すべき徵據なく、慈雲尊者の如きも、斷じて叢澄の清涼宗論を訛傳したるものなりとし、宗の學者も多く否認する所なり。是を以て一旦之れを削らんかとも思ひしが、是は單に大師の意氣を示すものにて、ドラマ的記事としては多少の感興なきにあらざるを以て

敢て抹殺に従はざりしなり。

一 其の他多くの奇蹟にして、神話的興味を有するものなきにあらざるも、大師の如きは奇蹟を以て偉大なる高祖にあらず、其の神識、其の偉業、それ自身が遠く世間を超越して、出世間的権者となりしものなれば、余は力めて奇蹟を避けんとせり。

一 大師筆道の師に就ては、古來一定の説ありて、幼にして六書八體の法を朝野宿禰魚養に習ひ、入唐して書法を韓方明に授かるとなし、以て今日に傳來するのみならず、谷響集の如きは、魚養が善書の名は、大師の師たる故を以て、世を擧げて知るに至れりとしたり。然るに、大日本人名辭書は皇國名醫傳を引きて、魚養は延長七年播磨大椋に任せられ、十年姓を朝野宿禰と改めたる人なりとし、大師滅後九十年代の事としたり。試みに弘法大師續年譜を見るに、これには續日本紀第三十九卷を引きて、延暦六年外従五位下に叙せられ、十年改姓の勅允を得たることを註せり。長と曆と唯一字の差異なれども、時代は百四十年を隔て、事實の有無は之に由つて判明すべし。假に續日本紀第三十九卷に此の紀事ありとすれば、則ち魚養は延長の人

ならずして、延暦年間の人たるや明かなり。何となれば、續日本紀は延暦十六年の勅撰にして、百四十年後の人名を記上すべき理由なければなり。余の書に貧なる、兩書ともに藏弁せざるを以て、査察して斷案を下すこと能はず、因て唯だ古來の傳説に隨ひ、續年譜の註に據つて、魚養を點綴したるなり。韓方明に至つては、湖南君に説あり、詳しく「空兼の書法」に論せられたれば、則ち就て「讀あらんことを望む。」

一 卷頭に掲げたる眞言長者土宜大僧正の尺牘は、稿本電閲の後與へられたるものにて、「空兼」を改めて「弘法大師」とすべしとの高見は、眞言長者として、御室門跡として教界の耆宿として、誠に正當の言なりとす。後生にして先生の諱を稱するは、既に非禮なり。殊に弘法大師の如きは、三歳の童子も其の名を記する所にして、通用の程度最も廣きが故に、諡號を以て標題とせんことは、何の異論もなき所なり。然れども、記する所の事歴は、單に「空兼」の二代に止まりて、身後九十年の「弘法大師」に涉らず、専ら當年に溯つて現代的敘述を試みたるものなれば、已むを得ずして敢て非禮を忍びたるなり。尙ほ有體に言明すれば、一は題簽の文字を、悉く眞蹟に採

らんとする欲望ありしを以て、強て御自署の「空兼」の二字に執着したることも、亦之れが一原因なりしなり。

一 本書の稿本は土宜大僧正の電閲を仰ぎしのみならず、井村眞琴君にも提供して、嚴密の叱正を乞ひぬ。井村君の謹嚴なる、該博の識を注いで仔細に紫黄を加へられしかば、蕪雜なる稿本は、殆ど一葉として完紙なきに至れり。憾むらくは時已に印刷半を過ぎたれば、前半は全く訂正するによしなく、別に正誤書を附する事としたり。就中、余の宗義に通せざる、往々にして其の固有名詞を錯り、讀み聲の太だしく非専門的になりたるものあり。例之ば、三教指歸の假名を「かめいこつじ」、虛亡隱士を「きよぶ」、蛭牙公子を「しつが」、不匿を「つきす」、役名の羯磨を「こんま」と讀むを知らざりしの類なり。其他漢吳音の用所を顛倒し、字音の假名を錯り、動詞の音便を混用したるが如きは、枚舉に遑あらず。其の甚だしきものは、別紙に略ぼ正誤し置きたり。

一 本邦入木道の祖たる大師の眞蹟は、成るべく悉く撮影登載せんことを試みたり。先

づ少年時代の筆蹟としては、高野御影堂寶庫に藏する雙臂指歸の序の首尾を採り、在唐中の筆蹟としては、仁和寺秘藏三十帖冊子の楷行二帖を採り、歸朝後の筆蹟としては、高雄山神護寺藏灌頂記と、東寺藏傳教大師に與へたる消息風信帖全部を採り。第一は二十四歳、第二は三十三歳、第三は三十九歳、第四は四十一二歳頃のものなるべく、別に繪畫の部に模したる龍猛龍智影讚の飛白文字は、四十八歳の筆に成れり。是にて大師が書道の祖たる眞價は十分察知するに難からざるべきを信じて疑はず。

一 大師筆と稱する繪畫は、到處の寺院に藏せざるはなきも、眞に大師の筆として見るべきものは、蓋し絶無ならん。唯だ東寺の什寶七祖像の内、龍猛龍智二祖の像は、大師の新たに畫きて補ひたる歴史を有するものなり。高野山普門院什寶勤操僧正の像も、古くより眞蹟として傳へられ、別に文書の證すべきなきも、義に於て大師の影寫とすべき由緒なきにあらず。史家は此の影像を以て、日本肖像畫の最古のものとし、慥かに千有餘年を経過したることは明かなり。余はこゝに此の三祖を得たる

を以て、大師が繪畫に於る神品を悉し得たるを誇らんとす。

一 木彫の佛體は、繪畫よりも猶ほ夥多しく、其の眞作は、繪畫よりも稀れなり。甲山神咒寺に傳來せる櫻樹の自像は、大師如意尼の爲めに自から刻して與へたるものとして、今は國寶簿にも登録せられたれば、一は其の神貌を傳へんために、こゝに掲ぐ。高野南院の秘佛不動明王は、世に著名なる靈像なり。彼の縁起に據れば、經像將來の渡海鎮護のため、惠果の指導に隨つて大師之を敬作し、惠果の開眼したるもの、歸航の海上怒濤を切つて風波を夷げしより、波切不動の名は生ずるに至れり。是將た大師の眞作なるや否やは、秘佛にして未だ何人の鑑定をも經ざれど、靈驗灼然たる尊像なれば、敬つてこゝに掲げつ。東寺金堂五大尊の大聖不動明王は、今日に在つて唯一の眞作として、學者の鑑識一致せるものなり。其の刀痕を撫して手法の妙を味へば、大師がいかに造佛改善に苦心せるかを知るべく、稀有の至寶といふべし。

一 在唐三年秘教の眞趣を學するの傍、大師の潛心研究して、王朝文明の開拓に資したるものは、嘗に書畫彫刻のみならず、造家建築に於ても、勅造の様式を遺せり。即

ち天平式と藤原式との中間に介在して、優に藤原式の堪をなせる弘仁式、是れなり。弘仁式建造物の現代に存在せるものは、東寺蓮華門、日光大日堂、室生山金堂及五重寶塔に過ぎりしが、蓮華門は近代に至りて、學者間に多少の異論を生じ、日光大日堂は卅五年の水害に罹りて跡を留めざる今日、室生寺の金堂と其の五重寶塔とは、唯一無二の代表的建造物となれり。余をしてこの天下の至寶を、併せ掲げ得せしめたることを以て、畏友龍庵君の好意に感謝せざるべからず。龍庵君は審美學專攻の學士なれば、是等美術と大師との關係に就ては、君の大筆を煩はして、卷頭を飾らんことを乞ひしに、才子多病にして健康勝れず、加ふるに近畿旅行の期迫れるを以て、遂に初念を果すに至らざりしは、かへすくも余の讀者諸君と、もに遺憾とする所なり。

一表紙の類伽の模様は、三十帖簀子法文の宮の蒔繪にて、實に延喜十九年藏人所藤原幾絲を奉行として、勅旨を以て製作せしめられたる、本邦蒔繪中最も精美優秀なるものなり。見返しに用ひたる水鳥の圖は、惠果阿闍梨の法具を納れて、親しく大師

に付屬したる螺鈿蒔繪の唐櫃にして、即ち唐代の製作なりとす。文匣の九龍は、島津義弘の高野山に奉納したる打取にして、明代の製にかゝる天鵝絨刺繡模様の一部なり。之を巧みに應用して、妙に調和を保たしめ、以て高雅優美の装釘とせられしは、偏へに結城素明君の卓越なる意匠、秀絶なる技能に因る。卷中八面の油繪は、行狀繪卷の他に新意を補つて、靈妙なる大師の一代を説明したるもの、乃ち中澤弘光君の、穩健なる丹青の輝きなり。君の皓潔なる素行と、熾烈なる熱誠とは、かゝる神靈界の作品に於て、特に絶妙の技倆を見る。彼此相須つて卷の内外を飾り得たるは、余の欣喜措く能はざる所なり。

一余は材料蒐集の爲め、高野に一回、京都に三回の歴訪を試みたり。幸ひにして先輩諸君の同情を得、略ぼ大成するを得るに至りしは、余の意稿かに欣悦に堪へざる所、又、深謝に堪へざる所なり。尙ほ此の外にも阿波の太龍寺、讃岐の高農の池、日光の大日堂は、緊切なる遺蹟として必要を感じたれども、太龍寺は生憎寫眞を藏せざるが上、地僻にして交通の如意ならざるに、時雨期に屬して寫眞すべからざりしを

以て、已を得ず之れを省きぬ。萬歳の池は從來絶待に撮影したることなき處、新に撮影せんとすれば、太龍寺と同一の事情あるを以て、是また断念の已むなきに至れり。大日堂に至りては、流亡後僅かに十年に満たざるも、新奇を趁ふ世好は、此の國寶的建造物の死影を存することをだも許さず、百方搜訪して、遂に一葉の古寫真をも得る能はざりしは、寔に千秋の遺恨なりとす。

一資料の収集に對しては、金剛峰寺は西川忍龍、井村眞翠の二君を、教王護國寺は松永昇道君を、祖風宣揚會は、清瀧智龍、長谷實榮、高見觀應三君を以て、多大の利便を興へられ、且つ有益なる指導を授けらる。友人としては、京都大學教授内藤虎次郎君、並に大阪朝日新聞社西村時彦君の、或は藏書より、或は腹笥より、諸般の教示を興へられたる在り、こゝに記して余が感謝の一端を洩さんとす。尙ほ、大僧正權田雷斧、豊山中學教諭田中海應二師、史料編纂官鷲尾順敬君が、千金の寸陰を割きて、屢ば其の専門上の教訓を垂れられしと、松田密信師が藏書を秘惜せずして、請ふがまゝに惠貸せられしとは、永く遺れんとして遺れ得ざる所なり。

一遺跡寫真の採收に就ても、余は多數の恩恵を被れり。土佐室戸の東寺の如きは、一葉の寫真を得る爲めに、遠く寫真師を迎へて、且つこれが詐欺に罹り、更に人を替へて新たに三葉の寫真を製し、期に後れんことを慮れて、原版のまゝ附郵し來りたるなり。甲山神咒寺、讚岐善通寺、洛西神護寺も亦、厚意を以て寄贈せられ、國華社の如きは、門外不出の原版を貸與せられ、爲に南院不動尊の如き秘佛をも、許諾を経て掲出するを得たり。此の外、東寺の松永僧正、高野の井村君、宣揚會の清瀧君、京大の内藤君及び福岡日々新聞社の原田徳次郎君、在京都朝日新聞社の一花健造君は、或は寫真師を指導し、或は新たに撮影せしめて、以て此の事業を助けらる。余の感謝措く能はざる所なり。

一卷頭挿む所の寫真、勸操僧正、龍猛菩薩、龍智菩薩、波切不動、東寺不動、枕本尊、屏風本尊、鈴杵龍劍、室生寶塔並に金堂は、國華社。風信帖、行狀繪卷、蓮華門、東寺大塔、嵯峨、小野、山科、智積院、大安寺、戒壇院、乙訓寺は京都藤田寫真館。高野大門、御影堂雪景、奥の院、慈尊院並に雙髻指歸二葉は、高野口岡田寫真館。御

室、高雄、泉涌寺、南圓堂、醍醐は京都今尾柳翠氏の撮影にかゝり、三十帖冊子は實に三浦博士の手寫のものに由る。併せて滿腹の敬意を表す。

明治四十三年七月盡日

須藤光暉識す

目次

弘法大師真蹟風信帖	
眞言長者土宜法龍師消息	
高野座主密門宥範師題字	
童形大師御影	藤原信實筆
櫻樹御影	寺傳御自作
勤操僧正肖像	寺傳御眞筆
波切不動明王	寺傳御自刻
大壘不動明王	弘法大師刀
龍猛菩薩影讚	眞蹟書讚
龍智菩薩影讚	全上
雙誓指歸序文二頁	少時筆蹟

三十帖冊子二頁 在唐筆蹟
 灌頂曆名錄三頁 隋初後筆蹟
 木彫枕本尊 惠果付囑
 同屏風本尊 全 上
 法具并龍劍 全 上
 室生寺五重寶塔 弘仁式建造物
 室生寺金堂 全 上
 土佐室戶崎 苦行遺跡
 檜尾山施福寺 得度遺跡
 太宰府觀世音寺 師初宿院
 高雄山神護寺 最初灌頂
 興福寺南圓堂 鎮壇供養
 甲山神咒寺 開眼慶讚
 讚岐善通寺 誕生聖跡
 南都大安寺址 本 寺
 東大寺戒壇院 受戒聖壇
 博多東長密寺 初建遺構
 長岡乙訓寺 別當在任
 伊豆修善寺 關東初建
 九度山慈尊院 母公廟所

東寺派本山教王護國寺

一、蓮華門 二、金堂 三、大塔 四、神泉苑 晴雨靈池
 高野派本山金剛峰寺
 一、御影堂 二、大門 三、奧院
 御室派本山仁和寺 大覺寺派本山大覺寺
 小野派本山隨心院 泉涌寺派本山泉涌寺
 山階派本山勸修寺 醍醐派本山三寶院
 豐山派本山長谷寺 智山派本山智積院
 弘法大師行狀記 土佐光顯筆
 一、三鈷示驗 二、神泉晴雨
 三、後七齋會 四、證號宣下
 大學教授內藤湖南君書論

- 第一 夢がたり
- 第二 わらば堂
- 第三 洛のぼり
- 第四 たのむ蔭
- 第五 法的首途
- 第六 あかぬ門
- 第七 山また山
- 第八 神秘の論
- 第九 不二の光
- 第十 船よそひ
- 第十一 よるべ浪
- 第十二 醍醐の味
- 第十三 滅る燈火

一 五 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

- 第十四 墨池の香
- 第十五 馬の饒別
- 第十六 かへる岸
- 第十七 菴生が門
- 第十八 三寶の聲
- 第十九 雅づかひ
- 第二十 即身成佛
- 第二十一 法の威徳
- 第二十二 入木の道
- 第二十三 二星の會
- 第二十四 晴天の雷
- 第二十五 高雄の嶺
- 第二十六 高野の原

一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

きて睡り給へり。眞魚は、神の樂苑に遊ぶらん、安らかなる姉上の睡顔を見るより、
鏡かに枕を掻げぬ。

「おゝ！ 倭斯濃山にはなかりつるよ」

物如とばかり身を起して、蘇がへりたらんやうに太息すれば、燈火また少時ゆらめ
きて、定めなきこと、浪に濺よふ蟬影の如し。

父母は尙ほ臥さずや在すらん、表の室にはうち語り給ふ御聲の、いと密やかに聞ゆ
るなり。眞魚は臥床の上に端然と坐を正して、十の指を胸のあたりに組み合せ、目を
閉ぢ心を鎮めて黙念すること多時なりしが、幾里過ぎてか告げ來しけん遠寺の鐘の、い
と清く澄みわたるに、半眼を開きながら、恭しく掌を摩り合はするなりき。

「宿世いかなる因縁ありてか、夢の中に御佛を拜することの、常にかくは數なる？」
眞魚の小さき胸の裡は、この疑ひもて充たされたるなり。合掌したる掌は、そのま
ま絆と胸を壓へぬ。半開きたる眼は、うち舞めたる眉と、もに、懷疑の光りを鋭く放
ちぬ。朝暎の霧を抜くが如く、晚風の雲を拂ふが如く、心の鏡を明らかに照らさんと

思ゆるほぎ、霧よく濃く立ち單め、雲ますく深く瀾漫りて、眼にも心にもあり
ありと映するものは、今し覺めたる夢中の光景にぞある。

「懐ふをば見得ず、想はぬをのみ見て、幻影の首もなく、泡沫の尾もなきこそぞ、
覺めて跡なき夢の姿とは知りつれど、我が世の人を見る事は、吾先づ八葉蓮花の中
に居坐して、諸の如來菩薩に對し奉つり、共に過去未來を語る如きは、想はぬ夢
の絶頂ならずや。噫斯の夢よ、吉兆か。凶讖か」

思ひ餘りし心の惑ひは、いつしか聲となりて、唇の關を漏るゝなりき。
微かながらも吾が聲に愕きて、遠はしく姉上の方を顧みるに、今の語は夢にも聞せ
給はざりけん、神々しきまでに靜穩なる睡顔を見ては、覺えず胸の摩らるゝなり。
「あ、嬉しや、秘事は漏れざりけるよ」

また一しきり撫で下す手に感ずるものは、疑惑に跳る動悸の、いと高く劇しきにな
んありける。眞魚は自から面を垂れて、尙ほも意の中に思ひ續くるなり。

「吾がこの夢を見初めつるは、生年五六の間なりしも、専ら心に秘め藏めて、父に

も母にも語りざりき。況して他人にをや。斯てのちはさる夢を見る事もなく、爰に六年を過つるに、今宵は捨身の行を修せんため、倭斯濃山に攀ち登り、絶壁より身を跳らせて、白雲迷ふ深壑の底に飛び込みしを、足下に紫の雲起りて、天人忽ち天降り、金色の蓮臺を捧げて吾を載せ、原の處に置くほどに、奇雲浴々として涌き上る中に、釋迦牟尼佛の百寶の蓮華に坐して出現し給ひ、白毫より大光明を放ちつゝ、一生成佛の旨を宣り給ふに、歡喜の餘り額を地に着けて拜しつと見て、忽焉として夢は破れにき。童子の身もてかゝる大誓願を發するさへいと奇しきに、忽ち世尊の悲願を拜し奉つりし事、奇しき中にも更に奇し。尊が上にも別て尊し。」

かく思ひ來ぬれば、瑞相凶徴の別ちを問ふに追なく、恭敬の念連りに萌して、また更に合掌默念せらるゝなり。

心の鎮りたる爲にや、平穩和靜なる姉上の氣息の、吾に枕を進め給ふげに聞え來れば、掌を解き、眼を開くと、もに、徐ろに故の衾を被きし時。

「貴物。」

父上の一聲呼び給ふ御聲聞えぬ。眞魚は再び塵破と身を起して、潔よく應へんとせり。

「何、貴物とや」

訝かしげに押返して問ひ給ふは、今日京洛より來ましつる外男の太夫なりき。眞魚はその聲音を耳にすると等しく、臥したる吾身を、父上の召し給ふべきやうはなかりしものをと、吾ながら吾が驚きの可笑くなりて、は、笑む口を衾にて掩ひつゝ、徐かに枕に就きたるなり。

されど、心は澄み眼は冴えて、寢んとするほどに得も寢られず、衾を額までうち被きしかぎ、まじゝとして臉に合はざりき。かくして何思ふともなく覺めて居れば、聞まほしとは願はねども、表の室にうち語らふ人々の物語は、更けわたる夜とも、手に取るばかり聞ゆるなりき。

「貴物とは眞魚が字ぞ」

父上は笑みを含みて仰する御聲にも、尋常ならぬ御悲しみは籠りたり。

「字にも種々あるべきに、貴物とは餘りに耳立ちて候はずや」

外舅上は太く訝かしみ給ふげなり。眞魚も疾くより深く訝かしみ來つれども、父母の御心ありて仰する事を、強て疑ひ奉つらんも無禮なりと思ひ置りて、曾て一たびも問ひ奉りし事はなかりき。今料らずも叔父上の疑ひを質し給ふに會ひて、父母の御答いかならんと、片唾を呑んで胸を掻かしつ。

「耳立つか否かは知らず、我等は彼をいと貴く思ひ賞づるまゝ、貴物貴物とは呼び慣れて來つるにこそ」

「子より親をこそ貴物とは崇むべけれ、親の子を呼ぶには似つかしからじ。かゝる事よりして、無垢なる愛子の心を驕らせ、後に悔うとも及ばざる歎きをする例は、世に幾らもあるものを」

外舅上は、「やうにては肯定たまふべき處氣もなし。父上は尙ほ之れには答へ給はざりしが、眞魚は、この語のうちに籠れる温き情を感じて、文學の道に深く在はすればこそ、吾が身の行末を遠く慮かりて、延情の愛を戒め給ふなれと悦べるなり。」

父上は唯さりげなく、微笑み給ふと思し。母上は、語を惜まるゝ父上に代りて、徐ろに口を發き給ひき。

「夫れには深き仔細はし侍りてなり」

「いかにも仔細なうては叶ふまじ、先づ御語り聞け給ふべし」

外舅上の膝に置き給ふ筈には、力を籠りつべし。眞魚も再び枕を掻けて、一心に耳を澄しつ。

「貴物が上に就いては、幾たびとなく奇しき事の侍りつるが、今より三年前、貴物が九歳の秋なりけん、公より國々へ御使を遣はされし事の侍りき」

母上はこゝにて語を句切り給ひき。外舅上は、其の聲の末に結び着くるやうに、調子よく詞を投げ給へり。

「そは問民苦使なるべし。當今天皇即位在ましてより、陸奥の蝦夷の暴び猛しく、征夷に宸襟を惱せおはしまし、未だ國民の安否を知し給はざりしに依り、延暦改元の歲、諸國に問民苦使を差遣はされつる事候ひし」

「その御使にてや侍らん、この邊を過ぎ給ふ時、真魚も路傍に遊びてありしを、彼の御使一目見給ひしより、遠々しく馬より下りて、恭しく真魚を拜し給ひしにこそ」

外男上は首肯し給ふにや、將不審しみ給ふにや、何の御聲とてまなし。父上は心の叫びを禁め得ざるかのやうに、長く／＼呻吟き給ひしが、やがて後を語り給ひき。

「件の間民苦使、従者を顧みて言ひけるやうは、汝等知らずや、彼の幼童は凡人にては在りませぬよ。所以いかにといふに、四天王白蓋を把つて、前後に隨ひ奉つるを見れば、吾も急ぎ馬を下つて拜しつれ。拜し了りて再び眼を開きしに、四天王はもはや見え給はざりき。定めて知んぬ、前生の聖人にて在しけんことを、感嘆詞に餘りしを聞きて、遠近の里人、誰言ひ傳へ語り継ぐともなく、彼を稱して神童とは申し傳へたり。吾等もこの話しを聞きて、深く心に感ずる所ありしかば、偏へに悲しみて貴物とは字を呼びぬ」

神秘ありげなる父上の御物語りを、外男上の何と聴かれけん、真魚は満身汗になり

て、懼しく心の跳るを覺えぬ。

父上はいと熱したらん御聲にて、更に物語りを続け給ひき。

「大足ぬしの來つるこそ幸ひなれ。千枝女は既に菅原に嫁ぐべき縁の定めりければ、吾等の心を傾くべきは、唯だ彼の貴物一人となりぬ。吾等が年頃思ひつるは、何れにか良き師を索めて、貴物を佛の御弟子に爲さん事なり。副にのみ在る身は、何れの御寺に大徳の在りませんか、更に知らず。備佛道は同じからずとも、京洛に在らば、今の代の大徳は知りてぞ在らん。急ぐべき事ならねども、真魚が爲に吸引して賜はるべし」

「何、真魚を僧に爲さんとや」

外男上の聲にも千斤の力籠りき。

「さればなり、宿縁の萌す所、良き法師に爲さんと思ふなり」

「いかなる宿縁あるかは知らねど、聰明岐嶷なる愛子を將て、今の代の信侶となさん事は、穢れたる泥の淵に投するにも等しかるべし。此事は幾たびも思慮あらまほ

し

「太夫には仁義の道を説き給ふ御身なれば、總ての佛教者を異端とばし看給ふらん、去りながら、佛陀の誓願は三世に涉りて、所有罪業をも救ひ給へばこそ、上は歴朝の御師依深く在し、下は衆生の渴仰淺からず、法師の徳は高く仰がるゝなれ。法師を穢れたる泥の淵と仰するには、いかなる明燈の在してぞ」

篤信者にて在します母上は、較や氣色ばみて詰り給ふなり。外舅上のいかに之れに答へ給ふらんとは、眞魚の疾く聞んとする所なりき。

「一わたり聽せ給へるのみにては、訝しむ思し給ふも道理ぞかし。花のみ徒らに麗はしくして、實の至つて苦きものあり。今の代の僧侶は、多く此の類にて候ふぞや」外舅上はかく解し易き比喩を引き、徐ろに説を前め給へり。

「此のあたりにて國分寺の莊嚴を仰がんよりも、京洛(平城)に在りて七太寺の伽藍を見、僧正僧都の威儀を拜すれば、佛法の崇高にして、法師の尊貴き事、更に驚くべきものあらん。いかにも列聖の御敬信其の極に達して、法師は名譽の歸する所となり、

權威の集る所となりしが、弓削道鏡法師、君龍に驕りて佛徒の分を忘れ、漫りに太政大臣禪師と僭上して、徒らに政權を弄び、恐れ多くも神器を覬覦し奉つるに至り、朝野道俗舉つて横暴を疾ひの餘り、遂に下野薬師寺の別當となつて、彼の地に死し了りしなり。是れが爲めに佛陀の光明自から曇り、寺院は弊害の府となり、僧徒は墮落の奴と變じて、圓頂に邪見の角を隠し、染衣に利慾の念を被ひ、非法濫行測るべからざるに追ひしかば、當今登極の初めより、屢屢かなる勅を下し給ひて、僧尼を戒飭ましまし、ならずや。是を以て、今の代の僧侶となすは、愛子を穢れたる泥の淵に投するに等しとは申し、なり」

外舅上はそれを確かめん爲に、三つ四つ實の例しを惹き給ひき。眞魚は心を慮しうして聽聞してありしが、惟ふに佛門の紊れたるは、是れ法の罪にあらずして、之れを護持する僧尼の罪なり、いかに其の境の荒れ、流の末の濁りたりとて、忠實に佛の旨を奉じ、精進して教法を守らんには、佛日何とて再び照らさざるべき。今上の斯く僧尼を嚴戒し給ふも、畢竟奈落に墮まんとする三寶を救護して、眞趣の光明を輝かさしめ

んどの、深き敬慮にこそあらめ。父上も爾か思し給ふべきに、何とて此の理を説き明し給はざるやと、一向に思ひ悶ゆるなりき。

やがて父上の咳は聞えぬ。

「時勢の傾向はさもありなん。去りながら、是れには深き宿縁ありて、前世よりの約束なれば、凡慮には及び難かるべし」

「間民苦使が見つるといふ奇瑞の外に、尙因縁の候ふやらん」

外男上は隙もなく問ひ給ふなり。真魚は跳る心を推し鎮めくしつゝ、御詞いかにと耳を軟するなりき。

「さればなり、此事は今少し秘め置かんと思ひしが、足下は再び京洛に還る人なり。今うち明して談合せば、更に語らふ機会なきも測り難し。夜は更わたり、人は皆な熟睡して、かゝる好機はまたあるべしと思はれば、委曲を語り盡すべし」
父上は一旦語を断り給ひしが、更に壯重なる聲さまにて、直ちに話頭を進め給ひき。

「怪力亂心を語るとばし思ひ給ふな、是れぞ不思議の奇瑞なるよ。一夜の夢に、天竺國より聖人の僧來りて、我等が懐に入ると見たるが、是は我のみ感せしにあらす、吾が妻も同じ夜、同じ時刻に、同じ夢を感じたるなり。如是して不思議にも懐妊し、胎内に在ること十二ヶ月、合掌して生れたる真魚なれば、其時よりして佛弟子になすべきものと、吾も思ひ、妻も固く信じたる所にこそ」

真魚はかくと漏れ聞きて、我が耳を疑ふばかり駭きたり。駭くが中にも、我が身の佛縁深きことを、少なからず喜べるなり。

「殊に貴物の舉動を見侍るに、同じ頃の童子の竹馬を走らする中にて、荒びたる遊戯もせず、狗兒をいたはり、砂を平らして字を習ふなど、總ての行ひ世の童と異りて、神の御前、御寺の門を通る毎に、誰教へぬと合掌して過るを常とし、いかに神託兒と思はるゝ節のみ多く侍る」

母上は尤ふる心を壓ゆるやうに、吾が身の平生を語り給ふなり。

「仰する如くんば、懐胎十二ヶ月を経たるは異相なり。我が朝にて聖徳太子、大唐

にて不空三藏は、共に十二ヶ月を経て生誕ありしと承まはりぬ。以ふに或ひは聖人の兆瑞たらんも知るべからず。宿縁は自から其の萌芽發はるゝものなれば、今一兩年がほゞ、何事をも強ずして、其の爲んやうを見給ふこそ可かるべけれ」

外舅上も今は仁義を説き給はず、略ぼ父母の御旨に委せ給ひしなり。眞魚は勝利者の如き喜悅を浮べて、欣然として後を顧みるに、姉上はいつしか覺め給ひけん、半身を起して、眞魚の後影を一心に拜みつゝ在しき。

一念の眼りのうちに、千萬の夢あり……性靈集

第二 わらは堂

佐伯氏は大伴氏の一族として、讃岐の國に世々を經し名門なりき。今其系を釋ぬるに、

高皇產靈尊の子に、天忍日命といふ者ありしが、天孫彦火瓊杵尊の日向高千穂の峰に天降りまし、御時、大來目部を帥めて御前に立ち、神忍を護り奉つりぬ。忍日命三代の孫日臣命に至りて、神武天皇の東征に隨ひ奉つり、大來目部を率ゐて、嶮を冒して山を踏み、難を排して行を啓き、菟田の縣に到りて兄猪を誅し、かば、天皇、忠にして且勇、能く導く有るの功を加へしを賞して、勅して道臣命の名を賜ひにき。之れを大伴氏の祖とす。道臣命より七代の孫武日命、始て大伴の姓を稱し、折しも景行天皇四十年の秋、皇子日本尊を以て大將軍と爲し、武日命及び武彥命を以て左右將軍と爲し、東の方蝦夷を征せしめ給ひし事あり。武日命勳功世を蓋ひしかば、讃岐の國を賜はりて、私宅の地としたりし也。武日命の子大伴武持連、仲哀天

皇に事へて、始て大連に任せられ、武持の子室屋も亦大連を以て、允恭、安康、雄略、清寧、顯宗の五朝に歴仕し、大伴家の名聲冲天の日の如し。室屋の子嗣は、紀小弓と共に勅を奉じて新羅を討ち、命を鋒鏑に致し、が、兄御物は宿禰の姓を賜りて讃岐を治め、其子倭故連に至りて、始て讃岐國造に任せられ、倭故の子歌連の時、遂に佐伯宿禰と稱する事となりぬ。是れ即ち神別の佐伯氏が祖先なりとす。かくして、平曾古連、平彦連を経て、伊能連に至るまで、四世連綿として襲ぎ來りし國造の職は、孝徳天皇の二年、舊來の官職を改めて、新に百官を置かれしかば、國造の廢官とも、任せられたる職司を失ひ、伊能連が子大人の代となりては、宿禰の姓をも賜はらず、左右いづれの京職にも買せられず、同じ大伴佐伯の門葉の、姓を改ためて左京職に屬せられ、光りと慶びとを齎らして、京路に徙めたる者も少からぬに、歌連の子孫のみは、獨り累代の國に潛み、徒らに世にふる軒端を守りて、多度郡屏風ヶ浦の舊館に、御代は十四つぎ、年は百四十年の長き春秋を明し暮したるなり。

今の主人は、北名を佐伯直田公といひて、血氣壯んの丈夫なりき。父を男足といひ、祖父を相波都といひ、曾祖父が即ち大人なれば、世に若はれずなりてより、茲に四代を經たりしなり。然はいへ、衰へたりとも、歴代國造の門閥なり。屏息たりとも、在住六百七十餘年の名族なり。氏族は多く枝葉を生じて、到る處に其の影を仰がざるなく、姻戚は連りに脈絡を通じて、四方に彼の門を望まざることなし。さすがに遠祖武日命の毛人を征服せし殊勳の餘光は、今尚ほ玉藻の海を照らすなりけり。

眞魚は、この殘んの光りに包まれて、傾く母屋の奥深く生れ來じ、田公が第二の男子にぞある。

母は阿刀氏の女にして、名を玉依とぞ稱おなる。貞淑の開え世に隠れなく、早く田公に娶られたれども、所天が兄なる佐伯直道長には、男の如く事へて、常に弘田の郷の館に存問を闕くことなく、又夫の弟大足には、生家阿刀の家を嗣しめて、親しみ愛すると、眞の同胞に異ならねば、慈鳳の契りいと濃かに、琴瑟常に能く諧和して、既に男女四人の子を擧げたり。即ち第一は男子にして、家を繼ぐべきものなれば、専ら弘田の本館に在り。次は女子にして名を手枝と稱び、屏風ヶ浦に咲ける一朶の花、神

女の忘れし挿頭かどを誤またれぬ。仲は眞魚にして、季も男子なり。眞魚よりは五歳劣りにて、今八歳の髻亂だち、名を直魚とは稱ばるゝなり。

光仁天皇の寶龜五年甲寅の歲、水無月望の曉天、千尋の海より金色の光明輝き、五嶽の頂に紫雲捲曳きて、人々奇異の念ひを抱く處に、月を越すこと二ヶ月に及べども、産に臨んで母體を苦しめることなく、いと安らかに分娩し、は、相好端正の男兒なりき。時は三伏の極暑ながら、佐伯の家には春風戰きて、眞珠に擬らへ、黄金に比へ、嬰兒を稱え、家の祥を壽ぐ者引きも切らず、一家一門うち集ふて、嬰兒の前途を慶び祝ひぬ。父なる田公の悦びは言ふも更なり、母なる玉依は、我が胎より出でたる兒ながらも、神の御手づから賜はりし寶の如く思はれて、頓て眞魚と命名て育し立て、茲に十二の春を迎へけるなり。

前夜の風は遺子なく飲まりて、穩かなる朝風となりぬ。海の音靜かに、朝日かけ聞らかなる園生に下り立ちて、兎の水に夢のなごりを洗ふ眞魚の後に、姉の千枝は莞爾として佇立みたり。

眞魚は驚きてより向きぬ。千枝は懐かしげに寄り添ふて、拭ひ了へたる手を確と握りしめぬ。

「貴物ぬし」

「お、姉の公」

同胞は何故ともなく互ひに面を見交しぬ。千枝の眼には、未生以前より神祕の寶輪を授りて僧となるべく生れ來し吾が弟の、不思議の光明が映するなり。眞魚が眼には、遠からずして萱原氏の妻となるべき吾が姉の、望み多き未來の輝きが映するなり。背に臥床を敷き並べて、枕に就きたる時までは知らざりし互ひの運命の、唯だ東の間なる小夜の寐寐に、秘密の影のさゝやきに決したるを怪しみて、他す其の面を見交すなりき。

千枝は看るゝ敬虔の念ひを生じて、伶俐なる心の閃めきとのみ見し瞳子の、何となく人間ならぬ光明を放つやうにて、穢れ多き凡夫の自等が、吾が弟として狎れ來し事の、そら恐しきやうに思ひ初め來つ。

握りし手を徐かに放ちて、

「いざ諸共に朝餉に」と、吾から一步踏み出しぬ。
眞魚はその後邊に随ひながら、前夜の物語りの顛末を思ひ續けつゝ、朝餉の席には列なりたるなり。

外舅の大足は、文學を以て京洛に在り、今は今上第四皇子、伊豫親王の學士として、從五位下阿刀宿禰太夫とは召さるゝなり。

外舅太夫が物語るを聞くに、當今は稀なる聰明の皇帝に涉らせ給ひて、神武天皇より已還、歴朝の都は多く大和の國を離れず、殊に元明天皇一ひ平城の京に宮居し給ひてより、御宇は七朝、年は七十六年に及びしを、海水遙かにして貢運の利なく、四境山を環らして出入の便なければ、是れ帝王の都すべき國にあらず、坐ながらにして天下を制すべき地にあらずと思召し、去年俄かに遷都の事を定めさせられ、藤原種繼、佐伯今毛人、紀船守をして造長岡宮使たらしめ、急ぎ山背の國乙訓郡長岡の里に新宮の造營あり、四垣も未だ完からぬに、十一月に迫りて新宮に徙御させ給ひき。造り遂せたるは、僅かに内裡のみにして、太極殿八省院は、尙辛うじて礎石を据ゑにし

まゝなれども、皇帝にしてこゝに御し給へば、四方の民は子の父を慕ふが如く來り集り、坊門に家居を營むにぞ、舊都の民は遠たしく家を徙して、新都の民とならんとし、今年の春は、兩都の混雜言ふばかりなしとぞ聞えし。

外舅太夫は尙は語らるゝ、新宮の造營は、實に今毛人が董工の功多きに居るなり。曾て造東大寺使となりし時は、日々齋戒して工を督し、かば、皇帝は戯むに東大居士と稱ひ給ひし事あり、造寺の工程最も宜しきを得たるにぞ、後また造西大寺使には補せられしなり。されば、這回の造長岡宮使としても、身を戒しめ行ひを慎み、毎朝金剛經を讀誦して董工したりしかば、諸役孰れも歸服して、悦んで其の用を勵みしなり。此頃皇帝は太く收獄に耽り給ひて、萬機の政務は、常に皇太子早良親王に委ねさせ給ふが例なりき。されば、皇太子は右大臣藤原是公に諮らせ給ひて、今毛人を參議に任じ給ひつるを、中納言藤原種繼いと快よからざる事に思ひ、こは以ての外御沙汰かな、佐伯氏の人にして參議に至るもの、古來曾て其の例を聞かすと、切に其の不可なる所以を諫争したり。種繼は内大臣良繼が甥として、君寵の優れてめでたき

のみならず、娘薬子が中納言藤原種主に嫁ぎて擧げたる孫女を、第一皇子安殿親王(後年の平城帝)に納れたれば、言として聴かれざるはなく、這回の遷都も、原は種繼が勅めまゐらせつと聞ゆる程なれば、皇帝もげにもと思召させられ、今毛人の參議を停めて、從三位に叙せられたりしなり。かくと知し召し、皇太子の憤はり思召しつるのみがは、大伴佐伯の人々は、齒を切み腕を扼ばつて、種繼が專横を憤慨したるなり。時しもあれ、持節東征將軍として陸奥に向ひし中納言東宮大夫大伴家持、任を終へて歸洛したりしかば、良繼百川擁立の功に矜りて、人もなげなる藤原氏の横暴を深く忿り念ひつゝ、一び氷上川繼が叛反に與したる家持、いかで一族の屈辱を賦止すべき。忽ち大伴佐伯の兩族を集へて、種繼殺戮の密議を凝らし、未だ發するに及ばずして、家持は病ひに冑され、齷物たる憤懣と、颯爽たる雄姿と、渾然たる詞藻とを併せ齎らして、瀟灑として薨去したりき。

らざりしかば、造宮使に於ても油を以て唇に繼ぎ、工匠役夫の多くは、初夜過ぎならでは脊を脱がぬ程なりき。種繼は今しも炬を照らして、其日の工程を巡檢すべく、職司を隨へて工作の場に歩みを運べり。爾の時、暗より暗に身を潜めて、炬の火光に見えつ隠れつせる種繼を認めて、弓に矢つがふ二人の伴男ありけり。振り照らす炬に種繼は矢頭に向つて進み來れり。かゝるべしとは毫知らぬ種繼が、更に一步を進める時、闇を破つて飛び來れる征矢は、二すぢながら種繼の灸所に中りて、聲をも立てず斃れたるなり。此の變報の平城京に達するや、皇帝は急ぎ還幸在らせられ、太く哀悼せさせ給ひ、正一位左大臣を贈らせ給ひて、一面には其賊の搜索を嚴命在らせられたり。されば、右中辨石川名足は、勅を奉じて先づ左少辨大伴繼人、近衛伯耆麻呂、中衛柱鹿木積麻呂及び大伴竹良を捕らへ、嚴かに鞫問したるに、射殺したるは、椗麻呂、木積麻呂の二人なるが、謀主は故の大伴家持にして、家持の歿故、主税頭大伴眞麻呂、大和太政大臣大伴家持、春宮小進佐伯實成、竹良等と謀つて、早良皇太子の旨を奉け、種繼に誅伐を加へしよし、事情總て明白になりぬ。皇帝赫として怒らせ給ひ、繼

人、眞麻呂、竹良、高成等を誅し、梓麻呂、木積麻呂を縛めて和繼の柩に告げ、之れを山崎橋の南に斬らしめたるが、家持は既に歿せるを以て、其官符を追奪し、早良親王の皇太子を廢して、遠くこの淡路が島には流しまゐらしむに、其御怒りに惱ませ給ひけん、途にして終に薨去ましましにけり。親王は同じ井上皇太后の御腹に生れましつる皇弟にて在しますに、我が大伴氏に御心を寄せ給ひしかば、かくも御痛ましき終焉を留め給ひぬ。此の變ありしより、我が主の皇子伊豫親王には、この殷鑑に深く世を戒れさせ給ひて、長岡京に營み給ふべき新殿をば、片山里に結び給ひて、及びべくんば都の塵に遠ざかり、世の嫌疑の外に在らまほしと仰せ給ひき。是れ誠に賢き御用心にこそとて、大足は深く洪敷したるなりき。

權勢に憧れる人の心に燃ゆる火は、前途を遮る人を焼き盡すのみにて満足せず、己自身をも燒き了るまで執念きものなる事を、眞魚は今始めて聰き知りたるなり。聰き知りて深く人間の慾望の忌むべく懼るべきものなることを感じ得たるなり。自分も長じてはかゝる邪念に囚はられて、修羅の火に骨を炙らるべきかと思へば、即ち吾

が身それ自身までが、いと怖しき鬼のやうに感じ來るなり。

その席を離れて蒼皇しく園生に出でぬ。萬頭の浪波を吹き渡る風に、畏怖に熱したる頭を拂はせて、濃淡參差たる新緑の五嶽を仰げば、心に何ものかのさくやきを傳へて、吾は再び故の清けき無垢の我に復りぬ。

かくして寃を傳ふ清水の下に歩み行くほどに、心に傳へられたるさくやきは、自ら了解することを得るに至れり。

「あゝ、吾は前世よりの佛弟子にて在りけるものを」

正しく昨夜の夢物語を思ひ浮べて、心の底より權えぬ怡悦は湧き出るなり。一念ここに至る時、身は香水に洗はれたらんが如く、心は無念無想の境ひに放たれたらんが如く、清くして軽やかなるを知るのみなり。足に任せて園生を歩み去るに、荒れたれども館は廣し。用ひされども棟は多し。幾曲りとなく家角を折れて、丘に添ひたる處に到れば、山藤の高く紫の影を落す下には、岩脚の花咲き初めて、雲井遙かに杜鵑も名乗りやすらんと想はるゝなり。

真魚はこの藤の花を、紫の雲のたゞよふかと疑がひぬ。丘の根方には土を掘りたる痕ありて、良き土の湿りを帯たるが穿起されたり。彼方を見れば、家の修繕に用ひしにぞあらん、木の細く削りたるもの、竹の小まかく切りたるもの、葉や細の屑を塗れて掃き寄せられたり。此の時、真魚が眼には、言ひ知らぬ塵き光りを放ちて、木屑を把つて粘土を掘取りたるなり。夫れをば頓て手もて担ねて、或物の形を造り、さて目を限り、掌を合せて、暫らくが間黙禱してありしが、再び担ねたる土を手を受けて、木屑を把つて形を改め、看る看る愛らしき土偶は出来にけり。

真魚は一心に土偶に工を施しぬ。暫らく時を移す程に、今度は眉目の清秀なる、相貌の端嚴なる一個の地藏菩薩とは成り給ひしなり。真魚は意に喜ぶものゝ如く、石を拂ひて其の上に安置しつゝ、幾たびか禮拜したりしが、更に掃寄せられたる木屑を集めて、丘の半腹に小やかなる童堂を營み、藁もて家根さへ繕へたるに、改めて夫の地藏尊を奉安したりき。

上には紫雲捲曳きぬ。左右には躑躅の花籠を繞らしぬ。一掬の水、一縷の香は缺つら

ねども、慈悲圓滿の地藏菩薩は、能化の威徳を具足しますなりき。真魚は遂げ得たる造佛の慶讃として、其前に葉折處まで跌坐しつゝ、吾が知る限りの經偈を唱ふるなり。

心ゆくまで拜し了りて、やをら坐を起てる時、侍者の其後に躑ばひゐて、父と外舅との召すよしを申し次ぐなりき。

真魚は寛の水に手を淨めて、父の在す處に行きしに、外舅の木夫は快よげに打笑み

「今二柱の御物語を承まはりつるに、汝は宿縁の避け難き因あれば、長じてのちは僧にせましこの思召しなり。汝を何如考ふるぞ」と、打解けて問はせ給へり。

真魚は麗はしき眼を父の方に辿らするに、御心長閑やかに微笑み給ひて、吾が心を疾く酌み知り給へるものゝ如し。真魚も今は躊躇ひて何かせんと思へば、一文字に結びたる口を正しく開きぬ。

「如來の御弟子となりて、聖教に従ふ身とならば、いかに嬉しく候ふべき」

「爾思はい夫れも可からん」と、憐れむやうに笑ひ給ひしが「去りながら、今の世

に尊敬せらるゝ高僧の如く、唯だ僧綱にのみ心をかけて、如來の眞趣を廣くにする愚僧とは爲るまじいぞ。徒らに竹頭木屑とならんよりは、圃に耘り田に耕し、一握の粟、一穂の米を作るには如じ。やよ、眞魚よ、一世の師表となるべき大決心やある」

大足の辭句の眞撃なるだけに、眞魚は動かすべからざる意志を示して、而も明白に首肯たりき。

田公は浴くるやうなる慈悲の言葉を垂れて、徐ろに語を挟みぬ。

「眞魚よ、外舅の公の仰せらるゝには、縦令佛の御弟子と成りぬとも、大學に出して文書を習はしめ、身を立つるに如かじこそ。されば、先づ外舅公の御教へに随ひて、論語、孝經より史傳を學び、兼て文章を修むる事とせよ。文學の士を外舅に頂きし身の幸ひには、今日より教へを受くることも如意なるべし。いかに祥多き貴物かな」

頭を低げて承まはり居たる眞魚は、固より欲する所の學問なり。我が前途には、断えず身を照らす光明の輝やけるを認めて、邁進の意氣は止めんとして止まらず、欣然として太夫の教授を仰ぎたりき。

第三 洛のぼり

長岡の新京は、猶ほ如月の天の如し。柳は翠の糸を繰り、桃は紅の火を灯して、都大路の春の粧ひ、今や漸く整はんとしつゝ、而も一面には萬樹尙ほ花を開かず、落葉依然として緑の衣を展べざるの趣きあり。大内裡は疾く造營を終り、太政官院も三年前に成りて、今は百官の朝座も定まり、十二の宮門嚴かに繞つて、其の規模全く成れるものから、之れを平城の古京に比ぶるに、紫魏の威嚴尙ほ未だしきものあるを感すべし。

新京は旨と貫運の利、交通の便に基きて地を相し給ひければ、南は大淀の岸に臨みて、江口神崎より漕ぎ上る舟を繋ぐべく、西は山崎の橋を隔て、攝津職の通路に方りぬ。北は向日の岡に至り、東は田圃を隔て、桂の川瀬に限られたり。左京の陸に春日三笠の嶺列なり、右京の盡る處に、外山、秋篠の踞まれる古京に比すれば、方境稍や廣く、乙訓川の流れを中央として、之れより東西二京を分ちたる市區の狀は、了得

に新都の利を見ざるにあらねども、遷都の事餘りに急なりしかば、子來の民今尚ほ意を古都に遺し、家を移すもの、思ひの外に多からざるを以て、九條の大路、上下の坊門こそ商賣の店棚は櫛比すれ、小路園子の裏々に至りては、民の籠も稀れにして、坐ながら鳴の羽掻きをも聞きつべし。況して諸王の殿舎、攝神の邸宅未だ全く成に及ばず、伽藍の偉觀を加ふるものなく、神殿の神聖を増すものなければ、新京は宛然白衣に冠せる人の如くなりしなり。

眞魚は外男太夫に伴はれて、新宮の大路を歩めるなり。都の内外を通じて、神社とては大山咋命を祭れる乙訓の社と、刹佛とては早良太子を幽し給ひしと聞く乙訓寺とのみにて、乙牟漏皇后の御願に依り、春日の神を遷し奉りて、大原の郷に造營ありし大原の若宮は、境域の新たなるからに、未だ崇敬の威徳備り給はず、看るものとして、一も眞魚の心を悦ばしめたるはなかりき。

往き／＼て向日の岡に杖を立てぬ。大足は新京の經營を隈なく指點して、彼處は何、此處は何と手に取る如く物語れり。

「右京の西、二條大路の南に、埒結ふたる廣き地を見るならむ。彼處の草の間より點々として見ゆるものこそ、頓て汝が學ぶべき大學の礎石なれ」

大足の意にては、吾が養雪の苦を積んで學ぶべき養舎の、葦蓐々しく建て列ならん日を想望して、いかに神旺んに氣の揚ることならんと思ひしなり。かく説き聞かせて竊かに眞魚が色を伺ふに、西に向ひたる眼は、いつしか東の天に轉じて、遙かに登ゆる高嶺／＼を看やりてありき。

眞魚はやをら良の方を指しぬ。

「外男公、彼處の高嶺は、同じ山背の山にて候ふか」

「彼處とは、あの嶺の二つに分れたる山の事か」

「なにこそ」

「彼處は山背と近江との境なり。山は比叡の高嶺といふ」

「此の新京に對しては、誠に無雙の名山にて候へ。いかなる神明か鎮り在ますか？」

眞魚は尚ほ飽かずして、比叡の高嶺を眺めやるなり。

「さればなり、彼の山には大津宮の御時より、大山昨命跡を垂れ給ひしを、近き來
大安寺の齋澄といふ僧、彼の嶺に分け登つて、修禪の草堂を起し、この神を地主權現
に勸請し奉つり、日吉山王大神現とは申すとかや。されど、我彼の嶺に登りしにあら
ねば、詳らかなる事は知らず」

大足は事も無げに物語りしを、真魚は眼を据え耳を傾け、一心に聴き居たりき。

「其の齋澄法師とやらんは、世に聞えたる大徳にて候ふか」

「否とよ、深き事はよく知らねど、大安寺の國師行表和尚の徒弟にして、十八歳
にして戒壇院に具足戒を受け、翌年修禪觀法の發心を生じて、彼の嶺には攀ち登りし
なり。そは四年ばかり前の事なりしかば、今茲まだ二十一の青道心にぞあらんづら
ん」

「何、十九歳にして彼の靈山を開きしとや」

真魚は圓なる眼を睜りぬ。

「先づ頃、近江の國より來つる學生の語るを聞きしに、彼の僧、彼の嶺を常住の地

として、自ら三尊の佛體を彫み、根本中堂を造つて、盛んに天台山智者大師の教義を弘
通するといへり。方外の事は我の興る所にあらねば、可否とも語り難けれども、年
少にして別に宗義を立せんとするを見れば、此の齋澄如法の凡僧には非ざるべし」

大足も真魚が熱誠に動かされて、遂に我が知れる限りを傾けて語り盡せり。

尙ほ彼の嶺より眼を放たざりし真魚は、いと大人びたる歎息を漏らして、口の裡に
て微かに咳けり。

「現にや佛日は未だ地に墜ち給はざりしよ」

されども、この語大足が耳には入らざりけん、怪しんで問ひ質す事もなくて、真
魚の瞳子の大比叡の嶺より轉するを待ちつけたらんやうに、いざとばかり相拉へて、
其のまゝ岡を下り去りぬ。

時は維れ、延暦七年戊辰の歲、佐伯の真魚が十五歳となりし春の事なりき。修
學の効空しからで、文章の才、筆道の力、著るしく上達したりしかば、今は郡に置き
て何かせん、疾く京洛に遊學させ給ふべしと、阿刀太夫大足よりの催促頻りなりしか

ぼ、田公夫妻も今は引き留むべきやうあらで、八潮に倍する愛を割きつゝ、眞魚を放つて遊學の旅には上したるなり。京洛に友を負つて、鐵雪の苦を積まんことは、眞魚に於ては素より希ふ所なれば、即ち欣然として父母の膝下を辭しぬ。怡然として別れし我が家に別を告げぬ。順風を得たる海船に、滿腔に漲る志望を載せて、深よく漣を屏風ヶ浦に解きたるなりき。

沖に出て願望すれば、讃州の山河は一時に收りて、我が郷土の意圖しさを懐はしめぬ。今我が船出しの岸を見やるに、人は尙ほ濱邊に立ち盡して、遠ざかり行く我が船を見送るなりき。父公も彼の中に立交りてや在すべき。母上も妹を抱きて此の船を指さしてや在すべき。沙上を走る豆の如き影は、弟の我を追ふにはあらぬかと思へば、眞魚の目には俄かに八重葎の挿曳きて、屏風ヶ浦は臙の底に隔られたり。その模糊たる體を破つて、魂然として斐の時つものは、今朝まで起臥し、我が家なり。彼處の後園の丘上に結びたる童堂には、我が手づから造りたる御佛在しましぬ。姉上にしゝ在さんには、關連を返み、香花を獻つりて、懈怠なく給仕したまふべけれど、誰か

能く吾が心を繼いで、朝夕仕へまつるべき。かくと心づきたらんには、念持佛として携へ奉りしものをなき、憶りなくも懐郷の情を抱きながら、眼を拭つて再びうら眺むれば、陸路は既に遠く隔りて、五嶽の峰のみ霞の外に立ち列なれり。

「おれこそは倭斯邊山なれ、別て崇高き山形かな」

眞魚は思はずもかく叫びて、一心に合掌する間に、船は二箇の島を巡りて、いつしが故山を隔てたりき。

江口より川舟に乗り代へて、大山崎の東に着きたる時に、阿刀の外舅大足の待ち受けて、我が宿所へ伴ひたるなり。されども、當時の土木は、未だ大學の齋舎に及ばずして、學生は皆な平城の京に在り。一二年が程にて、新京の齋舎も成り、大學を擧げて移さるべき運びなれども、眞魚も大學に入らんには、更に古京の客とならざるを得ず。大足は先づ此の順序を告げ知らせ、新都の經營を歴覽せしめたるなり。

大足は固より皇子に仕ふる學士なり。朝暮の宮仕へに暇なければ、私に旅に上るべくもあらず。先づ眞魚を我が宿所に留めて、文學を授くるに、寔に郷人の崇めて神童

能く吾が心を繼いで、朝夕仕へまつるべき。かくと心づきたらんには、念持佛として携へ奉りしものをなき、憶りなくも懐郷の情を抱きながら、眼を拭つて再びうら眺むれば、陸路は既に遠く隔りて、五嶽の峰のみ霞の外に立ち列なれり。

「おれこそは倭斯邊山なれ、別て崇高き山形かな」

眞魚は思はずもかく叫びて、一心に合掌する間に、船は二箇の島を巡りて、いつしが故山を隔てたりき。

江口より川舟に乗り代へて、大山崎の東に着きたる時に、阿刀の外舅大足の待ち受けて、我が宿所へ伴ひたるなり。されども、當時の土木は、未だ大學の齋舎に及ばずして、學生は皆な平城の京に在り。一二年が程にて、新京の齋舎も成り、大學を擧げて移さるべき運びなれども、眞魚も大學に入らんには、更に古京の客とならざるを得ず。大足は先づ此の順序を告げ知らせ、新都の經營を歴覽せしめたるなり。

大足は固より皇子に仕ふる學士なり。朝暮の宮仕へに暇なければ、私に旅に上るべくもあらず。先づ眞魚を我が宿所に留めて、文學を授くるに、寔に郷人の崇めて神童

と稱えしに差はず、夫稟の穎才は直ちに金線に觸れ、發すれば必らず律を作さずといふ事なく、一を聴いて十を悟ること、宛然響の聲に應ずるが如くなりき。特に文章を試むるに、更に思索を費やさざるが如く、題に應じて咄嗟に筆を走らせ、句を構へ文を行ふこと、駿馬に鞭つて坦々たる平地を駛するに異ならず。其の文を見れば、近き唐家の骨法を擧んで、綺語麗句あやの如く、最も銑鍊を経たるもの、如し。且又、大足をして驚歎せしめたるは、其の事迹なりき。書は幼稚かりし頃より、深く好める道にして、曾て新たに舶齋したる、王右軍の蘭亭記の帖を興へたる事ありしが、今此の文を書ける文字を見るに、楷行相半して少しも拘束したる所なく、意に任せて筆を下したるもの、如し。筆端尙ほ稚氣ありて、故らに巧を弄ばざる所、却つて言ふべからざる妙を見るなり。運筆は固より王羲之の流れを酌めども、字樣は時に王獻之に習ひたる痕あり、筆勢に萬斤の力ありて、書態の温豊にして餘地を有するなど、見れば筆々神あり、字々靈あり。書を以て世に立つとも、此兒の前途は、極めて多望なるべしとぞ首肯かれぬる。

家に留めて自ら師として授くるに、伏膺仰讀して聊かも旨に乖くことなく、紙背に徹する眼光もて讀破し、燃犀の英才もて攻究して、毫も懈たる事なければ、數月にして業を卒るもの、常人が半載の成績よりも夥多なりき。かくては、獨身放ちて大學に入るゝとも、更に心を苦しむる所なしと思へば、大足も、一日も早く大學の門を出て、多年埋もれたる佐伯の家を興さん日を迎へまほしさに、進んで三日の公暇を願ひ乃ち真魚を拉へて、幾年ぶりにか平城の古京を訪へるなり。

秋はまだ淺けれども、那羅坂には葛の花の路を遮りて、行人の歩みを逡巡はしめぬ。日は膽駒嶺の天にかかりながら、山陰の叢には夕露はやくして、兒手柏の一枝を手折るにさへ、杖は露に濡れつべし。大足は般若坂に杖を駐めて、斜めに西をうち看やれば、金色の光り瑣として、夕陽に映じて眼を射來るものあり。大君臨せ給はずなりて、こゝに五年に及べども、常世をしめたる礎に動きなくして、今も碧瓦の雲に沖る朝堂院の鷗尾なりけり。大足の胸は奇しく蕪きて、言ひ知らぬ懷舊の情に打たれつつ、茫然として輝く鷗尾を見てあるに、その西なる西大寺も、おぼろげながら幾見え

來つ。猶ほ心置に南の方を目を辿らするに、唐招提寺、藥師寺、遙か東南に位する大安寺までも目に落り來れり。西大寺の望まざるは、内裡の諸殿の毀れたるが爲なるべけれど、唐招提寺と藥師寺とは、其の伽藍右京の四條と五條とに在りて、共に二坊大路に並び建てるに、不退寺の家根をかすめて、遠く望むことを得たるは、一條二條の公卿の邸宅の、新京へ引かれたる爲ならず。況して左京六條の四坊大路なる大安寺の、擁はるゝものなきを見ては、僅か五年の間にして、古京の街衢のいかに荒れ果しかぞ想はるゝなり。大足はさすがに露けき眼をしはたゝめて、多くを見るに忍びざりき。左に眼を刺すれば、嫩草春日の山々は、昔ながらに笑みて迎へぬ。良辨が相、大佛の殿、正倉院の校倉まで、林檎の間に點々として指さすべし。古りにし京は荒れもせぬ、七大伽藍は巍然として信仰の上に聳へ、梵鐘潮音遠く兜率の天に響くを聽きては、七朝崇敬の威嚴鎮々へに輝きて、平城の偉觀の壯重なること、是ばかりは長閑の意に在りて、夢にも見られぬ光景なりかし。

斯く思ふに、大足の意はいと壯んになりぬ。世と人とは新を趁つて長閑へ去

りぬとも、法輪と山河とは、王者の力も輒く移し難かるべし。嗟乎、佐保川の水は東にも流れずして、今も青柳の影をうつして、蛙を聞かせて歸しつる若をわぶらん。溪聲を傳へぬ。雅長峰は北を擁し、眉間寺山は南に峙ち、昔しながらの佐保山は、懐かしき風の吹き終えずして、人の心を引き着くるなり。大足は古京の勝概を指點して、詳らかに眞魚に説き聽かせぬ。眞魚は一心に耳を傾けて、由來久しき名所を聽き了れり。

「何處へ宿を求めんより、今夜は我が知れる法師が庵の軒をかりて、緩やかに休息せんは何如？」

大足はかく言つゝ、眞魚の答へを待ちぬ。

「何れにも外男上が御心に随ひ侍らん」

「さらば、是れより直ちに彼の御寺へ參りなん、荒れたる都の姿を見んも哀れなれば」

坂の下より路を東に轉じて、興福寺の石垣に添ひながら、猿澤の池を巡りて、寺々の間を潜り、こゝ春日山の南、高圓山の半腹なる石淵寺を訪ふにぞある。

第四 たのむ蔭

高き低きとりくに麗はしき蟲の聲をかすめて、遠く唳々たる鹿の鳴音を耳にしなから、大足と眞魚とは、年少き沙彌に導かれて、木の葉に露の零る音さへも聴きつべき、いと奥まりたる山房へは通りたるなり。

燈火の微かなる處に、二人の僧の膝を交へて相對するを見き。一口の僧は、眉濃く顔色猪みを帯て、氣宇の廣潤なるを懷はしひれども、他の一口は、瘦肉にして色蒼く、いかにも弱々しき法師ぶりなりき。互ひの齡には甲乙なかるべく、三十年を多くは出入せまじと見えたるが、骨肉の如き親み以て、さも睦ましく語らふなりけり。

遺戸を排して一歩進みし大足を見るより、眉濃き僧は心からなる笑みを浮べぬ。

「や、阿刀文學にて在はしつるか。さても珍らしく訪はせ給ひけるかな」

あはや坐を起つて迎へんとするに、大足は手を舉げて推止めたり。

「先づ其のまゝに居させ候らへ。我よりこそ推参せめ」と、見識らぬ弱法師を憚り

て、少しく歩の逡巡はるれば、

「さらば無禮ながら座を動くまじ。是れなるは大安寺の同宿にして、法類としても更に親しき善友なれば、聊かも御心置かせらるゝに及ばず、いさ此方へ」と、上座の方を指し示すなり。

「謙讓は却つて無禮なるべし、さらば免させ給へ」

大足は強て推讓することなく、彼の法師に目禮して、眞魚を引具しつゝ、席の上にて座に就きたり。

「好榮主、此方は伊豫親王家の學士、阿刀木夫にて、貧道か翰墨の先達にて在します」

主の僧に紹介されて、好榮は蒼き面をいと低く下げながら、

「小僧は勤操の法弟にて候ふ、是より永く御目を賜はり候へ」と、法衣の袖をぞかき合せける。

「そは我より申すべき語なり。内外道は異なれども、學ぶ志は是れ一なるに、爾後

は勤操大徳と同じく、隔意なく教へさせ候らへ」
大足も語の禮を返して、さて真魚の方を顧視つ、

「是れに召伴れたるは、讃岐より物學びのため参り止りし、我が佐伯真魚と申す童にて候ふ。年は尙だ十五歳ながら、大學に遊せなるとて、此方には伴ひ参りしなり。勤操大徳には、童子を一人預けられしと思召されて、兎にも角にも後見を煩はし奉つらん。やよ、真魚」ぞ、呼びかけて、自らは少しく膝を退けたりき。

兩僧の視線は等しく真魚の身に注がれたり。真魚は膝にしたる手を大床に下して、恭しく稽顙きぬ。

「不束なる凡小の身ながら、偏へに大徳の御手に絶りて、所學の科を卒へんことを冀ひまゐらせぬ。あはれ、御弟子とも樹はして、警策を加へさせたび給へ」

言訖つて袂かに首を掻ぐるに、虚誠の氣眉宇の間に現はれて、何處に許りの影の潜めりとも見えず。好榮は連りに頭を掉つて、深く感歎するものゝ如くなりき。

端正なる容姿、明晰なる辭句、長を敬つて自ら畏れざる真魚が態度を、つくづくと

打目成りたる勤操は、かき合せたる袖の中にて、念珠を敷へながらも、心に言ひ知らぬ快感を得て、庚し難ねたる怡悦の笑みを浮べたり。

「大夫には良き俵子を持たれけるよな。麟兒風難、やがて榮達は如意なるべし」

「大徳の賞讃は甚だ過分なり。鄙にてこそ郷人等に神童と稱えられし事もあれど、都に出ては法の如きの國人にこそ」

大足はかく言ひながら、勤操の賞美には、自から胸襟くを覺えき。

「いやとよ、貧道は曾て妄語戒を破したる事なし。永き目もて前途を視たまはし、貧道の欺かざるを知られなん」

「實に勤操主の道はるゝ如く、少酒等は不敏にして、未だかゝる圓満具足せる神童を見たる事あらず、將來の福運の、はや芽を抽んづるを見給はずや」と、好榮も傍らより贊辭を加へたるなり。

大足は之れをも推遷する辭を知らず、微笑を含んで傍へを顧みるに、真魚は知識の激賞を愧ぢてか、淡紅に染たる面を垂れて、臍に染めたる奴袴の膝をのみ諦視居たり

打目成りたる勤操は、かき合せたる袖の中にて、念珠を敷へながらも、心に言ひ知らぬ快感を得て、庚し難ねたる怡悦の笑みを浮べたり。

「大夫には良き俵子を持たれけるよな。麟兒風難、やがて榮達は如意なるべし」

「大徳の賞讃は甚だ過分なり。鄙にてこそ郷人等に神童と稱えられし事もあれど、都に出ては法の如きの國人にこそ」

大足はかく言ひながら、勤操の賞美には、自から胸襟くを覺えき。

「いやとよ、貧道は曾て妄語戒を破したる事なし。永き目もて前途を視たまはし、貧道の欺かざるを知られなん」

「實に勤操主の道はるゝ如く、少酒等は不敏にして、未だかゝる圓満具足せる神童を見たる事あらず、將來の福運の、はや芽を抽んづるを見給はずや」と、好榮も傍らより贊辭を加へたるなり。

大足は之れをも推遷する辭を知らず、微笑を含んで傍へを顧みるに、真魚は知識の激賞を愧ぢてか、淡紅に染たる面を垂れて、臍に染めたる奴袴の膝をのみ諦視居たり

「阿刀氏には重ねて御目にかゝるべけれど、今宵は是れにて御暇申しなん。さらば寛かに在しませ。」

好榮は會釋とも座を起つに、勤操は強て止めんとせす。

「奉養もさる事ながら、御身の病痾も大切なり。克く心して服薬を怠り給ふな。病ひ重らば母刀自のいかに憂ひさせ給はん。明日また重ねて訪ひ参らせじ。」

懇ろに問ひ懇めつ、渡廊にして袂を分ち、勤操のみこそ歸り來にけれ。

大足は去にし好榮の後影を目送り居つるが、勤操の席に復るを待ちて、いと心許なげに問ひかけぬ。

「只今の御僧は、今も猶ほ大安寺に在するにか。」

「然なり。善議和尚に隨從して、今尚ほ空宗の奥旨を究むる、寔に得難き龍象なれども、惜ひへし多病にして、見らるゝ如く太く衰弱へて候ふなり。」

勤操はかく語る中にも、双の眼に涕涙を湛えて、更に濕へる聲を低めぬ。

「彼の沙門はいと感ずへき篤行ありて、食道は之れが爲に心を傾け、眞の弟として隔なく交はり來ぬ。彼の沙門に一人の老たる母在せるを、彼は遠く離居するに忍びず、

太門の側らに小さき家結びて、自己は小僧一口を養ひ、常に自己に代つて奉養せしむるなり。和子も御聴き候らへ、人の子は熱く聞きて熱く自己に行ふべき道をかし」

勤操の句を斷つて膝を改むるに、大足は冠を正して耳を傾けたり。眞魚は唇を固く結びて息を呑み、すゞしき瞳子を凝視たるまゝ、きき主僧の面をうち仰ぎぬ。

「されども、彼の沙門は、食道と同じく猶ほ凡僧の境界なれば、老母を養ふ資を得る途にてはなく、齋時を受くる所の飯をば四に分ち、其の一分を以て母に奉つり、一分を小童に與へ、一分を丐兒に施行して、残れる一分にて自ら養ふなり。先づ小童して齋を老母に奉つらしめ、小童の歸るを見るや、母上はいかに在し、ぞと問ふ。奉つりし飯は、遺子なく給へさせたまひぬと答ふれば、始めて意を安んじて箸を下すこと、一日とても渝る事なし。若し母尚ほ食し給はじといふ時は、其のまゝに箸を收めて、決して一粒だも咽喉を下さず、湯水をも口にせずして、母を案じて已まざるを常と

す。是れ眞の孝子なり。此の故にこそ貧道も真逆の交りを経ひて、彼の沙門を思ふこと身を思ふが如くするなれ。さればこそ、彼の沙門が病弱を憂ふること、亦我が身の病める如くするなれ」

世を遁れ身を捨てたる佛弟子の眼にも、孝に感じてせぐり来る涙ばかりは止まらざりけり。大足は素より孝を百行の本と立つる學士なり。方外斗蓋の法師にも、かゝる至孝の人あるかと思へば、暖まかねたる感涙の底より、自から意を強からしむる心地ぞする。

眞魚は俯したる面を得擡げざりき。身は幸ひにして、両親の健かに榮へさせ給ひて、夥多の兒等膝下を圍繞し奉つれば、吾が身一人在らずとも、奉養の缺くる事はあらねども、別に御悲しみの深かりしは吾が身なり。御悲しみの厚き餘りに、貴物さへ稱えさせ給ひて、吾が身を塵に塗らせず、御佛の御前に獻げて、永く清淨心を保たせんとはし給ひじなり。佛門に歸する事は、父母の御志なり。我が身の素願なり。前世よりの宿縁なり。疾く此の飾りを落して、圓頂黒衣の身となりなば、父母はいかに

御満足に思召すらん、いかに悦び稱え給はん。吾が身に於ける第一の孝徳としては、

唯だ此の一義あるのみなり。偶淨き山寺に來り、目のあたり得難き知識に遇ひながら、尙ほ父母の御志をも、吾が身の切なる素願をも、また先天の宿縁をも、并に遂ぐることを能はざるは、斷ち難き過去の業果ありて、かくは念ひを慥すにや。外舅の太夫は、何故吾が身を俗典に繋がんとはし給ふやらん。設令佛門に歸するとも、五常の道に盡さんと思へば、好笑法師の如くせんこと、敢て難き業にはおらじをぞ、いと切で思ひ運びずなりけり。

大足は卒かに忘れたる事を思ひ得たらんやうに、小膝を拍つて眞魚を顧りみづ。

「おー！ 眞魚には尙ほ告げざりしよな」

眞魚は遠だしく面を起して、

「いかなる御事を、外舅上」

「此に在する勤操大徳が御上を——」

「いかにも未だ承まはり候はず」

「然なりしか」と、首肯しまへて後は語らず、更に勤操の方にうち對ひぬ。
 「大徳、奇蹟は孤にては候はぬとよ。此の兒も、父母の夢に天竺の聖人來りて、懐
 中に入ると見て振りつと申して候ふ」

「真魚よ。此の大徳は當國高市郡にて、俗姓は秦氏の人、御母は島史より出給ひ
 き。然るに久しく嗣の在じまされぬを憂ひ給ひて、數羽龍寺の玉像の前に詣で、香華を
 供へて誠を表はし、精勤に祈念し奉つられしに、明星懷に入ると夢給ひて、此の大
 徳は生れ給ひしなり。御悼ましくも父上には孟く別れ給ひ、孤の身の歸なきをば、母
 上の家に鞠育まれて、年甫で十二といふにぞ、大安寺の信靈大徳に就いて、遂に得度
 し給ひしなる」

大足は嚴かに説き聽かせぬ。勤操はさあらぬ方に向ひて、断えず念珠を繰りて在り
 しを、真魚は且つ聽き且つ窺ひて、外男の語の終るをぞ待ち居たる。

「さて景雲四年の秋に、一千の僧を度されし中に、千勤の一として選ばれ給ひしが、
 十六歳の頃、閑寂を渴慕して、鷲座を厭惡するの餘り、遂に忘歸の思ひを懷いて、和

泉國傾尾の山窟に躋り給へり。然るを母上の嚴召し給ふにぞ、南嶽を出て寺に歸り、
 爰に登壇して具足戒を受け、善哉和尚に師事して三論の幽蹟を窺けられ、かくて今日
 の徳は輝けるなり。今よりは此大徳を父母とも崇め、大足とも視て、努めな怠りそ。
 努な悖りそ」

かくて大足は、更に再び勤操を拜せしめき。真魚は之れを拜するうちにも、良き師
 主が許に寓りたる事を、深く深く悦べりき。

法界は惣て是れ四恩なり。六道誰か佛子に
 あらざらんや……………性體集

第五 法の首途

是に於て龍毛公等、一たびは懼れ、一たびは辱ぢ、且は哀み、且は笑ひ、舌に任せ
て俯仰し、音を透つて方圓す。喜懼踊躍、稱えて曰さく、吾等幸ひに優曇の大開裂
に遇ひ、厚く出世の最訓に沐す。誰か昔未だ閉ざるの後葉、豈有らんや。吾若し不
幸にして和上に遇はずんば、永く現欲に沈み、定めて三途に没しなん。今僅かに提
撕を蒙りて身心の安徹すること、譬は震霆響きを發して蟄蚊の封を開き、朝鳥輪
を轉じて幽闇の水のごと濁るが如し。彼の周孔老莊の教、何ぞ其れ偏腐なる哉。而
今而後、皮を剥ぎて紙と爲し、骨を折りて炭を造り、血を刺して銀に代へ、鬪を畢
して研に用ひ、敬しく大和上の慈誨を銘して、戴ち生々の航路に充てむ。
假名の曰らく、復座せよ。今三教を蔽ふに十韻の詩を以てし、汝等の諒諒に代へな
む。乃ち詩を作つて曰く、(原漢文)

作心漁孔教。馳憶符老風。雙營今生始。並哀來葉終。

方現種覺尊。圓寂一切通。智深深瀾海。慈厚瀾英龍。
悲普四生類。恤均二子衆。誘他專爲業。剛己兼作功。
汎濫船六度。素拔車兩空。能淨翔三夢。覺惡濁泳塵夢。
兩諦非殊處。一心爲塞融。庶幾擾々輩。速仰一如々宮。
這の詩を以て一大論文の結尾となし、要然として形管を擲らる眞魚は、屢滅せん
とする燈臺の灯をかへげつ、今始めて稿を脱したる長篇の巻を繰りかへして、更に
冒頭の起首より校警せんとするなりき。

卷き戻したる開卷の第一行には、黒浪淋漓として「雙營指歸一卷並序」とぞ題せら
れける。此の題號より少しく下して、更に三行の題目は列記せられぬ。曰く「龍毛先
生論」。曰く「虛亡隱士論」。曰く「假名を兒論」。この下に多くの空白を存したるは、自
ら序を下さん料なるべし。眞魚は棄たる筆を再び執りて、十分に墨をふくませたる
が、件の三行の小題目に並べて、

「觀無常賦」

「生死海賦」

と新たに二行の題目を書き加へたり。

書燈の油は今や盡くるに垂として、夜は將に明けなんとすらむ。唯冬の夜のいさや
明け難にして、人は温かき夢の底に沈み、輒く覺めんとせず、時知り顔に告げ渡る
鶏の音さへ、耳にする者とはなきぞかし。呻吟譚はしき大學の寮とはいへ、人は宛
然死に盡せるが如く、静寂なること幽谷の孤屋とぞ誤またるべし。かゝる中に端坐し
て、獨り寛やかに我が文を校し行くに、心澄み氣安らぎて、手に隨つて卷の解くる聲
のみ、林の中に葉磨の音を聞く如くに夜を破るなり。

眞魚の眼の光りは電の如く紙の上を走り。卷は轉讀さるゝ大般若經の如く、流る
るばかりに卷舒せり。眞魚が此の卷を展べて、第二行の稿を起し、は、前夜の初夜過
る頃の事にてありき。素より胸に成竹ありて、後に筆を下しつるものなるべけれど
も、紙に臨んで深く構思を凝らし、手を止めて熟字句を練る事なく、筆を下せば忽ち
にして文を成し、綺語麗句珠を聯ね華を織り、金言警章千古に光き肺肝に硯せずとい

ふ事なし。殊に記して濼境に入り、神旺んに興高く到る時の如きは、飛ぶが如き臺の
走りをも、猶ほ遲きを憾むべく、紙に落る筆の聲は、利き及物の板を斷つが如き響き
なり。かくして前夜も黎明の頃まで須臾も休まず、今宵も書き去り書き來つて、僅か
信宿の間にして、この三論二賦より成る「豐蔭指歸」は、全く其の稿を脱するを得た
りしなり。

校し了りし眞魚は、手逸く手に卷を巻き收めて、筐の蓋をうち抜き、其の底深く秘
め藏しき。尋で机上の筆硯をも拭ひて、是れをも異なる筐に收めき。敗紙は一葉づゝ
燈火を點して焚き棄てき。其の室内に一物の散逸するなきを見極めて、やがて書燈
を滅して衾を被きつ。

「豐蔭指歸」一卷は、眞魚が滿腹の熱血を傾倒して、其の志を宣明したる大文字
なりしなり。今その大要を左に略述すべし。

爰に鼈毛先生といふ儒家ありき。九徑三史を心藏に括囊し、三憤八索を意府に暗憶
し、蕞秦、張儀も舌を巻き聲を飲む雄辯家なるが、偶休暇の日に兎角公といふ人の館

を訪れたり。兎角公には蛭牙公子と稱する外甥ありて、心は狼の如く、性は虎の如く、神儀に稱がれず、博奕を業とし、山野に獵し、河海に漁し、酒を嗜み、色に荒みて、無頼驕慢の痴漢なりしかば、兎角公爲に頑心を覺示し、愆愆を教悟してよと請ひたるなり。先生も、上智は教へず、下愚は移らじとの故を以て一たびは辭したりしも、兎角公の哀願の切なるに、默止すべき術を知らず、遂に懸河の妙辯を振つて、蛭牙公子に對して、善を仰ぐの類は麟の角よりも稀に、惡に耽けるの流は、龍の鱗よりも繁き所以を説き、嚴かに、二親を侮つて告面の孝なく、下萬民を凌いで隱恤の慈なきを責め、侃々諤々寸毫も假さず、遂に郷を撰んで家と爲し、土を簡んで屋と爲し、道を擡つて床と爲し、徳を挈へて褥と爲し、仁を席として座し、義に枕して臥し、禮を被つて以て寝ね、信を衣て以て行ひ、日一日より憤めば、以て台鼎に登り、以て槐棘に齒し、毀を衆舌に斷ち、名を簡牘に策し、百年の樂みを快くし、寰中の逸樂を縱まくにすることを得べし。豈盛ならずや、豈樂しからずやと説破し、淳々として、親に事ふるの孝、君に事ふるの忠、友に接するの美、後を榮ふるの慶、身を立るの本、

名を揚ぐるの要を誨へたりしなり。粵に蛭牙公子もつくく前非を悔いて、敬つて命を承まはりぬ、今より以後、心を専らにして習ひ奉りなごを誓ひける。兎角公も席を下つて再拜して、雀變じて蛤と爲るの諺は、今日のあたり蛭牙の鳩心の忽ち化して鷹と作りしにて知るを得たりと、滿腔の感謝を致したりき。

時に盧亡隱士側らに在て笑つて曰ひき。異なる哉卿の藥を投するや、卿の病を療する如くんば、治せざるに如す。藍毛先生愕然として曰ひぬ。先生若し異聞あらば、爲に啓沃せよ、乞ふ春雷を秘する莫からんことを。隱士の曰く、嚇々たる弘陽も、盲聾の流は其の眼を見ず、跛々たる霹靂も、聾耳の族は彼の響を信せず、矧んや太上の秘録、言凡耳に遡なり、天尊の隱術如何ぞ妄に説かん。血を歎つて盟を遣し、骨に鑲めて信を示し、地を築いて誓を約せと。乃ち命の如くして後、徐ろに不死の神術を授け、長生の奇密を説き、身臭塵を離れ、心貪慾を絶ち、目遠視を止め、耳久聰すること無く、口麁語を息め、舌滋味を斷ち、克く孝に、克く信に、且つ仁、且つ慈、千金を賺るに蓋芥を以てし、萬乘に臨んで而も脱屣の如くし、纖腰を視ると鬼魅の如くし、爵祿

を見ること腐鼠の如くして、然る後始て學べば掌を指すに異ならず。既に仙を得んか、日中影を論め、夜半能く書し、地下を徹曉し、水上を能く歩み、鬼神を隷と爲し、風を起し雨を起し、鍊金の術、仙丹の法、形を改め髪を變じ、命を延し死を削るも亦如意なりと道ふ。藍毛兎角、蛇牙等並び稱えて、我等幸ひに好會に遇ひ、方に知る、金石隔りあり、薰蕕比なきことを、今より専心神を練り、永く斯文を味はんと誓へるなり

假名乞兒は何の人なるを知らず。容色頗爾し、體形羸弱たり。長脚、骨豎地邊の驚の若く、縮頸筋連泥中の龜の似く、嘘口翳なく、孔雀貝の似く、缺唇齒疎に狡兔の唇の若し。或告て曰ひけらく、惟ふに人の勝行は惟孝惟忠、一生の娛樂は惟富惟貴、季に萬鐘を悲むは、唯だ逆る親を感じ、泰じて九仞に登るは、當に主に仕ふるに由る。今子親あり君あり、何爲ぞ養はざる仕へざる。徒に乞丐の中に淪み、空しく迷役の輩に雜はり、行ひを辱しめ名を陋す。宜しく早く心を改めて忠孝に就くべしと。假名答へて曰へらく、親を安じ主を匡くるを、忠と爲し孝と爲すは、伏して命旨を承はり

ぬ。余不肖なりと雖も、猶ほ頗る禽獸に異り、一念離れず心憶深歎す。夫れ父母の覆育提挈し玉ふこと感戴なり。其功を顧みれば、高きこと五岳に並び、其恩を思へば、深きこと四瀆に過ぎたり、骨に缺り肌に銘して誰か敢て遺忘せん。僕聞く、小孝は力を用ひ、大孝は置さずと。是故に秦伯は髪を剃つて永く夷俗に入り、薩陞は衣を脱して長へに虎食と爲り、父母地に倒るゝの痛みを致し、親戚天に呼ぶの歎きなりき。此に因て而して視るに、二親の遺體を毀ち、九族の念傷を致すこと、誰か復此の二子に過ん哉。當に卿の告る如くんば、並に不孝を犯す。然りと雖も、秦伯は至徳の號を得。薩陞は大覺の尊と稱せらる。然らば則ち、苟も其道に合はば、何ぞ近局に拘はらん。羅下の母の苦みを抜き、那舍の父の愛ひを濟ふは、寧大孝に非ずや。亦善友に非ずや。余愚陋なりと雖も、雅訓を斟酌し、遺風を鑽仰し、毎に國家の爲に先づ冥福を廻らし、二親一切悉く陰功を讓り、此の慧福を總ぶるを、忠と爲し孝と爲す。然るに、卿は但筋力の盡すべく身體の屈すべきを識つて、未だ于門の應に高かるべく殿墓の應に掃ふべきを視ず。何ぞ其れ劣しと哉。

是の如く固執して、萍の如く諸州に遊び、蓬の如く異域に轉じ、聚洛の京に赴き、兎角の舎に到りき。即ち涙を流して首を摩し、悲みを含んで噓しけらく、吾汝等の論を聞くに譬は氷に鑽り水に書けるが如し。龍毛の鳧脚も未だ短しと爲すべからず、虛亡の鶴足も長しと爲すに足らず、汝等未だ覺王の教、法帝の道を開かざる乎。吾當に汝等の爲に略は綱目を述べしと、鈴々の金錫を振ひ、階々の玉聲を馳せて、龍毛等の爲めに無常の賦を賦し、受報の詞を顯はし、生死海の賦を述べ、大菩提の果を示して曰へらく、峨々たる妙高、岫岫として漢に干くも、劫火に焼れて以て灰滅し、浩浩たる溟渤、沉滯として天に滔るも、數日に曝されて而も消竭す。吾等體を棄ること金剛に非ず、形を招くこと瓦礫に等しく、萬乘の寶姿も、寸煙に伴ひて、而も玄微に厲はれ給ひ、罽絹の娥眉も、霞を逐つて以て雲間を飛ぶ。百味を食へる婀娜たる風體も、徒らに犬鳥の屎尿と爲り、千彩を裝へる煙緩の龍形も、空しく燎火の中に燃焼して、春花秋葉朝夕に紛糺たり。無常の暴風は神仙を論せず、奪精の猛鬼は貴賤を嫌はず。壽を延る神丹、魂を返す奇香、服然し盡すも、片時も留むべからずして、尸骸は

草中に爛れ、神識は油釜に煎られ畢んぬ。嗚呼痛しい哉。吾若生る日に勉めずんば、

一苦一辛、萬歎萬痛、更に誰人にか凭らん。

是の如く説き來り説き去つて、具に大覺の雄を諭し、彼の老莊を斥けて、神仙の小術とし、孔孟を排して、俗塵の微風とし、共に言ふに足らざるを説き、遂に前に掲ぐる結論に到達したるなりき。

之れを要するに、「世警指歸」は、孔、李、釋の教旨の優劣を論じて、真魚自らか適從する道を明かにしたるものなりき。即ち是れ、此の年頃頭を推籍の裡に没して、盤雪を猶怠るに拉り、繩錐を勤めざるに怒り、汝々として遊聽したりし槐市に對しては、斷乎として別離を告るの文なりしなり。更に大聖の誠言を信じ、飛焰を鑽燧に望んで、三寶に歸命し、眞福田を渴仰せん爲めには、昭乎として發心を宣誓するの盟約書たりしなり。

明る日、多くの學生等は、岡田博士が左氏春秋の講説ありといひて、足を空にして講堂に出で行きぬ。岡田博士は、讃岐國寒川郡の人にして、殊に文學を以て京に出で、

大學の大博士となりぬ。外従五位下佐渡部首牛養といひしが、同國同學の因み淺からず、古くより阿刀大足とは旨合へる友なりしをもて、猶大學の平城の京に在りける頃より、眞魚は専ら此の博士に誘はれ、其の紹介せに因りて、初めは直講味酒淨成に従つて、毛詩、易傳、尙書の類を讀みたりき。博士は今茲表を上つりて、生れし家の讃岐寒川郡岡田村に在るを以ての故に、岡田の姓を賜らんことを奏請し、其の姓を賜ふと同時に、大博士には任せられたるなり。眞魚は今も博士の愛弟子として、進んで左氏春秋を問ひ居れる事とて、一番にこの講筵には趨せ參すべかりしに、恬然として關り知らぬもの、如く、獨り寮に留まり居て、心靜かに行李を理めたりき。

箕都已還八年を経たりければ、長岡の京も條坊の市廊櫛比して、都門の景物は悉く整ひたり。大學の移されてよりも、方に三年の春秋を送りて、人は漸く平城の京を忘れんとするなり。眞魚は自ら行李を肩にして、住み馴れたる大學の門を出で去りぬ。更に馴れにし長岡の京をも棄て、忘れんとする平城の京に奔らんとするなりき。冷泉院の前を過ぎて、二條の右京に典藥頭朝野宿禰魚養が舍を訪へりき。

此の宿禰は眞魚が筆道の師なりき。平城の京に在りし程は、外従五位下忍海原連とて、勳操大徳の方外の友なりしかば、偶眞魚が手習ひするを見て、運筆の麗れるを正されたる事ありしが、此時大徳に對して道ひけるには、此兒が蘭亭記を手習ふを見るに、毫も其の字形を摸さんとはせず、只願に王右軍の筆法を修めんと努むるなり。此の一事既に世の字を習ふものと異なるに、筆力の勁健にして字様の蒼潤なる、正しく天才と覺えたり。惜むらくは、初めより王羲之の帖に就て、而も楷草の間のみ習ひつる事とて、往々字劃に誤謬りあり。我筆道の家にあらねども、輪池は好める道なれば、彼の天才を導くために、眞楷を授けんと思ふ。大徳はいかに思すらんとありしかば、乃ち良師を得たるを悦びて、ここに師弟の約を結びたるなり。

かゝる因みある師資の間ながら、眞魚は固く心藏を鎖して、自己の意を懇ふる事は爲さざりき。唯だ少時平城に赴きて、石淵寺の閑靜を味はひたしとのみ物語りつ、やがて身の暇を告げぬ。

發するに臨みて少しく首を傾けたりしが、忽ち莞爾とうち笑みつ。

「近き程に阿刀の外男に會はせ給ふ御事のあるべきにや」

「必らず會ふべしと言ひ難けれど、また必らず會ふまじとも言ひ難くこそ」

魚養は半白き鬚を捻りて微笑みき。されど、真魚がうち噤りてあるを見て、急に思ひ浮べたらんやうに、

「さなりき。さなりき。木夫には近ごろ宮の御召に應じて、親王の北山の山莊に渡り居給へるかし。彼處は物寂て面白き處なれば、是れより訪はれてはいかならん。定めて幾多の詞藻に入るものあるべく、笑養は忽ちにして膨れなんものを」

真魚はまたもやうち傾きて在りしが、心竊かに斷する所ありけん、清き輝やきを雙の眼に發して、手にしたる行李を肩に上しぬ。

「否、彼處へは參り候ふまじ」

「然なるか。さらば、叔父公に何事をか申し傳ふべき」

「恐れながら、大足に御出會遊れん折、真魚は太く経籍史傳の學びに努めて、静養のため、姑らく高圓山の幽邊に歸臥したりと、唯だ一語御傳へたじ給へ」

「そは心得ぬ、必ず傳へ參らすべし」

「師の君にも此間逢ひ上つる事難かるべし。臘月の天いと寒ければ、切に老體を厭はせ給へ。さらば再會まで」

懇懇に一禮するどやがて、踵を回らして門外遠く出で去りにけり。

文は執見に随ふて隠れ、養は機根を運ぶて現はる。譬へば天と鬼との見る所別にして、人と鳥との明と暗とする所異なるが如し。顯密論

第六 あかぬ門

「貧道はこれ山寺の坊守のみ。何の徳あつて足下に師と仰がるべき」
勤操の面には若々しき血の浮びて、聲にも三十五歳の光澤は満ちたり。

「仰せには候へども、真魚が心田に菩提の種子を下し給ひしは、大徳にて候らひし」

両手を突き立て、稽顙き拜したる真魚は、少しく面を起して下より勤操の顔色を、窺ふなりき。

「否」と、鋭く首を掉りて、きつと真魚を視下したるが、須臾にして面を反向けつ。

「貧道は曾て足下を佛弟子として預りたる事あらじ。大學に通學する間、幼かりし身の保護を託されて、物足らぬ山院には留め置きつるのみ。法縁なければ、固より師資の縁あるべうもなし」
断じて聽き入れまじき意を、語の勢ひに仄めかして、勤操は堅く口を結べりき。

かくても真魚は志を翻へさざりき。益曇りなき聲に力を加へて

「そは大足への御樹酌に候はんが、憚りながら所由なき御遠慮とこそ存せらるれ」

「樹酌とや。遠慮とや。否、否、否。樹酌にもあらず、遠慮にもあらず。貧道は唯だ文學の徒として、阿刀木夫より足下を託されたれば、其の託を守りて足下の迷惑を正さんとはするなり。太夫の教言に隨ひて、更に大學の科擧を受け、名を揚げ家を興し給へ。成業の春を目前に眺めつゝ、夫れに背きて道に入るやうやある。返すくゝも足下が意の誤りなることを、疾く自ら覺り給へ。太夫の御心をも思ひ察し給へ。構へて遁世人の上を羨み思すまじきぞ」

大徳の語氣は漸次に和らげり。遂には却つて慰め賺かすやうになりぬ。真魚は聴きつゝ莞爾として笑へり。

「そは真魚が誤解にては候らはざりしよ。真魚は國を出る始めより、名を揚げ家を顯はさんが爲めに、大學に遊んとは思ひ設けざりしなり。既に大學に遊びて後も、曾

て科を経て青雲に登らんとは望み願はざりしなり。初一念は常に一貫して、今も猶は父母の膝下を辭する時と毫渝りつるには候はず」

「されど、されど、太夫は爾か仰せざりき。貧道は慥かに爾か承まはらざりき」

「さも候らひけん。文書を習ひて身を立しめんとは、唯だ大足が私の望みに過ぎ候はず。眞魚は十二歳の春の季より、心は既に佛門に入りて候ふぞや」

「心既に佛門に入りしといふとも、そは私の所思のみ。既に大學に學ぶに於ては、科擧を受くるが當然ならずや」

「大學に遊びし事は、固より眞魚の本意にては候はず。されど、經籍史傳に眼を暎し、兼て文章を學びなば、聖教に入りて後、發明する所速かなるべしと思ひて、心ならずも五常の道を歩みつるのみ」

「それも亦、足下獨のみ爾か心得つるなるべし」

「否、大徳。否、否、大徳。父も疾くより爾か命じて候ふかし」

「何？、父公もとや」

大徳は奇異の目を睜りて、熟々眞魚が面を視やり居たり。

「然り、大徳」

眞魚は順風に帆を掲げたる如く、一氣に漕ぎ沙らんとするなり。

「父も曾てより佛弟子と作すべしと申して候ふ。否、父のみには候はず、母も御佛へ獻げんことを、深く冀かひて候ふなり。是れ宿縁の催す所、同胞も亦爾か望みて候ふなり。大徳よ、御聴かせ候へ、父母は眞魚が事を天竺の聖人が子と申して、貴物と悲しみて候ひき。唯だ僧を厭ふて世間の人たらしめんとするものは、阿刀の外男のみにて候ふかし」

かく説明らめたる眞魚は、口を結びて次で發せらるべき大徳の疑問を待ち受けたり。されど大徳は目を瞑りて、深く思ひに沈めり。膝に爪繰る念珠の音の、いと蕭やかに聞ゆるのみなり。

沈黙せる大徳の意識より、絶待の峻拒の消え去らんとする傾向あることは、慧聰なる眞魚は疾く看破せり。

「去りながら大徳、眞魚は深く佛菩薩を信するのみにして、未だ曾て一巻の經文も習ひ候はざりしを、過る年これの御寺に參じ、大徳より大盧空藏菩薩、能滿虚空藏法呂を授けられ、始めて佛法の教旨を知り候ひき。此の求問持法といつば、入唐沙門道慈律師より、吾師善議和上に傳へられ、和上之れを貧道に傳へらる。今汝に授ければ、汝は是れ四代の相承なり。能く心を入れて念持せよ、此の眞言を誦して二百萬遍に及ばば、即ち一切教法の文義を暗記するを得んと仰せられてより、生れ得て初めて法味を嘗め、今日まで決して怠らず念持して候ふなり。かるが故にや、遂に乃ち朝市の榮華は念々に之れを厭ひ、巖藪煙霞日夕に之に飢ゆ。輕肥流水を看れば、即ち電幻の歎忽ち起り、支離懸弱を見れば、則ち因果の哀休ます。されば、大學に在りても恒に思ひ候ひき、我今習ふ所の上古の俗教は、眼前にして都て利弱なし、矧んや一期の後をや。速かに此の風を止めて、眞の福田を仰ぐには如かじと、さてこそ自から槐市より退き、こゝに師の引導を冀ひ候ふなれ」

眞魚は初めてはらくと熱涙を漉ぎぬ。投るが如く双の手を床に突いて、額をはた

と叩き着けぬ。

講はらぬ心の欲ふには、いかで意念を焦さざるべき。勦換大徳が爪繰る念珠は、掌に握られたるまゝ、動きもやらず、音も立てずなりぬ。仰ぎがちなりし面は、較や伏目に傾きしかど、猶ほ睡りたる双眼のみは、毫も開かんとはせぬなりき。

眞魚は火の如き息を吐きて、紅き面をきと擡げぬ。一言集語血を吐かんばかりの熱情を示して、更に志を聲明するなり。

「眞魚が佛弟子とならん志には、父母同胞に於ても、誰あつて拒む者はあらぬに、外舅公一人遮つて之れを制し、我を縛るに五常の索を以てし、我を斷るに忠孝に乖くを以てせらるゝなり。去りながら大徳、眞魚の思ひ候らひつるには、物の情は悉く一つなるにあらず、天を飛ぶもの、水に沈むもの、其の性は全く異なるなり。是故に聖人は人を騙りて三種の教の網に入らしめ給ふ。是れ所謂釋、李、孔には候はずや。淺き深きの隔こそ有れ、並びに皆な聖人の人を教ふる道なれば、若しこの三つ網の一の羅に入らんには、何とて忠孝に乖くべき。かく思ひ決めたれば、斷じて新京に

は歸り候ふまじ。師弟の義は叶はずもあれ、薪を採り水を汲みても、いつかな此山を下り候ふまじ」

席に匪らず巻くべからず、石に匪らず轉ばすべからず。其の立志は磐石なり、其の決意は金剛なり。勤操も初めて慈れみの眼を開きて、徐ろに眞魚を視たり。

「法師は欺くべしといふとも、眞佛は欺くべからず。妄語戒を破する者は、大叫地獄に墮して、永く青黄の管を受けん。汝は今明らかに不妄語を誓ひ得るや」

「仰せまでも候はず、命のまに／＼誓ひ奉つり候はん」

「其の語に伴りなくば、誓ひは其れにて十分なり」

「さあらば、眞魚が素願を容れさせ給ひて、御弟子の末に加へさせ給はんや」

「いかに今より徒弟として、吾が學びたる道を傳へなん」

「いかに御仰せ候ふぞ」

眞魚は歡極まりて狂するばかり、踴躍して幾たびか師を拜しぬ。

「去りながら眞魚よ、三論は法の帝王にして大乘の妙旨之れに盡せり。悉地の修道

は容易ならじと承知せよ」

大徳はかく説くうちに、いつしか端嚴なる相貌を現じて、眞魚をして二見して恭しく稽顙を拜せしめつ。

「三論宗といつば、中論、百論、十二門論に依て宗義を立するが故に、爾か名づけらるゝなり。此の宗に二つの相承ありて、嘉祥相承、賢首相承と稱ぶ。嘉祥相承といつば、始祖龍樹菩薩之れを提婆に傳へ、提婆之れを羅喉羅多に傳へ、羅喉羅多之れを青目に傳ふ。青目の後に、龜慈國沙車王の子に須利耶蘇摩といふ者あり。大いに三論に明らかなりしかば、之れを羅什三藏に傳へしが、羅什六十三歳にして、三論を奉持して東晉の西涼州に入り、八十一歳にして姚秦の長安に到り、之れを翻譯したるぞ、やがて支那に於る三論の始めなりき。門下三千の中、道生首座を以て曇濟に傳へ、曇濟之れを道明に傳へ、道明之れを嘉祥寺の吉藏に傳へ、吉藏の時この宗大成して、其の資高麗の慧灌、我が推古天皇の三十三年、之れを奉じて來朝し、遂に元興寺の僧正となりぬ。慧灌は本朝三論の首祖として、之れを吳國の人福亮に傳へ、福亮其子智藏

に傳へしが、智藏は後入唐して嘉祥に學び、歸朝して法隆寺に入り、之れを道慈律師に傳へ、律師亦之れを吾が師善識和上に傳へ給ひ、茲に相承を得て貧道に傳はりしなり。賢首相承は、青目尊者より出て、賢首菩薩之れを唐國に將來し、則天武后の尊榮を受けたりしも、傳燈こゝに滅してまた照らさず。されば、我が宗は是れ唯一無二なるぞかし。かゝる由緒ある宗門なれば、汝の道心を見るまでは、得度とは叶ふまじ

真魚は謹んで承まはりしが、是に至りてきと首を擡げぬ。

「何ぞ得度は叶ひ候はずや」

「苦行修練して先づ其の心を佛にせよ。夫れまでは、近士として修行すること可からるべけれ」

「いかに近士と仰せ候ふや」

「そればなり」

大徳はまた慈愛に富める毗を垂れて、

「此にいふ近士とは、五戒を得たる優婆塞が事ぞ。抑五戒は、外典に五常の教あると同じく、仁義禮智信を謂ふなり。即ち、怒み傷んで殺さるるを仁と曰ひ、害を防いで煙せざるを義と曰ひ、故らに心に酒を禁するを禮と曰ひ、清察にして盜せざるを智と曰ひ、法に非ざれば言はざるを信と曰ふ。此れを五徳と爲す。造次にも虧くべからず、須臾も廢すべからず。王者は之れを履つて以て國を治め、君子は之れを奉て以て身を立て、用ひて聖賢することなし。故に五常と曰ふ。天に在つては五緯と爲し、地に在つては五嶽と爲し、處に在つては五方と爲し、人に在つては五藏と爲し、物に在つては五行と爲し、之れを持つて五戒と爲す。其の由來久しくして、天地の始に萌し、萬物の先に形くるなり。先づ此の五戒より保つべし」

真魚は言下に了解する所ありし如く、潔く命を拜しぬ。

「誓つて制戒を保ち候ふべし」

「お、實にこそ勤操が徒弟なりけれ。さらば法名を命すべきぞ」

「は」

眞魚は益首を大床に摩り着けぬ。勅撰は彼れか此れかどうち案じつゝ、遂に「無空」の二字を撰して、之れを以て眞魚が名をば呼更へたるなり。實に眞魚が俗世間の年歴は、十八年を一期として、今延暦十年の歳と、もに盡さぬるなりき。同時に近土無空が、新たに佛に事ふべき、第一日をも迎へつるなりき。

生死の苦根を断ち、菩提の妙樂に至らんを欲せば、先づ福智の因を積み、然る後に無上の果を感致せよ……… 理趣開題

第七 山 また 山

柿本人麻呂が目に白雲と映じけん、花の吉野山に嶺を横め丘を合せて、縦我として天を摩するものは、神の在す金峰の高嶺なり。南は釋迦ヶ岳、彌山の大峰に列なり、峰巒起伏し巖窟出沒しつゝ、或は嵒巖たる峻嶽となり、或は嶙峋たる絶障となりて、綿々として紀の三熊野なる那智に及ぶ。世に釋尊の法を説き給ひし靈鷲山の跡なりと傳ふるが如く、嶺高く雲近ければ、間なくを雨は降り、時しく雪は降りつゝ、深く人跡を塞したりき。

この神祕の雲を開きて、初めて足跡を印けたるは、役公小角なりけり。文武天皇の大寶の初年、行者葛城の嶺を出て、金峰に分登りしが、やがて葛城とこの峰とに石橋を架け渡し、行路を通すべしと思ひしかば、先づ葛城より神工を起して、山神を役して巖石を運びしめ、晝夜工を督しつるに、其の工程いと遅々たりき。小角怒りて山神を呵りたるに、山神等對ふらく、葛城の一言主神其の形甚だ醜きを愧ぢて、晝は

役に就かず、夜のみ出で来るが故なりとぞいふ。行者大いに怒りて、孔雀明王の呪を修して一言主神を縛りしかば、架橋遂に成らずなりて、行者は担を負ふて唐土に飛行し、從爾已還九十餘年の久しきにわたたりて、一人の靈跡を踏むものなく、徒らに鬼魅の栖むに委せ、蘇苦殿を覆ふて攀づるに處なく、榛棘山を塞いで歩むに路なし。雲嶺を包み雪谷を埋めて、全く人寰の外に翩然たりしなり。

ざるを怪しむべし、延曆壬申孟春の日、深嶺は猶ほ玄冬の雲に閉され、仰いで巔を望めば、巔々として銀の針を樹えたらんが如く、雪の峯氷の崖、日光に反射して久しくは眺むべからず。俯して麓を視れば、榛々たる荆棘縦横に枝を交へ、塔を編み網を遮り、茅茨頭を没し、朽葉脚を埋めて寸歩も移すべからず。加ふるに雲霧脚下に起つて、深漠として晝猶晦く、魔風頂上に暴れて、浙瀝として氷塊を擲つ。この日この時、樹を倒して籬を踏え、葛藤を抜いて巔を攀づる優婆塞ありけり。鬼神は穢れを忌んで悪風を起し、魔魅は人を咒ひて毒霧を下しけん、山嶽鳴動して霞霞礫の如く、其の悽愴言はん方なかりしが、彼の優婆塞は一進一退、弛ます倦ます歩を運びて、一難

を觸る毎に銳氣百倍し、遂に山頂に攀ち登ることを得たり。

登り得たる頂上は唯だ雪の峰なりき。眼を放つて八表を展望するに、視界に入るものとは、また白雲と白雪となりき。颯々として雪より雪に吹きわたる寒風の凜冽なる、肉を破り骨に硃りするばかりにて、耳は裂け眼は抉れんとせり。されど、彼の優婆塞は泰然として氷雪の席に趺坐し、靜かに修禪の恥を閉づるなりけり。殊に驚くべきは、幾重の衣を襲ねても、尙ほ肌寒を欺つこの料峭たる春寒を、葛の衣唯だ二重のみ身を掩ひて、足は素跣のまゝにして、色をも變せざる勇猛心の熾なるにぞありける。

かく放膽なる捨身の行を修するものは、則ち是れ石淵寺の近土無空なりき。

無空は勤操大徳に激勵せられて、忽ち大宿願を發し、直ちに平城の京を辭して、山林を經行しつゝ、苦練煮修に日を重ね、心のまゝに精進道を顯はさんため、先づこの會て人跡を留めざる金峰に登りて、心靜かに默禪を修めんと試みたるなり。獨往庵留の如意は即ち如意ながら、其の艱難苦痛は譬ふるに物なく、殊に雪氷を以て錦褥に

代へ、葛衣を以て綾織に代へたる事なれば、互寒凍隙皮肉の底に徹して、これか爲に死せんとすること幾回なるかを知らず。されど、無空は其の度毎に金剛心を振ひ作して、專念に虚空藏菩薩の法を持し、益不退轉に行ひ澄ましたり。かくの如くして五七日に渉るほどに、春風山雪を融いて、頂上日漸く暄かになりぬ。乃ばち無空は三十五日の禪座を棄て、飄然として金峰を降り去れりき。

されど、尙ほ高圓山の淨院に歸らんとはせず、吉野の山々を歴覽して、是より南に行くと一日程、更に西に向つて去ること二日程にして、樹立幽邃なる名山に到り着きぬ。其の地勢を相るに、葱嶺銀漢に挾さんで、白峰碧落に接けり。即ち棧梯を開きて登りて覽るに、經途繁廻として三十里に隣り、山嶽重疊として千萬層を屏す、峻壁を蹴らずして忽ちに雲外に通じ、浮楂に乗らずして終に漢中に入る、周匝せる連峰は法佛の花臺を表はし、平坦なる幽原は化佛の淨土に類せり。悪人も斯に赴けば惡谷に入るが如く、毒獸も情を改むると金山の鳥に似たらん。寔に修禪の勝區なりと思ひつ、備さに八葉の峰を極め、この山を名けて高野といふよしを聴き、深く心に刻み着けたりき。

阿波國那賀郡に大瀧嶽といふ絶巖あり。山谷巍然として孤り秀で、老樹蒼鬱として斧斤の入らざると千有餘年、前壁は鬼斧を以て削れる如く、聳立つこと百餘仞、後壁は神鑿を以て穿つが如く、雲表に兀立すること、宛として石の筈の如し。須彌山は南嶽なり。飛禽の能く踰ゆるものなければ、雲梯を攀づるにあらずんば、いかでか登ることを得ん。山上に四の窟ありて、こゝに入る者あらば、能く生きて出づる者なしとぞ傳へらる。一の窟を龍の窟といふ。一丈の口徑より進み入れば、十歩ばかりにして深き潭あり、九夏三伏の旱天にも曾て減せず、夏雨秋霖の霪日にも曾て増さざるの水は、藍を溶きたるが如く内に湛えて、其の深さ測るべからず。二の窟を不動の窟といふ。匍匐して纒かに入れば、其の廣さ丈餘なるべし、上より鍾乳岩の簇々として垂下するあり、窟の底に石ありて自から不動明王の尊容を現じぬ。三の窟を鐘の窟といふ。洞の中に鍾に似たる巨巖の倒に懸れるあり、之れを叩けば鏘然として聲を發するなり。四の窟を正地の窟といふ。口甚だ窄くして辛じて潜ることを得れども、内は潤

くして數十人を坐せしむるに足るべし。實に稀代の靈山とこそ申すべけれ。
 この嶮岨を踏み破り、この危峰を跋渉して、炎夏の極熱に全身を曝らしつゝ、口に
 殺戮を断絶し、朝暮に懺悔を懈たらず、一心不亂に虚空藏菩薩の威儀に住して、以て
 自身の瑜伽を視んとする者ありき。是れも亦夫の近士無空にぞありける。
 幽閑寂黙日を累ね月を送りて、曉昏の嶮しきを過ぐれば、雲經行の跡を埋め、夜
 羅洞の幽かなるに睡れば、風坐禪の窓を訪らふ煙霞を嘗めて劍を忘れ、鳥獸に馴れて
 友とするに到りしかども、未だ悉地を得るに至らざりけり。無空は茲に退いて宿習を
 顧みれば、機未だ熟せざるにやあらん、進んで來世を思へば、値遇憑據あるに似た
 り。如かし、速かに一生の身命を捨て、將に三世の佛力を加へなんにはど。驟然とし
 て即ち居を岩室に遁れ、忽ち身を巖洞に擲ちけるが、不思議なる哉、命を捨て諸天の
 加護に預りつゝ、身を投じて悉地の果生を得たり。一心の懸篤未だ地に落ちざりけん、
 虚空藏の光明照らし來つて、菩薩の威儀を顯はし給ふ奇特を、端なくも仰ぐことを
 得たりしなり。

南海無際の時端、鯨鯢群をなして波間に出没し、斷崖絶壁の岸頭、怒濤激を嘯んで
 雲際を飛散する處を、土左國安藝郡重戸の嶮とはするなり。又の名を最御崎といひ
 て、西陸陀の岬と遙かに相對し、前は巨海渺茫として窮る所を知らず、竟に補陀落を
 指して儻となし、鐵圍山を引いて限りとやせん。海上には無數の岩礁棋布して、青波
 激して悉く碎かれ、白浪奔つて天を衝き、惡龍栖み毒虺潛み、如法の魔所とぞ聞えたり
 ける。
 この四百尺の巖頭に兀坐して、豪雨をも意とせず、暗夜をも屑とせず、轟々たる風
 聲を顧みず、鏗琴たる濼響をも念とせず、毒龍の出現をも怖れず、異類の妨法をも
 慮からず、心を虚しうして求開持の法を勤念する者は、是れまた無空優婆塞なりき。
 既にして明星口に入つて、佛法の無二を現じてより、茲に求開持の悉地成就して、
 心身最も勇健に、自ら頭陀に任するに堪え得べき信念を確かめ得たりしなり。
 頓て最御崎と行當崎とに精舎を興して、徐かに土左を發ち、伊豫に山越えて、當
 國第一の高山たる石鏡の峰に跨り、暫時糧を絶つて心身を練り鍛えたり。

この山もまた行者小角が遺跡なりき。山邊赤人の、曾て「峨々しき伊豫の高嶺」と
詠めし如く、山は新居、周布、桑村、浮穴の四郡に盤踞して、標高六千四百尺、九月
初めて雪を頂き、五月初めて雪を脱す、信宿にして辛じて山嶺に達すべく、山頭は磊
塊たる奇岩怪石より成り、嶽上に自然の禪定水涌き、溪間に天然の七層塔を曇めり。
神常にこゝに遊び、佛また時に遙向すべき、四國無二の御山なりけり。

無空こゝの行をも濟し果て、更に安藝に渡海し、吉備播磨を修行して、二年の後石淵
寺に鉢を下しぬ。勤操大徳は涙を垂れて修行の功を稱えつゝ、直ちに無空を伴ひて、
和泉國泉郡、横尾の山寺に踞り、此處にして初めて鬚髮を剃除し、準胝觀世音の尊
前に於て始めて得度せしめ、沙彌の十戒七十二の威儀を授けられ、名を教海とは命せ
られたり。

時に延暦十二年癸酉の歲、夜海新沙彌が二十歳の秋にして、唐招提寺の賢環大僧都
の、天皇の内勅を奉まはりて、藤原小黒麻呂、紀古佐美等と、もに、和氣朝臣清麻呂
が建議る所によりて、新たに都の地を相し、山背の葛野郡宇太の里を選び定めたりし

は、是歳の春正月なりき。

○備考——阿波國大瀧嶽の遺跡には、大師開基の伽藍あり、即ち當國第一の眞言教院、念心山太龍寺
是れなり。昨須賀氏曾て寺縁五十石を附し、以て維新に及べり。今は那賀郡加茂谷村大字加茂に屬す。

土佐國室戸崎の遺跡には、大師開基の伽藍二ヶ寺あり、一は最御崎寺と稱して、世に東寺といふ。安
藝郡津呂村に屬す。一は、同郡室戸村大字室津の金剛頂寺とす。最御崎寺に對して四寺といふ。寛永
中山内忠義、東寺を再建し、四寺を重修して、東寺に寺縁百二十石、四寺に百石を附し、以て明治初
年に及べり。

三界は客舎の如し。一心は是れ本居なり。……心經秘鍵

第八 神秘の論

苦行兼修の効空しからず、生來の宿願茲に成就して、圓頂緇衣の僧形に歸したる
 教海は、勅撰大徳の提擧に隨つて、懇念に三論の宗義を究め、傍ら元興寺に趨つて、
 護命和尚の講壇に參し、法相の南寺傳を受けぬ。併せて成實の論議を聴き、俱舍の章
 疏を學し、華嚴を講じ、律戒を修するに、専ら中論、百論、十二門論の蘊奥を訪ね、
 同時に瑜伽、唯識、因聲明の玄旨を味ひて、學修に日月の移るを知らず、直ちに龍
 樹、提婆の法臺に迫り、進んで無着、世親の論場に達せずんば、死すとも已まじとこ
 そ見えたりけれ。

斯く經論に没頭する間に、宇太の新京は造營せられぬ。宮闕には玉座を徙御し奉り
 ぬ。官院には百官を移しぬ。左京右京は争つて家を選しぬ。長岡の京は僅かに十年に
 満たぬ程にて、槿花の榮え一朝にして亡び、宇太の新京は四神相應の擁護空しから
 ず、深く寂慮に慄はせられ、此國山河襟帶、自然に城を作す、此形勢に因りて以て新

號を制すべし、宜しく山背國を改めて、山城國となすべし。また子來の民謳歌の聲
 異口同辭號して平安京と曰へとぞ宣らせ給ひける。加旂、多年國家の舊蹟を破りて、
 幾多の人命を害し、巨萬の金穀を損したる陸奥の蝦夷も、大伴弟麻呂、坂上田村麻呂
 が剿討の功成りて、餘孽を殘さず悉く併となし、全く鎮撫平定したりとの捷報達した
 れば、萬民驩呼踴躍して、皇威八表に輝きわたり、實にこの新京は、平安の樂都とぞ
 なりにける。

是等は教海に於て、單に角上の蚊に過ぎざりしならんも、茲に深夜の床に思惟の念
 を喚がし、は、叡山の霧澄が向上の一路なりき。曾て真魚の昔、長岡の京に遊びて、
 向日の岡に登り、遙かに比叡山を望みたる事ありしが、此時始めて霧澄が名を耳にし
 て、幼年の心にも、其の非凡の識見と拔群の明智とに驚歎せしめられたり。彼が十九
 歳の青道心たる分を以て、錫を彼の嶺に留めしは、都を長岡に遷されたる翌年の事と
 ぞ聞えし。新京の造營全く成りて、政權のこゝに歸するに及ばば、法權も亦北漸せざ
 るべからざるは、是れ自然の勢ひなり。然るに古京十大寺の眷宿等の、七朝御歸依の

舊夢を食りて、懶眠に曉の鐘聲を聴かざるを看破し、逸やくも此勝境の地を占め得つ、堂々として天台の新宗を立したるは、進んで新宗の法權を握らんする遠圖深慮なること、言はずして自から明らかならずや。此の機智、此の達観、彼が勝れたる天稟を見るべく、斯くて正法を護持せんには、道鏡この方漸く衰へんとする佛成の、再び東海に光明を輝かさること、指を屈して埃つべきなりとぞ感歎しにける。從爾已還、年を閱すること僅かに八歳なるに、比叡山寺の結構は着々として功を奏し、一乘止觀院の輪奐を始め、九院の佛閣四徳の山に聳え、山門の威儀嚴然として整頓せり。殊に平安の京成るに及びては、國家鎮護の禪場これに過るはなく、帝都安鎮の結界を修するに方りては、興福寺の善珠大法師が導師の下に、藥師寺の如實律師、東大寺の明覺、法隆寺の忠惠、元興寺の護命、吾が師勤操、玄資、修圓、賢玉等諸大徳と共に一山の龍象を隨へて法を修するに、威望先哲を壓するの勢ひありしといへり。是れがために皇帝の御信に與りけん、去年は善珠大法師に引導せしめて、潜かに山門に幸じて供養させ給ひ、今また比叡山寺を改ためて、國昌寺と稱すべき旨を宣し給ふに至れり。

教海は一向彼を以て我が警策とせり。自ら名を如空と呼び更へて、諸寺諸山の輪奐をも探り、傑ゆる經典論疏の類を、手に隨つて讀破したりしかば、師主動機より今は進んで登壇し、戒を受くるこそ可けれと愆愆せらるゝに至りぬ。教海の如空は滿腔の悦びを瀝いで、深く感謝の意を表はし、乃ち沙彌形の名を更めて、茲に釋名を空兼と稱び、戒壇に登るべき準備を急ぎたりき。

先づ戒牒の文を草して、元興寺の泰信律師を傳戒の和上に、東大寺の安賢律師を羯磨に、招提寺の豐安律師を教授に、勝傳外七律師を尊證に奉請したり。

竊に以るに三學途を殊にすれども、必ず漏盡に會通す。五乘廣運戒足を資るを以て先と爲す。是を以て、衣無表の戒、衆行の津梁を務め、願無願の心、七支の勝鬪を祈る。但し空兼多幸にして法門に遊ることを得たるも、請禁未だ登らず、夙夜に剋復す。今茲延暦十四年四月九日、東大寺の戒壇院に於て具足戒を受く。伏て願ふは、大徳慈悲、小識を勘濟せんことを。隨て和南して歸す。

延暦十四年四月九日

沙彌空兼疏

和上傳燈大法師位泰信
別當威儀師修行法光厚

この授戒の師泰信律師は、大唐の歸化僧にして學徳共に一代に超絶したりしかば、勤操大徳の幹施によりて、この和上の手より戒を授けられしなり。

法式嚴かに行ひ了りて、空兼は全く一個の沙門となりぬ。益々進んで諸宗の門牆を攀ち、精を勵し意を鋭くして、有ゆる佛乘を綜合しつゝ、愈々深く研究する程に、心眼二ながら漸次に明らかになりて、前途に一大光明を拜ひべしと思ひきや、三藏の教を盡し、七宗の底を究めたる今は、却つて室戸の荒磯に危坐して、求聞持の悉地を得たりし時よりも眼く、生死解脱の直路は、空しく無明の暗に隠れ、瑜伽眞實の大道は、徒らに迷霧の奥に埋まりて、不可解の陰のみ愈々深くなり行くを覺えたり。

此時、固りなくも悲愴なる事出て來にけり。そは大安寺の僧好榮が上に就てなりき。勤操大徳をして口を極めて賞賛せしめたる好榮が孝養は、母の年を経て老衰へるは、漸次に篤くなりつゝ、朝夕の勤行にも、先づ母上の無事息災を禱るを以て主とす

る程なりしが、其の加護にやありけん、老たる身にもかりそめの病着だになく、いと健かに餘生を愛するに引交へ、常より脆弱なりし好榮は、日に増し月に添へて、肉落ち形衰へ、病むとはなしに神氣勞れ、遂にこれが根となりて、空しく寂を示したりき。勤操大徳は懇ろに彼を看護り、また歿後の亡骸を石淵寺に移して、之れを後の山に埋め、一方後世の弔ひを修むるゝもに、一方には彼の侍童を戒しめて、深く好榮の死を秘さしめ、其の世に在りし時と同じく、侍童をして三食を運ばしめたりしかば、老母は吾子の猶ほ健かに存命ふる事とのみ信じて、安んじて三食の箸を把りけるなり。

然るに一日侍童は酒に酔ひて、老母に食を備めながら、口軽く世の取沙汰をする端に、我を忘れて好榮の死したるよしを告げしかば、老母は斯くと初めて知り得て、坏をも箸をも其處に投げ出し、うち倒れて慟哭すること頻りなり。侍童は之れが爲めに酔ひも醒め果て、大いに大徳の戒めを忘れたる事を悔い、さまぐに懺悔しつれども、既に馴も舌に及ばず、老母の悲歎はなかくに盡きんともせで、慟き哀み哭きに泣き、涙竭き聲涸れて、目と吭とより血の流るゝかと思れば、靈魂いつしか逝ける

吾子の後を慕ひて、空しき骸のみ灰の如く冷かに、其處には横はれるなり。
 侍童は走つて情を大徳に訴へしかば、愁いに喪を秘して、却つて老母に末期の苦難をさせたる事を悔みしかば、今は何事も詮なければ、同志の衆に告げて合力を請ひ、厚く葬儀を營みて、院後の山へ好菜を雙びて營葬したりき。
 されども、其の死の悲惨なりしを思へば、來世の果やいかなるべき。此上は經偈の功德に因りて、諸佛諸尊の冥助を仰ぐより外はなしと思へりしかば、三輪の名匠を石淵寺に屈請して、一日二座の講席を設け、一座に一卷を分ち、四日八座にして法華經八軸を講じ、母子の追薦を營みける。是れより年毎に此の講席を設けたりしかば、後には石淵の法華八講と稱して、平城の行事の一つに數へらるゝに至りけり。
 空葉はかゝる法要に立ち働らくほごに、暫らくは何憶の懷疑を忘れたりしが、作善の事果て、身は復た元の聖教の學徒となるや、不安の念は軸を出る雲よりも速く潮壺りて、身は全く生死の岐路に踏み迷へるのみ。思へば其の何の爲めに道に入りしかをさへ、疑ひ惑ふ癡かしさを歎かるゝなり。

「なご斯くはあるやらん、決して、決して、佛法の眞趣は、箇様にてはあるまじいぞ」

空葉は我と吾が心を喝破せり。急ぎ金堂に參じて、燈を獻じ華を捧げ、香を焚いて一心に經を誦しつゝ、佛前に對つて一大誓願を發したりき。

「南無本尊如來、菩提の誓ひ空しからずば、沙門空葉の誓願する所、速かに開し納れさせ給へ。空葉佛法に従ひて、要津を尋ぬるに、三乘五乘十二部の經も、心神に疑ひあつて、未だ以て決を爲さず。唯だ願はくは、三世十方の諸佛、我に不二を示めさせ給はんことを」

三拜九拜しては、また前の如く繰りかへし、眼には涕涙を浮べ、額には脂汗を滲せて、熱血を漉ぎ、誠實を現はし、一心に祈念を凝らすこと多時に涉れり。

かゝる誓願を發してより、一日も怠たる事なく、既に一百日の誓願とはなれり。是れ實に空葉が讀去り讀來りたる經典にも、章疏にも、曾て空葉が期待せし如き、不二の法門のあらざる爲めなりけり。空葉は今殆ど經律の數を盡して讀まざるものなき程、

博く深く涉獵し理解したりしなり。夫等は皆な一長一短一得一失ありて、決して法の極致にはあらずなり。猶ほ此の外に佛の秘惜する神秘なる聖典ありて、夫れに極致を悉されしものなるべしと思へるなり。依て其の神秘の鑰を借り、不二法門を開かんとすに、こゝに百日の祈念を凝らし、にぞありける。

念じ了りて徐かに眼を閉じ、殿と寶壇の莊嚴に對すれば、燈は壇上の金色に輝きて、大悲の恩容温かに吾を瞰下し給へり。恭しく一炷を薫すれば、香煙緩く立ち騰りて、夢の如く淡く消え行く處、何をか暗示すらん、盡さんとしてたゆたふ處に、神秘の謎は籠れるが如し。空乘は姑らく本尊に對して、更に自己の所心を歎き訴へたり。

されども、未だ心に何等の暗示をも感せず、神秘の謎を解くよしもあらねば、金剛不退の坐を占めて、吾が所願の徹底するまではと、一心に佛を念じ居たり。念じ念じ、祈り祈り、默想に神心を凝らして、瞑目すること多時なりしに、誰か聲さしもの

「於此經あり、名字は大毗盧遮那經といふ。是れ乃ち汝が要むる所の不二の妙典なり」と告ぐるものありき。

空乘は愕然として目を開らきぬ。忙がはしく堂の四隅を視回すに、夜陰の金堂は閑として人の吹息だもせず、諸天も睡り、諸佛も睡り給へり。唯だ目に入るものとは、一種の厭燈の幽けく閃めく處に、兀如として孤坐する吾れ空乘が、あるかなきかの陰影のみなりけり。

「嗚呼！吾少時寝みつるか！」

かく心着くと同時に、端然として坐を改め、襟を正して念珠を爪繰りつゝ、經偈を誦して本尊を仰ぎ見れば、燈火のまたたく影に、莞爾として微笑し給ふが如く、寤めども尙ほ夢の中の經名は、耳に銘りて金の響を傳ふるの想ひありき。

「思へば是れや神秘の暗示なるらん。誓願空しからず、吾今眞佛乘を知るを得たり。

らで、すべし」

信心はこゝに決定しぬ。蹶然として身を起し、幾たびか佛前に禮拜して、跳る心を

抱きながら金堂を辭し退りぬ。

然るに、空葉の感得したるものは、僅に「大毗盧遮那經」てふ名字のみに過さる。是れより更に其の不二の妙典を究めざるを得ず。今まで涉獵し盡したる大小乘の諸經には、曾てさる名字の聖典なかりき。之れを學匠に質せども、學匠も此れを知らず。更らに碩徳に問へども、碩徳も亦知らずと答ふ。去つて輪藏を訪ねれども、依然として名山に藏せらるゝものなし。空葉は幾どはかなき夢を信じたる、吾が癡愚さを晒はんとしたりき。

「いや、佛陀には妄語在りまます、指授し給ふ所、豈唐捐あらんや」

自ら警しめ、自ら勵まし、堅固なる信念を持立して、其の所信を貫徹せんことは、是れ吾が佛徒として盡すべき天職なりと覺るに至りて、空葉は復た眼前の經卷を讀誦せず、一意に大毗盧遮那經の所在を尋ねる事をのみ、専ら其身の務めとしたりき。歲月は流るゝ水の如く、春秋已に二めぐりして、延暦十六年も今や歳の盡なんとするなり。空葉は大毗盧遮那經討尋の眼を以て、囊に述べしたるまゝ深く篋底に秘置き

にし「雙指歸」を出して、之れを再治訂正するに、探問未だ効を奏せず、空しく歲月を費すを歎じて、思はずも筆を走らせ「未だ思ふ所に就かずして、忽ち三八の春秋を經たり」との熱懷を漏らすに至れり。訂正を了したる後、序を作つて文章詞賦の優劣を論じ、曹建沈休を是非し、遊仙窟、睡覺記を上下し「先人の遺美なりと雖も、未だ後賦の準的とするに足らず」と断じたるが、何に感ずる所ありけん、更に再三の刪潤を加へ、序文と十韻の詩とは、全然新たに起艸したる上、之れを三卷に分ちて、題名をも「三教指歸」とは改めたりき。これ年の十二月朔日の事業なりとす。

翌年も亦障る所ありて、心のまゝに眞佛乘を探り求むること能はざりき。そは天皇の御願在らせらるゝに依りて、阿波國司藤原文山に勅して、夫の大瀬山に一字の伽藍を建立在らせらるゝが爲めにぞありける。

彼の山は空葉が爲めには捨身果生の靈地なれば、この嘉聞を耳にしては、いかで厭止せらるべき。即ち弟子多生の宿願に酬ひんが爲め、且は皇帝永代の御歸依を致さんが爲めに、諸佛諸尊の尊影を彫み奉つるべき大誓願を發したりしなり。造佛は固より

法師の所作なれども、佛師の精工には及ぶべくもあらず、空葉は齋戒沐浴して、敬虔を以て技巧に代へ、信仰を以て様式に代ふべく、薫沐して刀を執り、三禮して刀を下したれば、尊容活るが如く、形像の端正なること、全く佛師とは別工の妙ありしなり。乃ち之れを山上山下五所の伽藍に安置して、入佛供養を了するの間、一字の艸庵をここに結び、虚空藏菩薩の法を執して、暫らく居住したりけり。

一句の妙法は徳効も過ひ難く、一佛の名字は、
靈應も驗へにあらず。
秘藏寶論

第九 不二の光

本龍寺(又は大龍寺)落慶の事果てのち、空葉は路を讃岐に取りて、双親を省み、宗族を訪ひたり。大龍嶽の伽藍に諸佛像を安置したるよしは、疾く屏風ヶ浦にも聞えわたりしかば、四天王の白蓋を把つて守護し給ひたる神童の、いかなる聖僧にかなり給ひけんとして、知るも知らぬも門に倚つて其の風手を仰ぎけり。其中より人々の袂の下を潜りて、ちよこくと走せ出したる髪兒ありき。
身の衣も賤しからぬに、眉目いと清らにして、智慧の光り眼を射るばかりなれば、空葉も思はず杖を留めぬ。彼の髪兒はつかくと進み近づきて、前に立ちて恭しく禮拜しつ。

「御慈も在しませで、嬉しくも歸來まじつるものかな」

かく言ひつゝも、一たび低げたる頭を擡げて、さも懐かしげに面を仰望るなりき。空葉は手を伸べて髪を撫でながらも、思ひ得ず遂巡ふ處に、この兒が母なるべし。

溢るばかりの笑を湛えたるが、後を追ふて来るを見て、空葉は、たと膝を打ちぬ。

「姉上、さては是れなる養兒は——」

「御身の物にて侍るか。日來より御身ばかりを慕ひ居たれば、今日歸り来ますと聞きて、居つゝ得待でこゝまでは走り來つるにこそ。智泉と呼びて給ふべし」

「いかに智泉とや。名に相應しき愛らしの兒よ。いざ吾が手に來れ」

肩の行李をかけ換へて、其の織き手を把りつゝ、望みがちに歩み行くなり。

智泉は齡二歳の頃、自ら名乗りたる字なりき。空葉が姉千枝の嫁ぎたるは、當國阿野郡綾川の畔なる瀧宮の祝部にて、菅原の某なりしが、去る延暦八年二月十四日初産の紐を解きて、産み出したるは此の兒なり。翌る年の誕生を祝ひたる明日の事なりしが、父に對ひて偶然にも口を發きぬ。

「父上知し召さすや。今日は是れ釋迦如來涅槃の聖日なり。いでや俱に誓ひて來世の果報を樂みなん。吾兒も亦出家を遂げ、濟世利民を勉むべし」

其の謂ふ語の奇なるのみならず、聲さへ詞さへいと大人めきたれば、父は愕然とし

て驚歎しつゝも、思はず膝を進ませぬ。

「あゝ此兒はいかに斯くはあるよ」

「吾兒は是れ智泉にて候ふ」

聲に應じて洗みなく對へしが、語辭は是れにて非と地みて、其の後は尋常の二歳兒の、舌も廻らねば、文とてもなき物のいひさまとはなりにき。夫婦は一向に奇異の思ひをなして、是れよりは小字を呼ぶことを休め、智泉よ、智泉よと呼び來りて、人もかゝる名ぞと思へば、自らもかくは心得來りしなりけり。

空葉は神怪なる物語りを聞きて、更につくづく智泉が爲す所を見るに、實に泉の如き智慧を湛えながら、能く之れを内に藏めて、柔順なること言ふばかりもなく、孝養に心を痛むるさま、感ずるに餘りあるべし。

「今こそ空葉は一沙門に過ぎざるも、いつまでかは斯くて在るべき。佛性を具せるからは、此兒の前途は恃みあらんに、枉て空葉に賜はるべし。能く養ひて空葉が法嗣とせまほしむべし」

言ひつゝ、智泉を招き寄せて、

『いかに此の瘦法師が子にはならじか』

『是非に御弟子とせさせてたべ。のう、父上、母上も御喜び給はなん』

今は御傍を得も去らじと言はまほしげに、空葉が膝下に寄り添ひて、堪えぬ喜悅に只願笑み續けたるを愛らしき。

千枝は素より心に願ふ所ながら、慈しむ深き所天の、容易は放ちやり給ふまじと思へば、口を噤みて控へたりしに、童原氏は案外に快諾を當へて謂ひけらく、

『智泉は今茲僅かに十歳なれば、今姑らく手習をもさせたる上、十二三ともなりて、我自ら伴ひて京に上り、御僧に頼みまつらんとは思ひしなり。今日こゝへ御僧の來給ひしも、是れ佛縁の然らしむる所と思ほゆれば、今日の會日を空しうせず、御僧に託し奉つりなん。いかで名ある法師の列に入れさせ給へ』

『そは御心易かるべし。是より吾が師石淵の大徳に附屬して、必らず知識の法師となすべきぞ』

『忝けなき御語を承まはりて、吾が心も安らぎたり。實は佐伯直酒麻呂ぬしの一族に、一人の公達ありて、其の叔父なる書博士葛野酒麻呂が許に、儒學の教へを受けつたれば、其方に託して文學を習はせんかとも存じつるなり。今はさる煩らはしき事も無用となりぬる喜ばしき』

心からなる所天の話を聴きて、千枝も始めて胸を撫で下しつ。是れより父母兄弟うち集ひて、秋の夜短かしとぞ語り明しける。

空葉は餘義なき事にて、暫らく真佛乘の探問を怠たりしが、心は一日も大毗盧遮那を離れたる事なく、父母の國より棧を歸すと其のまゝ、甥智泉を勤操大徳に頼み置き再び斗葺の沙門となりて、浮圖ある處は寒村僻邑の嫌ひなく尋ね廻り、或は狐狸棲む深山の岩を枕として、曉の霜に心の懈りを警め、或は訪ふ人もなき山寺を宿として、鰯魚に委ねし秘録を繙き、一心専念に靈感の經を究め、一日も速かに幽微を闡かんことを熱望しつゝ、幾たびか和州の山河を經歷りて、宇陀那室生の奥なる、室生山寺に宿を假りぬ。

此寺は當今の御願によりて、故賢璋大僧都開基なれば、堂塔の規模なかくに廣大なり。開基大僧都遷化の後は、徒弟堅慧といふもの寺坊を護りて、いと殊勝にも行ひ澄しつゝありき。

堅慧は「たび空葉を視るより、心に畏敬の念を生じ、意を致して懇待したるのち、心を行雲に伴ひ、身を流水に委ぬる行脚の快を偲びて、隈なく語り慰めぬ。空葉も亦一見奮の如き思ひをなして、吾れ靈夢を感じて、世に大毗盧遮那經のあることを知り、此の經を求むるために、斗蓋已に十年に及ぶ旨を語りて、堅慧の知るや否やを叩きたり。

「小釈は常に法華を頂受して、専ら四安樂行を勤め、傍ら三論法相を研敷しつれども、去る聖典は題字をさへ知り候はらず。如何なる御經に候ふやらん」

堅慧は却つて其の經題の新奇なるを疑へるなり。

「いかなる御經やらん、少僧も未だ知らず。其の御經こそ正しく不二の眞佛乘ならめと思ふよしありて、只だ名山靈地を探り歩くなり。御僧の知らるゝ靈場あらば、少

僧の爲めに教へを悟み給ふ勿れ」

空葉はまた問ひを新にしたりき。

「さればなり。何處までも尋ね歩き給ひつべければ、小釈の知る處は、已に貴僧の過り給ひし處なるべし」

言ひさして小首を傾けしが、彼か此かと指折りながら、いと思慮なげに質しぬ。

「高市の來目寺はいかに」

「一たびは拜したるが、別に探り求むる事はせざりし」

「彼處の大塔は、南天鐵塔の半を選したるやに申して、信する者は無二の聖地と仰ぐよしに聞きぬ。試みに彼の塔に祈り給はゞ如何なるべし」

此時、空葉が心は、何故とはなくて噪がしくなりぬ。先の年參拜したる折に、この本尊に祈らざりし事の、今更心奪めせらるゝやうに感じ來れり。

「そは好き事を承まりつるかな。是れより直ちに立向ひて、一七日の參籠をこそ仕ふまつらめ。さらば御僧」

僧の爲めに教へを悟み給ふ勿れ」

空葉はまた問ひを新にしたりき。

「さればなり。何處までも尋ね歩き給ひつべければ、小釈の知る處は、已に貴僧の過り給ひし處なるべし」

言ひさして小首を傾けしが、彼か此かと指折りながら、いと思慮なげに質しぬ。

「高市の來目寺はいかに」

「一たびは拜したるが、別に探り求むる事はせざりし」

「彼處の大塔は、南天鐵塔の半を選したるやに申して、信する者は無二の聖地と仰ぐよしに聞きぬ。試みに彼の塔に祈り給はゞ如何なるべし」

此時、空葉が心は、何故とはなくて噪がしくなりぬ。先の年參拜したる折に、この本尊に祈らざりし事の、今更心奪めせらるゝやうに感じ來れり。

「そは好き事を承まりつるかな。是れより直ちに立向ひて、一七日の參籠をこそ仕ふまつらめ。さらば御僧」

はる坐を起ちて行かんとするなり。堅慧も強ひて抑留めんとはせず。

「貴僧若し其の妙典を感得し給ひて、世に廣宣し給ふ時は、この堅慧に師資の禮を執らしめ給へ。是ればかりは今より固く誓ひ申し置くなり」

空兼は既に笠をも被り了へて、杖を立てながら、

「機に随ひ縁に隨へば、互に師資たる事もあるべし。何事も經王出現の上にてこそ」

この一語を後に遺して、空兼は急ぎ山を下り行けり。

かくて夜を日に繼いで行を急ぎ、辛うじて高市郡久米の里に到り着ける頃は、日は山の端に沈み果て、山門を閉ぢたる後なりけり。空兼は高く星斗を申ぬいて登ゆる、八丈の多寶大塔を仰ぎながら、杖を門外に駐めて停立りぬ。

此時、内より耳門を開きて、とほくと出來りし白髮の老翁ありき。こゝに停立む空兼の姿を、訝かしげにちろくと看過したるが、忽ち親しげに側近く進み來て、

「御僧は此の道場へ參詣せんとて來たられしか。但しは錫を掛けて法を聴かんとてか」

空兼は少しも度す所なくして、

「否。少僧は魯き經典を覽むるために、この大塔に祈請せんとて詣でしものなり」

「さては善無畏三藏が御弟子にて在しけり。この道場こそ、昔天竺の聖人、遙かに東域に佛法相應の地あるを見て、來つて此地を擇びて止り、件の多寶塔を建立し給へる靈地なれ。若し能く祈り給はんには、必らず靈驗あらんすらん。あなかしこ、毫疑ひ給ふまじ」

懇ろに語り聞ゆるかと思へば、彼の老人は直ちに歩みを進めて、下向の程を急ぐなりき。空兼は停立みたるまゝ、少時後姿を見てありしが、夕霧深く立ち覆ひて、忽ち彼の老人を包み隠したるにぞ、試みに門に立ち寄りて、彼の耳門を押し見たるに、手に隨ふて開きしかば、躊躇ふ事なくするくと内に入りぬ。

この奇瑞に遇ひて、いかで歡喜せざるべき。空兼は跳る心を壓鎮めつゝ、東塔院の内佛を拜して、祈誓を凝して念すらく、

「沙門空兼、敬しんで諸佛の淚を叩くに、門々ありて應ふること、恰も鐘谷の

私なきが如し。救世大悲に歸命し奉る、往昔指授し給ひし所の經を尋ねて、遍く城中を回るも、未だ其經を得ず。仰ぎ願くは吾が爲めに其所在を示し給へ」

恭しく香を拈して、更に血誓して曰く、

「吾此の願にして成就せざらんには、一寸も此座を起たじ」

端坐合掌して身心を佛陀の冥廬に供し、眼に他色を視ず、口に穀漿を下さず、凝然として殉教の決心を固うしつ、今宵よりして晝夜不退の誓願を發企したりしなり。

機は熟せり。時は來れり。一夜萬籟を潜むるの時、空葉は心の底に微妙の聲あるを聴きたり。曰く――

「佛慈機に應じて汝の願に隨ふ。汝が求むる所の經は、露柱の柱心に纏じ」

空葉は踴躍して坐を起ちぬ。起つて再び本尊を禮拜しぬ。禮拜し了るや、直ちに大塔の心の柱を物色したりしに、床を下ること多からずして、墨痕尙ほ鮮やかに、四行の文を勒せるを見たり。印ち歡喜に踊る心を鎮め、眼を拭つて讀下すに――

歌都是釋尊之遺身。經王又遮那之全體也。然而小國片域大機未熟。仍留此法於斯

地。將待機所待時也。來葉必弘法利生之菩薩。來而可恢此教於世

とありき。空葉の歡喜は方に頂點に達したり。退いて稽ふるに、此の久米の道場は、其の開基に於て、既に多くの奇蹟を有したりしなり。此の東塔を建立したるは、善無畏三藏とて、元は西天の梵僧なりき。身中印度摩竭陀國の王室に生れ、解梵王五十二代の王位を嗣いで、億兆に君臨すること幾年、忽ち王弟の謀叛に遭ふて、熱々人生の味氣なきことを感じ、遂に十善の帝位を厭つて、斷然として脱屣し、深く八葉の花王を樂んで、鞠如として龍智の資となり、十八歳にして出家得度を遂げたり。爾來五十年餘國を順禮して、大日如來の法を説き、具さに秘密教の玄底を鼓いて、大毗盧遮那經供養法の卷を、金粟王の塔下に感得し、並びに達磨掬多三藏に遇つて、大悲胎藏大曼陀羅の圖を傳へられ、唐の玄宗皇帝の開元四年(元正天皇靈龜二年)境を越えて震旦に入り、錫を長安に留めたりき。是に於て深く皇帝の崇信を得、仰いで國師とせられしかば、無畏は震旦化度の念厚く、翌五年(養老元年)には、虚空藏菩薩求聞持法一卷を漢譯したり。我が道慈律師の親承して求聞持を請來したるは、此際の事なるべし。十二

年(聖武天皇神龜元年)には、瀛に随つて洛陽に來り、法座を大福光寺に設けて、密教を宣傳し、翌る十三年(神龜二年)に至りて、此の大毗盧遮那成佛神變加持經七卷の漢譯は成りしなり。續いて次年にわたりて、蘇婆呼童子經三卷、及び悉地羯羅經三卷を譯了し、且つ達磨拘多相承の胎藏界曼陀羅を金剛智に授け、交ふるに妙吉祥相承の金剛界曼陀羅を金剛智より授りしかば、七軸の經王と兩界曼陀羅とを流布せんため、波を踏んで我が國へぞ渡來しにける。實に唐の開元十六年、我が神龜五年の事なりき。初めは東大寺に來着して、西南の阿に小庵を結んで在りしが、三藏普く四瀛八極を廻つて、七軸安置の聖王を求むるに、高市郡王舎(久米皇子邸)の側り、此地最も美とするに足れりと思量して、仍て東塔の軸に處しつゝ、三ヶ年七百二十日の際にして、一の寶龕を起立せり。而して東塔院と號して、三粒の佛舍利を寶石の底に納め、又七軸の大日經を以て剝柱の下に安置し、彼の記を留めて、空しく震旦には歸國したりしなり。

空襲が十年の長日月を、討尋探問に費して、所在辛勞、所在苦艱を厭はざりしもの

は、唯だ七軸の經王を得んがためなりき。而して今や積年の宿志を達し、無畏三藏の期待に應じて、こゝに之れを感得するの光榮に浴せり。空襲が地に伏し天に謝する満足の狀は、くだくだしく絮説するの要なからん。

古への人は、道のために道を求む今の人は、名利のために求む。名のために求むるは、道な求むるの志にあらず。道を求むるの志は、己な道法のために忘る……性靈集

第十 船よそひ

「入唐留學の志願は、誠に殊勝の至りながら、積年の苦修練行、究めざる經論も莫かるべきに、いかなる法をか學せんとはし給ふやらん」

勤操大徳は忽爾として驚かしたる空葉に對して、先づ志望を叩くにぞある。

是に於て、空葉は十年の苦慮徒爾となりて、剛らずも大毗盧遮那經七卷を感得したる、不可思議の事實を擧げて物語り附えぬ。

「さりながら、密經は神祕なれば、東大寺の東南の隈、即ち善無畏三藏の舊址に居して、一部絨を解き試み候ひしに、文に臨んで心昏く、衆情に滯りあれども、憚問するに所なし。徑路未だ知らず、岐に臨みて幾たびか泣き、精進を励め精誠を抽んで、偶感應を被りて要め得たる秘門は、此の如く心に得る能はず候ふ程に、願くば大唐に入るを得んとこそ存じ候らへ。幸ひにして遣唐使の未だ棧を浮べざるに先ちて、和上より執奏せさせ給はんことを、切に願ひ奉るにて候ふ」

其の熱情は寂然たる心をも衝動かしけん、大徳が肩は風なきに展動きたり。

『いかにも遣唐使は、去年(延暦二十二年)五月、一たび浪速津より船を出し、が、忽ち暴雨疾風の難に遭ふて、船破れ人死するに至りしかば、已むなく節刀を奉還せられき。今茲は更に差遣せらるべくや、貧道迂にして未だ其れ等のよしを承まはらず』

「此の事は空葉 詳に承はり及びて候ふ。去年三月宮中賜宴の光景を承まはりしに、饗宴の式は一切淡の法に依り、宴酬なる時、皇帝には近く大使を召させ給ひ、大使御床の下に參られるを御覽して、御手づから御酒を賜はり、

許能佐氣波於保運波阿良須多比良可爾何陪理伎末勢止伊婆比多流佐氣

と一首の御製を賜りしかば、大使は流涕雨の如く、深く君恩を感銘したりと申して候ふ。のまに譽ある御使なれば、今茲も遣唐大使は藤原葛野麻呂ぬし、副使は石河道益ぬし、副使兼判官は菅原清公ぬし、夫々に承まはられつるよし、音博士の許にて比叡止觀院の義真が物語にて候ふ」

「義真沙門は掖澄和尚の譯語として、隨行の勅許を得たる者なり。さあらんには、

此の沙汰紛れあるべからず』

大徳は一切を了解したるにも拘はらず、尙歩々しくは許諾を與へざりき。是れ空葉が入唐學法の沙門として、其の資格の缺乏を案するにあらず、却つて彼を慈しむの餘り、時機を延ばさば如何と考ふるためなり。

抑 窳滯は同じ大安寺の沙彌として、夙に比叡の山上に中堂を開き、法華八軸を一乘圓頓の妙典として、天台の宗義を立したる僧なり。輒近南都七大寺を藐視して、善議以下の善宿を蔑ろにし、進んで内供奉十禪師の榮貴を拜し、この度の入唐求法にも、優渥なる勅を賜はりて、求法の往還をも兼年を通るを許さずと仰せ渡されたり。優從の人数を許さるゝさへあるに、自身漢音に通せざる故を以て、上足の義眞を伴ふことも勅許せられぬ。設令大唐は大國なりとも、比丘の修行としては恥かしからぬ行装なるべし。夫に反して空葉は是れ何者ぞ。師主たる勤操自身すら未だ一の僧綱に列せざれば、固より名もなき沙門たる一沙門にして、畢竟恆沙の一粒、蒼海の一滴たるに過ぎざるべし。去じ延暦十二年四月、漢音を學ばざる者は、年分度者たることを許さ

れざる定めとなりしかば、空葉は得度の初年よりして、熱心に漢音を學修し、深く其の音に達して、自在に語を操り得るが故に、固より譯語の要もなく、又一介の從僧をも伴ふべき分にあらねば、彼と此とを相照らすに、同じ大安寺の法類として、其の懸隔の甚だしき事、殆ど師資の觀あるべく、空葉の心は水の如くならんも、時にさう波なきにあらず。俗情ながら是れも亦不便なり。二つには、勤操の朝家に對する信用が、いかなる邊にあるやも不明なり。一年勅を奉じて宇太の京に結界の法を修せし外には、法務を執つて公家に奉じたる事だもなければ、其の願意の輒く徹底するや否や、是れも亦不明なり。

勤操はこの二つの點に關して、應答も自から踏躰ひがちになれるなりき。空葉は師の案じ煩らふを見て、更に一層の精力を倍し來ぬ。

「善無畏三藏の言ひ遣したる弘法利生の菩薩には、當るべくもなき空葉ながら、此經王を感得したるには、多少の機縁なきにしもあらざるべし。機根漸く熟しなから、此國に面授の師家なく、可惜醍醐味を嘗むる能はざるは、所詮空葉の忍び難き所にて候

よ。此の密教の秘鍵を得て、新なる佛法の妙旨を傳ふるは、獨り空葉が爲のみならず、國家の奉爲に、利生の爲めに、大いなる利益とこそ存じ候らへ。枉て執奏の勞を取り給ひてよ」

勤操は目を瞑りてうち聴きてありしが、何思ひけん双眼をばつと開きて、空葉の方をうち見やり、斷乎としたる聲音にて、

「いかにも貧道が身に代へても、必らず願意を遂げ得さすべし」

「そは少僧の爲めに執奏し給はんぞや」

「貧道のみ願奏にして、尙ほ勅許を得ざるに於ては、平城七太寺の大徳の名を以ても、必らず勅許を得では置くまじ」

「近來嬉しき仰せを承はるものかな。空葉不肖の弟子には候らへども、入唐の上は嘗つて師の御名を踏し候ふまじ。唯だ是のみは御心易く思召され候らへ」

「さらば表文を認むべし。汝は直に携へて平安京に赴き、和氣弘世朝臣が方に執奏を請ひ盡るこそ可けれ」

空葉が満腔の感謝をさへげて、大床に叩頭するうちに、勤操は紙を展べて連りに文を案するなりき。

頓て筆を下して脚案を作りぬ。幾たびか雌黄を加へたるのち、之れを空葉に附しぬ。

「貧道が拙き筆に認めんより、汝が麗はしき手迹こそ驗はあらめ、その序に字句の穩かならぬものは、憚りなく訂正してよ、文章も亦汝が本業なるに」

推辭することの禮なるは、空葉固より知らざるにあらぬぞ、右左言ふべき場合ならねば、命せらるゝまゝに淨書して復し奉りぬ。其の文に曰く――

右十四年登戒壇の僧空葉、諸佛の指授を受けて温ぬる所の經、大和國久米道場に在りて、善無畏三藏の游池に得たり。彼の三藏讀して曰く、此地大機未だ熟せず、經を止めて時を待つ、來世に弘法利生の菩薩あつて、來つて此經を授めんと云々。然るに空葉諸佛の指授を受けて、古聖人の識文に當る。今國家の此靈を産するは、恐くは天下太平の豫標乎。伏て乞ふ、陛下勅して求法に遣て、玄珠を異邦に攻しめ、大厦の材を致さしめ給へ。(原漢文)

表入りてより幾ばくも経ざりしに、忽ち治部省の符到りて延暦廿三年五月十二日、沙門空葉を伴ひて参内すべき旨、大安寺勤操にまで命せられたり。勤操大徳は急ぎ空葉を招きて、手を把つて悦びぬ。空葉は満身の血の湧くばかり悦び、法服式の如く取り装ひ、其の日を待つて師勤操に尾して、始めて平安宮城には参入したり。時に柏原天皇(桓武)内院に御して勤操に謁を賜ひ、上表の旨趣を御下問在らせられじかば、勤操は謹んで大毗盧遮那成佛神變加持經感得の因縁を、具さに奏間に及びたり。天皇は空葉をも延見し給ひてのち、即座に入唐求法の勅許あり、遣唐大使等に就て、其の準備を整ふべき旨をも、和氣弘世して命せられたり。空葉は天恩の恩恵なるに、面目身に餘りて、懼るく師に見して退下したるは、是れを空葉が禁闕に足を投じたる第一歩なりける。

大使は去年の如く、正三位参議左大辨兼越前大守藤原朝臣葛野麻呂にして、副使は従五位上石河道益、判官は菅原清公、録事は朝野鹿取なりき。孰れも才學當代に傑出せる俊秀にして、大唐の秀才と會して、互ひに相徴逐する事あるも、更に勝劣あるべしと思はれざりけり。

程なく渡海の船は離れられたり。船は激浪怒濤に堪ゆべき大船にして、其数四隻より成れり。第一船は大使の乗船にして、第二船は副使之れに乗り、第三船は判官、第四船は録事の乗船と定めらる。即ち空葉と、留學生橘太夫逸勢とは、藤原葛野麻呂に屬して第一船に上るべく、比叡の叡澄は義真等と同く菅原清公の第三船に同船すべき事となりぬ。時に叡澄は四十歳にして一宗の開祖たり、空葉は三十一歳にして、單に具足戒を受たる一沙門たるに過ぎざりぬ。

發程は六月朔日なりき。發するに臨んで、空葉は甥の智泉を誡しめけるやう、
 「汝既に十六歳となりて、修學の蹟大いに見るべきものありと雖も、未だ進んで登壇するの勇氣なし。聞すや勅を奉じて入唐せらるゝ、叡岳の叡澄和上は、十二歳にして此の大安寺に沙彌戒を受け、苦修練行六年にして、十八歳にして登壇受戒し、十九歳にして、彼の山を開かれたり。汝九歳にして師教を受け、修學既に八年に及びぬ。吾に比ぶれば總慈なれども、彼に例ふれば大だ劣れり。彼も人なり、汝も人なり。吾が

法を請来して歸り來ん日は、必ず吾を驚かすものあるべし。汝吾に隨侍して、入唐せんとの志は殊勝ながら、吾は是れ留學の沙門なり。侍者を伴ふの要なければ、汝の望みを卻けたるなり。其の志を修行の上に移して、後の大成を心がくべし。尙ほ思はるゝは、汝が身體の厄弱き事なり。心を用ひて健かに保たんこと、是れ第一の孝行ぞかし。努々忘るなよ」

壁涙ともに下りて、温情言外に溢れければ、魯泉はなかくに面さへも擡げ得ず、僅かに、

「御訓戒、難有く承はり候ひぬ」と言受けするに過ぎざりき。

かくして浪速津に立ち越え、大使の來着を待ち受け、滞りなく第一船に上りぬ。是に於て初めて大使と膝を交ふるに、さすがに大納言小黒麻呂が長子とて、寛宏なる襟度あり、誠に膝を容れ易き思ひありき。又、橘逸勢は贈太政大臣奈良麻呂が孫、故内舍人清友の子、二の宮の御息所嘉智子の方の兄として、貴人の家に出ながら、一個落たる儒生にして、一ひ手を握りてより、已に故人の想ひあり、風浪だになから

んには、前途は極めて樂しき船路なるべしと、空葉は先づ心に之れを喜びたり。

果せる哉、内海の航程はいと安らかにして、日を経て豊前の津に着き、霧濤を同じく宇佐宮に詣で、航海の安全を祈願し、更に肥前國松浦郡田浦に在りて艤する間、空葉は錫を黒髮山に留めて、渡海の間風波の難を除かんために、白檀を以て藥師如來の尊體を彫み奉り、又、告面の孝を遂げんために、鏡に照して我が影像を寫し、便を求めて、之れを讃岐なる母上が許に送り參らせぬ。藥師如來は六寸の靈像にて、尊容の神聖なること、天衆地類も之れを守り給ふべく、三寶諸天もいかで隨喜し給はざらんと拜まれ、自書の自像は等身の立像にして、左の上に松山を齋き、こゝに釋迦如來影現の奇瑞を撰したれば、之れを見る親族は、必ず航路の冥助を仰ぐなるべし。

七月六日、船は田浦の岸を放れたり。四隻の大船序列正しく、順風を滿帆に孕ませ、萬頃の海波を壓して駛走する光景の壯なる、常に靜寂を愛する空葉と雖も、一ひ檣に上りて之れを望めば、意氣自から天に沖して、身は垂天の翼に忽し、鵬程九萬里を翱翔するの想ひすなりや。

第十一 よる べ 波

巨船を浮べて東に顧みれば、一點の島嶼望の中に消え、片帆を飛して西に赴けば、萬頃の烟波眼の前に極まる。桑梓境隔りぬ、後會を秋の月に契り、行李跡遠し、前途を曉の雲に委ねて、漂渺無涯の外洋に漕ぎ出したる七日の夜戌刻ばかりの頃なりき。

一天紅を浴きて流したらん如く、異彩の輝きを放ち、深碧の海波に映する處、紫の瀾舷を洗ひて、其の奇觀言ふばかりなかりしが、看る／＼暗雲霄に潮漫りて、一陣の驟風帆を煽つよと見る間もなく、忽然として驟雨瀉ぎ來り、同時に激浪起つて雲に沃き、怒濤躍つて船を衝き、天地晦暝、水天一黒、帆は巻くに遠なくして裂け破れ、船は轉するに堪えずして折れ砕かれたる大難境に遭遇しにけり。

腰々火信を發して他船の安否を問へども、應ずるものは第二船のみにして、第三第四の兩船は、消息全く絶え果たり。同行の聯絡の断れたるさへいと心許なきに、第一船とて既に進退の如意を失ひたれば、唯だ手を束ねて風濤の簸弄するに委すの外なき。

く、所詮覆没するにあらずば、破滅の難は免るべからず。唯だ徒らに坐して巨海の底に沈み、魚鼈の腹に葬られんことを待つのみなり。されば船中の官人等は、一向故郷に向ひて鷗鷺の盟の絶なんことを歎き、空しく死生の間に出入し、波濤の上に颯々するを見て、空舞はこゝに一大勇猛心を發起しぬ。

「必らず喚がせ給ふこと勿れ。我が葦原中國には、八百萬の神鎮り在して、常に國家人民に冥護し給へば、祈らばなごか擁護あらざらん。いでや、一百八十七所の天神地祇に祈念して、神毎に一部の金剛般若經を法施し奉るべき誓約を立て給へ。一路平安を祈願し奉つりなん。各も誠を表し心を一つにして、專念に祈り申さるべし」

かく言ふうちにも座を船首に移して、心當に我が本土の天を伏拜み、丹精を凝らして金剛般若經を誦讀開講したりしかば、大使葛野麻呂も諸共に心經法施の誓約を上つり、一心に使命を果さしめられんことを祈願し、船舉りて殊勝にも聲を合せて讀經したりけり。

鐘谷の感空しからざりけん、水月の應忽ちに顯はれて、明る八日の夕刻に至れば、

風歌み浪静まりて、幸ひにして遭没の厄は免れ得たり。されども、結ける船は第二船のみにして、第三第四の兩船は、雲霧烟波漫々として際りなき洋中に、其の影をさへ留めざりけり。然のみならず、先例は三千里にして直ちに揚州蘇州に到るを願ひし、此の航路は風波穩かにして漂蕩の愁ひなしと傳へられ、這回もこの海路に由りつれども、風濤の難に遭ふて、固らずも南に漂へるなり。七百里を増して嶺南道に到るものは、海荒く磯り多しと聞くからに、人々安き心とてもなかりしが、帆と舵とを失へる船は、また如何とすべからざりき。

海上に漂ふこと三十四箇日、船中水盡き人疲れ、唯だ運を天に任する處に、雲耶。あらず。山耶。知らず。其の水天の窮る處に、一碧空に横はるものあるを發見したり。水夫は思はず噎れたる聲を放ちて、

「陸の見えて候ふぞ、人々」と叫びけり。
人々も船首に立出て、

「お、山こそ見えて候らへ」と唱へて、皆な手を叩きて雀躍するなり。

「さては命は拾ひしぞや。漕げや漕げ、只だ船に任せて漕ぎ着けよや」

船頭が聲は噎れながらも力ありき。應と答ふる水子が聲は、はや船拍子ともにも勇ましく聞えわたりぬ。

何處とも知らず漕ぎ寄せたりしは、福州長溪縣赤岸鎮已南の海口と聞えたり。儘ふれば正に八月十日なりき。葛野麻呂は譯語の者をして上陸せしめ、明州の津に到るべき船の、風波に遭ひて此處に漂着したるよしを白しめたりしに、鎮將杜寧、縣令胡延碩等、先大使副使を迎へて、難船の艱苦を慰め、杜寧は最餘義なげに言へり。

「當州の刺史柳冕は病に緣つて辭して去り、新除の刺史は未だ任に就かず。小官は長溪縣に令たるのみにて、貴官を處分すべき權能なければ、是より衡州へ赴かれたし」
胡延碩も亦之れを補ふて言へり。

「今國家は太平なれども、此處より衡州へ向ふ路は、山谷險隘にして、多くの行李を擔ぎ行かれんは、甚だ以て不穩なり。海路直ちに衡州に到らるゝこそ便宜なれ」
勢ひ此の如くなれば、辛うじて繋ぎ得たる纜を解きて、再び海に浮はざるを得ず。

已ひなく復た漕ぎ出して、船を衛州に廻す事となしぬ。
 衛州に在りても新刺史未だ來らざるの故を以て、容易く上陸をも許さず。又國書印契なき故を以て殿に船内を検して悉く密封し、其の處置甚だ苛察なり。大使は身の國使なるよしを論じて、上都に奏上せんことを要ひれども、更に要領を得ず。淹留二ヶ月に及びて、十月三日といふに、觀察使兼刺史閻濟美は着仕せり。仍て葛野麻呂は手書を載して新刺史に呈したるに、閻濟美は唯だ一見したるのみにて、敢て答へざるのみならず、此の事再三に及ぶに當つて、斷然船を封じ、人を追て濕れたる砂の上に居らしむるに至れり。

其の困難言ふばかりなければ、月の十二日に至りて、葛野麻呂は悄然として空葉に語りぬ。

「嗚呼、愁ひ切にして哀み深き今なり。抑大徳は筆の主なるに、あはれ我れに代つて一文を草し、州司の疑ひを去り、目前の厄を解き給はんや」
 空葉は直ちに側らを指さし示しぬ。

「少僧は緇徒にして、文筆は業にあらす。こゝに橋太夫在しますに、何ぞ秀才を措きて佛徒には望み給ふぞ」
 逸勢は手を揚げて支えつ。

「今は悲歎餘りありて、所詮吾には一字をも得作らじ。衆生を救ふは師の務めなり。疾く大使の命に應じ給へ」
 「一切に大徳の勢を煩はさん」

葛野麻呂も更に詞を申うして頼み聞えぬ。空葉も今は辭ふべき機ならねば、即時に筆を執つて一大長篇を作しぬ。

逸勢は其の草案を把つて、大使の前に高らかに讀み上げたり。

裂能啓す。高山海峽なれども、禽獸勢を告げずして投歸し、深水宮はざれども、魚龍僞ことを懼らすして逐ひ赴く。故に能く四光險きに構して垂衣の君に貢し、隋齋深きに航りて刑厝の帝に獻す。賊に是れ明かに眼雜の身を亡すな知れども、然も猶命を徳化の造く及ぶに忘るゝ者なり。伏して惟れば大唐の聖明は、霜露に均ふる所、皇王宅となすに宜しく、明王武を繼ぎ、聖帝重れて興る。九野を掩頓し、八紘を宰

籠す。是を以て我が日本國常に風雨の和順なるを見て、定めて知人の中國の惡あることを。巨檢を著録に列めて、皇華を丹墀に構む。蓬萊の琛を執り、崑崙の玉を獻す。昔起り今に迄まで相續て絶えず、故に今我が國主先祖の貽謀を顧みて、今帝の徳化を慕ふ。謹んで大政官右大辨正三品兼行越前國太守藤原朝臣賀能等の邊して、使に充て、國信別買等の物を奉獻す。賀能等身を忘れて命を衝か、死を曾して海に入る。既に本道を経して申途に及ぶ比、暴風帆を穿ち、股風舵を折る。高波浪に決き、粗舟舟々たり。颯風朝たに靡けば、肝を耽羅(濟洲島)の狼心に撞き、北氣夕に發すれば、勝を留求(琉球)の虎性に失ふ。猛風に擊聲して、鼻を龍口に待ち、驚浪に撞肩して、宅を龍腹に占む。浪に隨つて昇沈し、風に任せて南北す。但天水の碧色のみを見る。登山谷の白霧を視んや。波上に擊たたること二月有餘、水盡き人疲れて海長く陸道し。龍を飛ぶに翼脱け、水を泳ぐに鱗殺れたらん。何ぞ喙を爲すに足らん哉。僅に八月初日に乍ら露半を見て欣悦極り同し、赤子の母を得たるに過ぎ、旱苗の霖に遇るに越えたり。賀能等萬たび死波を冒し、再び生日を見る。是則ち聖徳の致す所なり、我が力の能する所に非ざるなり。又大唐の日本を返すこと、八秋雲の二さく會ふて高麗に膝少し。七戎霧のこさく合つて魏國に稱藩すといふ雖も、而も我國の使に於ては、殊私曲成して待するに上客を以てす。面り龍顏に對して自ら稱綸を承し、住居榮羅巴に望の外に過たり、夫の歌々たる精蕪を、翌日を同うして論すべけん乎。又竹符銅契は本と好準に備ふ、世深く人賢なること

は、文契何ぞ用ひん。是故に我國海濱なりしより降巴幣に好隣を事さす。獻する所の信物印章を用ひず、遠する所の使人好隣ある無し、其風を相襲いて今に干て盡ること無し。加以、使手の人には必ず腹心を擇ぶ、任するに腹心を以てす、何ぞ更に契を用ひん。戴籍の傳ふる所、東方に國あり、其人船直にして禮儀の細君子の國といふ、蓋此が爲め歟。然るに今州使賣るに文書を以てして彼の腹心を疑ふ、船上を檢括して公私を計へ數ふ。斯れ乃ち理法令に合ひ、事道理を得たり、官吏の遺實に見れ然るべし。然も雖も遣人乍ら到つて途に觸れて愛へ多し、海中の慈猶胸腹に委れり、徳酒の味未だ心腹に飽かず、卒然たる禁制手足屈まらざる無し。又建中以往の入朝の使の船は、直ちに揚蘇に著いて漂蕩の苦みなし、州縣の請司懇勞すること懇懇なり、左右使に任せて船の物を檢せず。今は則ち亦昔と異なり、返するも望みと疎かなり。底下の愚人竊かに驚懼を懐く。伏して願くは遠きを柔くるの術を垂れ、國を好するの義を願ひて、其の習俗を統まらして常の風を倣まされ。然らば則ち怙々たる百獸、流水と與んじて奔海に朝宗し、喝々たる萬服、雲霧を將んじて以て曉日に引領せん。風に順ふの人は、甘心して運渡し、腹心を返ふの嶺は、意を悦ばして駢羅たらん。今常習の少願に任へず。奉啓不宣謹て言す。

静かに耳を傾けたる萬野麻呂は、聴き了りてはらりと涙を落せり。

「大徳の才文、所詮麻呂等の企て及ぶ所ならず。愁ひに自ら拙文を送りて、却つて

人々を苦しめんより、初よりして大徳を煩はすには及かざりしを」
 直ちに此文を以て州廳へ送りたるに、果せるかな、閩濟美より吏員を差向けて、直ちに船を開かしたれば、大使副使等二十三人の官使、船頭水夫水子に至るまで、齊しく空兼の恩を稱えて、恰も我が家に歸るが如く、濱沙の露宿を棄て、元の船に還り、始めて再生の思ひをぞなしにける。

幾ほどもなく、觀察使より慰問の使者來りて、即時長安に奏したれば、必ず何分の沙汰あるべし。其間惡愁を慰むるよしはあるまじけれども、物足らぬ科もあらば、心措きなく申さるべしなど、種々に問慰さめつ。

日を経て長安よりの沙汰として、州府の力使四人を給され、多くの資糧を贈りたる上、刺使自ら好問したりしが、市街に適當の家なかりしかば、急ぎ十三烟の假家を營みて、こゝに一行を移り住ましめたり。更にまた幾日を経、朝廷より存問の使を賜り、其儀式極めて美々しく、覽る者涙を流さざるはなかりしが、刺史が計らひとして、先づ大使等を上京せしめ、後より空兼等を送らんとの事聞えしかば、空兼は直ちに書を載して、空兼才能聞えず、言行取るところなきも、留學の末に達りて限るに廿年を以てし、尋ねるに一乘を以てす、任重く人弱くして夙夜に陰を惜む。伏して願くは、彼の弘道に願ひて、入京するを得せしめよ、然ば即ち、早く名徳を尋ねて速かに所志を遂げんとの意を明らかにしき。刺使も其の志に感じけん、遂に大使に隨つて入京する事を許容したりき。

長安は道遠し、其程七千五百廿餘里と註されたり。一行の先達としては、迎客使の行列前に進めり。大使藤賀能は七珍の鞍おき馬を賜ふて之れに乗り、副使石河道益も賜ふ所の鞍馬に騎し、星を戴いて發ち、星を迎へて宿りつゝ、日數積りて十二月廿一日には、上都長樂驛の宿に着しぬ。

越えて二十三日、内使趙忠二十三頭の飛龍を將て來り迎へ、置酒して長途の勞を補らへり。即ち孰れも官服に威儀を修め、此の麗はしき鞍置きたる駿足に駕して、堂々として長安城に入るに、儀容目覺るばかりにして、之れを見る者遐邇に滿てりき。かくて宣陽坊の官宅に着きぬ。高品劉昂といふ人、監使として特に此の院に在りし

が、第三四船に在りし判官菅原朝臣清公等二十七人は、去る九月一日恙なく明州に着岸し、十一月十五日を以て長安に入り、茲にて大使等を待ちたりと告げ、やがて伴ひて一行に紹介せたりけり。實に是れ世を隔て相會ふの思ひにて、彼に在つては寂澄の法徳を稱えて、是れが爲めに今日あるを得たりといへば、此れに在つては偏へに空棄が行法を稱え、加之、其の文筆の徳に依つて、今日無上の光榮に浴するを得たりと説き、彼一句、此一句いつしか歎聲は堂に満ちにき。

然るに、空棄が切に會はんことを希かひたりし寂澄和上は、遂に長安には上らざりけり。彼の法師は、船の明州に着るとともに、直ちに臺州に立ち越えて、刺史陸淳の陣書を携へ、其のまゝ天台山に上りて、修禪寺の道遠座主に謁したるにてぞありし。

第十二 醍醐の味

仲春十一日の朝陽は、和らかに長安城外の野を包んで、滿目の麥穂に穠かなる緑を抽づるなり。晴空一點の黒子は、告天子の樂を奏しつゝ、遊ぶ影にて、離落の簞箆に耳を歌てしむるは、黃鸝の歌を弄するにぞある。時晝ければ人馬尙ほ稀にして、長亭短驛送迎に閑あるべし。この大道に立つて徐かに歩武を運ぶものは、空棄と逸勢となりき。

この兩個の和装の道俗は、一驛の旅舎に到りて、其の小亭に憩へるなり。殆どこれと時を同うして、鞍馬美しく装へる大官の一行は、この旅舎に馬を繋ぎて、其の正廳にうち通りぬ。是れぞ遣唐大使藤原葛野麻呂が一行にして、今滞りなく使命を果し、幾多の令譽と寵光とを荷ひて、歸朝の途に上れるなりき。朝廷よりは内使王國文をして、監送使として越州まで同行せしめられたれば、一行四十八名の上に王内使の侍者ありて、盛観瞻ふるにもなし。

少しくうち寛きたらん折に、空乘と逸勢とは出て別を叙しぬ。葛野麻呂等も感慙に禮を返して、

「我等の滞りなく使命を果して、かく愛たく歸朝の首途に即くを得たるは、一に大徳の力なり。今引き別れて去らんことは、情に於て忍びざれども、大徳には求法の大願ありて留り給ひ、我等は朝命を銜んで朝を還す首途なり。互ひの平安を壽きて、先づ盃をこそ舉ぐべけれ」とて、姑らく別杯を酌み交したり。

逸勢は大使に杯を献じて、一路平安を祝ぎつゝ道ひぬ。

大使には遙々朝旨を齎らして使ひし給ひながら、皇帝不豫の故を以て、宣化殿の禮見に入るを得ざりしは、いかに遺憾とぞ思すらん。去りながら、剛らず先朝(徳宗)の崩御に會して、國家の大喪に列せられ、又新帝(順宗)の即位を賀せられしは、稀なる例なるべく、是れにて御心を慰め給へ」

「實に仰せらるゝ如く、先朝は御不豫に在しまし、今帝は諒闇の故を以て、王皇太后の制を稱させ給ふ程なれば、朝見の禮に與らざりしこそ返すべくも遺憾なれ。さる

中に、奉進の物に對しては優詔を下され、麟德殿の對見、内裏の饗宴、誠に優厚の禮遇に會ひ、又、昨日は宋惟澄をして答信物を贈られ。且優渥なる勅語をさへ給はりしかば、我等が面目の上はあらず、卿も留學の勅許ありし上は、疾く志す所を學びて、一日も速かに歸朝あれかし。切に再會を望むにこそ」

葛野麻呂は手把つて後會を契りぬ。

時に空乘は携さへたる篋の内より一葉の拓本を出だして、展べて葛野麻呂に示しつ。

「こは大唐玄宗皇帝の御製にて、一行阿闍梨の碑文なり。我が國にては名をのみ聞きて、未だ舶載せるものあらねば、東宮(安殿親王)に獻つらんとて、探り得て候ふなり。卿よりよしなに傳獻してたび候らへ」

逸勢は息を呑みて碑文に對してありしが、卒然として太息を吐きつゝ、

「あら心憎き大徳が眼の光りかな。他し業は知らず、筆道に於てはこの逸勢、やはか大徳に劣るべしとは覺えざるに、うまくと人を出し抜きて、いつの程にかさる劇

蹟を檢察り索められけん」と蹙蹙して頻りに嘆きければ、正副使を始め人々手を拍つて笑ひよめき、暫らくは別離の悲愁を忘れ居たりき。

既にして鞍馬の準備も整ひたれば、監送使ともどもに再び馬を進むるなり。

此の人員の立ち去りたる後に、孑然として留りしは、唯だ空葉と逸勢とのみなりき。

砥の如き大道を遠かり行く人馬の影の、見ゆる限りを立ち盡して、倦ず目送りてありしが、路曲折して其の影を失ひたるより、兩人は相携へて、急ぎ長安城に引き還し、

西明寺の新寓に着きたりしは、是れ唐の貞元二十一年、我が延暦二十四年乙酉の二月とぞ聞えし。

空葉も逸勢も、昨日までは宣陽坊の官舎に在りて、空葉は今の時に於て大毗盧遮那

經に精通する大徳は、如何なる阿闍梨なるべきかを究め、逸勢はよりく文學博士を

訪ひて、其の道を開ふべき師を探み居たるが、昨日に至りて留學の勅准を得、尙は西

明寺の求法僧の故院へ配せられたるなり。この西明寺は規を天竺祇園精舎に取、兜

卒内院に募して構へたる梵刹にして、道慈律師入唐の際、此の規摹を寫して歸り、後

に、此の制を用ひて大安寺を建立したるものなれば、空葉に於ては舊知の感なきにあらず。殊に近くは梵釋寺の大僧都永忠和尙の舊栖と聞えしかば、何となく心ゆかしく思はれたるなり。

今は空葉も一個學法の沙門となりぬ。心は秘教の闡明に在れば、一日も温かき席に坐することなく、日々出て諸寺諸山を周遊し、師依たるべき智識を擇訪するに、汝大毗盧遮那成佛神變加持經を學せんとらば、青龍寺の灌頂阿闍梨惠果和尙を措て他を要ひべからず、夫の阿闍梨耶は、大興善寺の大廣智不空三藏の付法弟子にて、徳は維れ時の尊、道は則ち帝の師なり。三朝之れを尊んで灌頂を受け給ひ、四衆之れを仰いで密藏を學ぶ、身は内供奉十禪師たり、傳燈は正に七世の相承たり。速かに往いて調するに及すと云ふものありき。

惠果大阿闍梨の徳は、衆口一様に稱揚する所なれば、空葉も必定是れぞ我が師主なると思ひ決めて、西明寺の談勝法師等五六人と共に、青龍寺に往いて和尙に見えたりしが、和尙乍ち空葉を一見して、笑ひを含んで歡喜の色を示し、徐ろに告げでいへり。

「我先に汝の來るを知りて、相待つこと久しかりき。來ること何ぞ遅かりつる」
 空兼はこの一語深く心肝に徹して、低げたる頭をまた更に低げぬ。
 和尚は重ねて詞を續けり。

「されど、今日相見つること太だ好し、太だ好し。報命端なんと欲するに、付法人
 なかりき。必ず須らく香華を辨へて灌頂の壇に入るべし」

空兼は事の意外に驚きたり。來つて初めて見參したるまでにて、未だ師資の禮をも
 執らざるに、却つて來ることの遅かりしを尤め、付法其人なければ、速かに灌頂の
 壇に入れよとなり。身は是れ三千里外の旅僧にして、密教にも通せざる求道の徒なる
 に、直ちに入壇灌頂を命せらるること、細徒たるもの、面目の上やあるべき。去
 りながら退いて考ふれば、心に九分の懼れなきにあらず。如何すべきと躊躇すること
 多時なりき。

和尚は唯だうち見て笑めるのみ。義明供奉を顧りみて、空兼を導きて灌頂壇に入
 るべき順序を示せよと命じつゝ、徐かに榻を離れて方丈に入り去りぬ。

我が邦に於てこそ毗盧遮那經の疑義を釋く人すらなけれ、長安は實に眞言密教の中
 心にして、朝野の信仰これに集り、惠果大阿闍梨は、また之れが中心なりき。彼眞言
 正統の第七祖として、三朝の國師として、徳望一代に高く、胸に兩部の秘奥を藏め、
 心に理智の法水を湛え、四曼三密の法門、悉く掌に握らざるはなく、遠近徳を慕ふ
 て教へを乞ふもの、雲の如く來り集り、既に三昧耶に入りし碩徳のみにも、阿闍梨の
 辨弘あり、新羅の惠日あり、劍南の惟上あり、阿北の義圓ありて、法燈四方に輝き、
 印可紹接には義明供奉あり、智燦、政登、操敏、堅通の諸大徳も亦嫡々の上足なり。
 俗弟子には先々朝代宗皇帝以下金枝玉葉何れも入壇し給はざるはなく、儒林にして吳
 殷の特信者ありて、凡そ京城の内外は、皆な大阿闍梨耶の法燈の影を仰がざるはなき
 光景なりき。

空兼は其の師を得たることを喜びたり。是れより他念を去つて一心に密行を修し、
 齋戒沐浴して、單へに入壇の日の準備に努力するに至れり。

供具の營辦も法の如く整ひければ、愈六月十三日を以て學法の灌頂壇に入り、大

悲胎藏大曼陀羅に臨む事とはなりぬ。空葉はさすがに胸の跳るを禁じ得ず、満心の歡喜を包みて隠んで東塔院に來り、導かれて秘密の壇には進み入れり。

壇上の莊嚴は森嚴にして、一ひ足を投すれば、身は已に腐肉の骸を脱れて、諸尊の靈座に侍するの思ひあり。阿闍梨は鞠躬如として入り來る空葉を視て、嚴かに命じぬ。

「法に依つて華を抛てよ。是れ汝が學ぶべき位を定むる法なり」

此の言の下に、空葉の双眼は淨き布もて緊く縛られたり。双眼の明を失ひたる空葉は、今導かれて大悲胎藏曼陀羅の前に立てるなり。阿闍梨は重ねて其の手に華を授けて、慮心にして之れを曼陀羅に抛つべき旨を命じける。

空葉は華を受けて、之れを合掌したる拇指と食指との間に捧げながら、精誠を抽んで懇念を凝らせり。斯くて無意識に華を前に抛ちたり。華は手を離るゝや飛んで曼陀羅に中れり。同時に阿闍梨は燈を放てり。

「不可思議！ 不可思議！」

義明等もまた同じく「噫」の叫びを制し得ざりし。

實にも不可思議なりしよ。實にも噫なりしよ。空葉が投じたる華は、偶然にも中藥の尊像に中りて、大毗盧遮那如來の身上には著きけるなりしよ。是に於て空葉は最上の課位を得たりしなりき。

惠果阿闍梨は尙ほ讚歎の聲を斷たず、即ち五部の香水を以て空葉が頂に灌ぎ、三密の加持を受けしめたり。空葉は欣然として退き、是れより胎藏の梵字儀軌を受け、諸尊の瑜伽觀智を學ぶ事とぞなりぬる。

七月上旬に至れば、また進んで金剛界大曼陀羅に臨み、重ねて五智の瓶水に浴する事を命せられたり。這回の拋華にも亦中臺大日如來を得たりしかば、惠果阿闍梨は重ねて不可思議、不可思議を絶叫し、頻りに其の法器を驚歎して已ます、俗弟子吳殷は、

「今日本國の沙門あり、來つて聖教を求む皆學ぶ所をして瓶を滴すが如くなる可からしめぬ。此の沙門は是れ凡徒に非ず、三地の菩薩なり。内に大乘の心を具して、外には小國の沙門相を示す」と、和尙行狀を纂する時、特書したりけり。

既にして空葉は半歳餘りにして、兩部の灌頂を受け得たり。更に大阿闍梨の命と

して、八月上旬を以て傳法阿闍梨位の灌頂を受くる事となりて、是日は五百僧の齋を設けて、普く四衆に供すべく、をさく其の準備へを急げるなり。

心暗ければ愚ふ所悉く禍なり。眼明なれば途に開れて皆實なり。如来はこれを覺つて萬徳の殿に優遊し衆生はこれに迷ふて三途の獄に沈淪す。沈淪の端巽かすんばあるべからず。界悟の機仰がすんばあるべからず。性靈集

第十三 滅る燈火

傳法阿闍梨位灌頂を受くべき朝なりき。空兼は潔齋して讀經してありしに、未だ見識らざる一人の僧來りて、空兼を見るや、忽ち五體を地に投げ伏しつゝ、

「和上願くは身の罪を赦し給へ」と、聲を頭はしてうち謝るなりき。

餘りに事の唐突なりしかば、空兼は唯奇異の想ひをなして。夫の僧を見るに、支えたる手の甲には、消き涙の露さへ結べるなり。さすがに心穩かならざれば、空兼は面をも聲をも柔らげて問ひぬ。

「御僧はいかなれば、少僧の前にかくは謝たまふや。我は是れ日本國の沙門なり。

人違へばし爲給ひしにあらすや」

「否々、和上が三地菩薩の權化にて在する事も能く知りて候ふ。今日傳法阿闍梨位の灌頂を受け給ふ事をも、悉く知りて候ふなり」

「然あらんには人違ひにてはなかりしよ。其處にては御物語りも爲し難きに、此方

へ上りて座に着き給へ」

「迂僧は罪あるものなり。和上の罪を赦し給はざらんには、いかにして同じ筵に列なるべし」

「少僧には更に覺えとては候はず。同じ道に遊ぶ身の、何とて隔意あるべきかは。殊に少僧は他國求法の沙門なるに、怨みを結ぶべき所由とては候はず。いで席に進み給へ」

「いや、是れにて陳謝すべければ、僧にあるまじき罪科ながら、枉て赦すの一言を聴かせたば候らへ」

「かくまで申しても御進みあらぬに於ては、少僧こそ其方に參るべけれ」

空葉が座を立たんとするに、彼の僧は手を打て支えながら、

「夫にては吾が罪愈々重りぬべし。枉て夫れにて御聽せ候らへ」
強て遮り止むるに任せて、空葉も已むなく元の筵に就きぬ。

此時、彼の僧は大汗になりし額に、夥多しく着きたる砂を拂つ、いと面羞げに咄

りつ、陳謝したりき。

「少僧は青龍寺の内供奉が御弟子にては候はず。聞きも及び給ひけん、東塔院阿闍梨の御相弟子にて、越州龍興寺の内供奉十禪師順曉阿闍梨の末弟、玉堂寺の珍賀と申す沙門にて候ふ、順曉阿闍梨は旨と善無畏三藏の大法輪を持し給ひ、去年貴國の供奉大德澄和尙の法を問はれし時にも、阿闍梨は不空三藏の眞言は傳へ給はで、善無畏の大法輪を轉じ、三部灌頂を授け給へり。されば、和上に於ても七世相承の密灌を傳へず、經をこそ學ばしめらるべしと思ひしに、阿闍梨は進んで胎藏界の灌頂を受けさせ、剩さへ金剛界をも許し、今また傳法阿闍梨位の灌頂壇に入らしめんとし給ふを見て、迂僧は甚だ安からぬ事に覺え、實は阿闍梨に意見を陳べて候ふなり」

説き來つて珍賀は大汗を拭ひぬ。空葉は天台山にのみ在るべしと思ひつる叡澄の、順曉阿闍梨に調して密教をも學びたるを知り、坐に懐かしき想ひをなしにき。

「嗚！恐しきは妄執の惡念にて候ふよ」と、珍賀は太息を吐いて、更に説き續けぬ。

「迂僧阿闍梨に妨げ申して白さく、日本の座主設ひ聖人なりと申すとも、是れ門徒にては候はざるなり。須らく諸教をこそ學ばしむべけれ、何ぞ密教を授けられんと擬する事やある。從來付法し給ひし五大弟子も、兩部を傳へ給ひしは、義明供奉一人のみにて、劍南の惟上、河北の義圓兩闍梨は唯だ金剛二界を得られ、新羅の惠日、阿陵の辨弘兩闍梨は俱に胎藏一界を得られたるのみにては候はずや。と、而も妨訴再三に及びしかば、阿闍梨は耳をも傾け給はざりき。吾が意は少しも通せずして、明日は傳法灌頂と承まはりつる昨夜の夢に、太く降伏を被りて、身は殆ど死なんとせり。僅かに懺悔の念萌して幸ひに覺ることを得、身を潔め佛に誓つて、こゝに來つて過言の罪を謝するにて候ふ。あはれ大悲の露を灌いで珍寶が罪を赦し給へ」

斯く言ひ終つて再三空葉を伏し拜むに、空葉はいと氣の毒になりて、

「能くこそ懺悔し給ひつれ、夫れにて目前罪も報ひも消滅したらん。いざ先づ此方に進み給へ」

「さては赦させ給ひしか。是れにて身も心も軽くなりぬ。約束ならば席にも上るべ

き密ながら、尙ほ朝の勤行もあれば、重ねて勸ひ奉るべし。さらば許させ給へ」

珍寶は強て空葉に辭して、窟るが如くそここに歸り行きたり。

兎角する程に入壇の時刻とぞなりぬる。空葉は式の如く大毗盧遮那如來の尊前に導かれて傳法阿闍梨位の灌頂を受けたり、金剛頂瑜伽の五部の眞言密契を相續し、而して梵字梵讀を受け、こゝに惠果阿闍梨より遍照金剛とは名づけられたり。

大法の受授了つてのち、阿闍梨は尙ほ告げて曰へり。

「眞言秘藏の經疏は秘密なり。爾密を假らざるば、相傳すること能はじ。乃ち供奉の書工李眞等十餘名をして、胎藏界金剛界等の大曼陀羅十鋪を圖繪せしめ、尙ほ經生二十餘名をして金剛頂等最上乘の密藏經を寫さしめ、供奉の鑄博士揚忠信、趙吳等に命じて、道具十五事を作らしめなん。始らく其の成るの日を待つべし」

空葉は重ねく師恩の忝けなきを感謝して、夫れより齋の筵に赴きぬ。

齋筵はいと賑はしかりき。青龍寺、大興善寺の供奉大徳を始め、五百の知識悉く集ひて、孰れも隨喜したりければ、空葉は是れにも少からぬ満足を表して、愈々恭謙

の徳を修め、熱誠に法を學びしかば、兩大寺の僧俗は言ふに及ばず、西明寺に在りても、誰あつて空葉を識る者なく、殊に同學の推重を被むつて、自から傳法阿闍梨の徳望を集むるに至れること、夫の橋逸勢が多くの儒生の中に於て、橋秀才の才名を高からしめしに同じく、俱に國の譽れなりと歎びあへりき。

日ならずして美事なる圖書は成れり。勿體なき經疏は成れり。立派なる道具は成れり。この付屬の寶物を携へて歸朝せん日は、やがて聖教の日本に弘るべき日なりと思へば、功名心なき空葉の心も、自から喜びに跳るを覺えたり。阿闍梨は之れに就て懇ろに秘密の悉地を授けたり、更に親しく遺誨を垂れたり。

「吾昔警亂の時、初めて三藏に見えぬ。三藏一たび目ての後、憐れむこと子の如くしつ、内に入るにも、寺に歸るにも、影の如くして離れざりき。竊かに告て曰ひけるやう、汝に密教の器あり、努力せよ努力せよと。兩部の大法、秘密の印契、是れに因りて學び得たり。自餘の弟子、若くは道、若くは俗、或は一部の大法を學び、或ひは一符一契を得て、兼ね貫ぬくことを得ざりしなり。岳濱に報せんと欲すれども、吳天

極り罔し。如今此の士の縁盡きぬ、久しく住まること能はず。宜しく此の兩部の大曼陀羅、一百餘部の金剛乘の法、及び三藏轉付の物、並びに供養の具等、本郷に請歸つて海内に流傳せよ。緣かに汝の來れるを見て、命の足らざらんことを恐れたり。今は則ち法の有りと在るを授け、經像の功も畢んぬ。早く船國に歸つて、以て國家に奉じて天下に流布して、蒼生の福ひを増せ、然らば即ち四海泰かに萬民樂まん。是則ち佛恩を報じ、師徳を報じ、國の爲めには忠なり、家に於ては孝なり。義明供奉は此處にして傳へなん。汝は其れ行け。之を東國に傳へよ。努力よや努力よや」

空葉は唯だ感涙に咽ぶのみにて、謹んで承はり居たりしが、早く歸つて傳ふるこそ、佛恩に報じ、師徳に報じ、國に忠、家に孝なりと説かるゝに至つて、慨然として心を決しぬ。即ち命に隨つて種々の賜を受け納め、殊に不空三藏傳來の轉付を得たるを深く喜び、一先師の前を退いて、即坐に一青龍和尚獻新袈裟狀「一篇を舛し、之れに袈裟一領、手香爐一柄を添へ、携へて阿闍梨の前へ出でぬ。

「悲翁空葉、生緣は海外、時は是れ佛後なり、迷霧に掩はれて惠日の見難きを歎

き、影を蒼嶺に透れて、飾を繡林に落し候へども、三密を一法に明かにし、十地を一
 生に究むる如きは、空しく英譽を聞くのみにて、未だ其人を觀す候ひき。伏て惟みる
 に和尚は所謂三身の一身、千佛の一佛にて在しますに、空乘幸ひにして洒掃に廁はり、
 甘露に沐することを得て候へば、悲喜は分に候はず、身を粉にしても濁澤に報じ奉つ
 らんご存じ候ふに、一の珍奇とても候はず。唯だこゝに熾き袈裟と、雜寶の手香爐
 との候ふ。聊かこれを以て丹誠を表はし奉つる。あはれ願くは慈悲を垂れて領せられ
 給はんことを」

表ごゝもに感戴にさぐる二品を、阿闍梨は快よく受け納れつゝ、尙ほも懇ろに秘
 法の密旨を説き示しつるなり。

後に阿闍梨は門弟子を招き集へて、更に遺誨を傳へて曰へりき。

「兩部の大法は如来の秘藏、成佛の徑路なり。普く法界に流傳して、有情を度脱せ
 んことを願ふ。幸ひに辨弘惠日には並に胎藏の師位を授け、惟上、後圓には金剛界の
 大法を授け。後明供奉にも亦兩部の大法を授けぬ。今日本の沙門空乘あつて、來つて

聖教を求むるに、兩部の秘奥、壇儀、印契を以てす、淡梵差ふことなく、悉く心に受る
 こと、猶瓶を瀉すが如し。此れ是の六人は吾が法燈を傳ふるに堪えたり。吾が願ひ足
 んぬ」

眼を開いて一わたり衆弟子を見渡すに、皆倒を引いて傾聴するのみにて、一人の語
 を狭さむものなく、人は衆けれども、満堂寂然として宛然水をうちたらんが如し。

阿闍梨は再び目を閉ぢて、靜かなる聲にて語を繼ぎぬ。

「夫れ日出れば月没れ、油盡きぬれば燈の滅ゆるは、物の常なり。菩薩も住まらず、
 如来も已た滅せり。吾も亦庶幾は眞に歸くに如じ。是れを師弟の名殘さばするぞか
 し」

かく説き示して、衆僧に別れを告げ給ふに、誰あつて敢て仰ぎ見るものなく、夢よ
 り夢に踏み迷ふ心ちして、法衣の袖に顔を押當てつゝ、聲を呑んで嗚咽するのみ。忍
 ぶとすれば堪えずして涙を墮る者あれば、満堂の人々之れに促がされて、其の聲を驟
 雨の屋をうつ知くなるに、折しも一陣の朔風高解の聲を運び來て、礎の如く地に投す

れば、内外相響應して一種の悲聲となり、孰れも臥し轉ばまほしき思ひなりけり。阿闍梨は言ふべき程は言ひ盡しつ。今はここに在りて何かせんとはかりに、徐ろに榻を離れて、枯木の如き身を運びつ、方丈の方に去らるゝに、晩冬の衰陽雲を破つて光りを落せども、力弱くして老軀を養ふ影もなく、却つて刃の如き奇寒を來して、並み居る龍象も其の肉の縮まるを覺え、捲ふものなき冬木立の身の上をのみ、只願に痛み歎かるゝなり。

是に阿闍梨は傳き權者にて在しましけん、定命を能く前知し給ひて、かりそめの微恙に罹られしと見えつるもの、日に添へて肉落ち氣衰へ、素より薬水を口に給ふ事なければ、只第頼み少くぞ見え給ひける。牀上に在ること十日ばかり、十二月十五日となりしに、自ら牀上に起き直りて、

「いでや、今より蘭湯に浴して躬を淨めなん」と、俄かに左右を促かし給ひぬ。

蘭湯に淨め畢れば、淨衣に改めて、右脇北首、西に向つて臥し給ひ、手に大毗盧遮那の印を結ばるゝと見る間に、怡然として圓寂を示し、春秋六十、臘夏四十にして、

法眼既に固く閉ぎ畢んぬ。

五更の鐘は意あり氣に、いと長く響き來れり。今や命終の御別れぞと、うち集ふ一山の門侶は、涅槃の枕に悲しみ叫べども、四大空に歸し終つては、今將た如何とも施すべからず、泣く泣く遺骸を東塔院の道場に奉安して最後の營みを勤むるのみ。中にも空無は未資の外僧として、いかなる宿縁なりけん、披群の寵遇を被り、八世嫡統の海潮を受けたる師恩の、忘れんとしても忘るゝによしなく、此の夜單身持念してありしに、忽然として和尚は吾が前に立ち給へり。

「呀ー」

思はず聲を揚げて仰ぎ見れば、和尚は莞爾として微笑し給へり。

「汝は未だ知らざるや、吾と汝との宿契の深かりしを。多生の中に相共に誓願して密藏を弘演し、彼此代るゝ師資を爲ること、只だ二兩度のみにあらず。是故に汝に遺沙を鞠めて、我が深法を授けつ、受法云に畢んぬ。吾が願ひ足れり。汝は西土にして我が足に接す、吾は已た東に生じて汝が室に入らん。久しく逗留すること莫れ、吾

前に在つて去らん」

其の言容在りしに差違ふことなれば、空葉は其の詞骨髄に徹し、其の肺腑に切にして一ひは喜び、一ひは悲みつゝ、胸裂け腸断えなんばかりに、謹しんで之れに答へ奉らんとして、涙を拭つて面を仰れば、あな口惜し、和尙の温容は在らずして、前に炷きたる香の煙のみ、夢の如く立ち騰りたり。

同法 同門 喜過深。遊空 白雲 忽 離 岸。
一生 一別 離 再 見。非 夢 想 中 數 數 語。

第十四 墨池の香

殊勝に響く梵唄の聲を耳にしながら、春寒猶ほ去り難なる西明寺の客院に、書寫せる新譯の秘卷より眼を刺し、腕を排いて天の色を仰ぎ瞻たるは、橘秀才逸勢なり。

「葉師、彼れほどの大部の卷数を、はや卒業せられつるか。寫經生等は後れたり。彼等いかに心ばかりは競ふとも、飛ぶが如き筆の運びには、及ぶべき力なきこそ効なからめ」

今は卷を案上に擲きて、頬杖つくく空葉が口に眞言を誦しながら、細楷を以て寫し行く「瑜伽念誦儀軌」の一卷を、他かず目隠り居たるなり。

空葉は唯だ微笑を以て答へしみにて、少しも筆を止めず、目と心と腕とを卷と紙とに注いで、油断なく書寫の功を積み行くにぞありし。

逸勢は尙ほ眼を移さんともせず、一心に落筆の妙を見てありしが、卒かに想ひ起したらんやうに、快心の笑みを浮べぬ。

「大徳は付法傳燈の素志を果して、二十年の學法を一年に遂げ得られにき。加旃文章、書道、長安の儒林を歴して、日本の聲譽を中華に輝かせしは、空前の偉績ぞかし」

苦笑しつつ筆を走らせし空兼は、毫しも手を休むることなくして、軽く言ひ消した

「詩文の淵藪たる大唐の儒林に伍して、應酬唱和に鬼才を現はし、橋秀才の名聲を馳せたる卿に比ぶれば、月の前の辰星なるべきを、何ぞは爾か宜ふぞや」

「唱和は唯だ酒に依つて發するのみ、如何ぞ才藻を上下するに足らん。夫の龍原の碑文を見給へ、青龍の門下細素幾干ぞや。其の内傳法の和止も在るべし、一世の學匠もあるべし、文に、書に敢て其の人に乏しかるまじきに、大徳は異境の末裔として擢でられて此の選に當り、滔々數百言、情至り、理盡し、師徳を千載に傳ふるに、些の遺憾なきのみならず、妙文の名を文學の國に留め、能書の蹟を輪池の源に遺し、萬人仰いで絶妙を稱ふるが如きは、全く凡事に絶したる奇蹟ならずや。昨日も柳宗元の帖

を選さんため、韓方明先生が方に赴きしに、先生も孟村の碑文を見ては、怒に我等が如き拙書にして、授筆要説などを語り、書法を授けたりと思ひしは、心愧かしき限りなり。寔に王右軍が再來なるべしと白されたり。大徳が譽れは我等が譽れなり、留學生の譽れは日本國の譽れなり、日本國の譽れは、是れ乃て延暦帝の御稜威なり。中華の大も大ならず、東海の小國も小國ならず。道を行くに人譲り、相遇ふて禮を教うるは、皆な是れ大徳が賜にこそ」

逸勢はいつしか席を改めて、襟を正して肅然として語るなりき。空兼は尚ほ筆を運びつゝありしが、此時既に後題を書き了りて、筆を筒に收め、紙を揃へて他に移したり。

更に座を臆の下りに進めて、逸勢と案を隔て相對しぬ。「二十名の經生を得たれば、是だけの大部の經疏も、思ひしよりは速かに卒業れり。改めて卿の御校合を謝し侍らん」

「さやうに言るれば、我等よりも謝すべき事あり。入唐以來偶然柳宗元の書風を愛

して、間ある毎に習ひ試みたれど、北碑風の楷書は、殆ど試むるよすがなかりしを、此の秘策の勘合に依つて、大いに謹嚴に手習ふことを得たるは、是れも亦大徳の賜なるべし

「夫れに就て面白き話あり」

空葉は何かは知らず微笑を含みて、少しく態度を寛げぬ。

「和朝にありては、六書八體をも學びて、正楷は朝野宿禰魚養の教へを受けしも、筆は羊毫と兔毫とに限られ、其の製も皆な雀頭なれば、正楷にも自から肉を生じて、一種寫經生が型に入るを覺えたるなり。然るに此の長安に來りてより、偶々狸毫の筆を得て、細楷を試むるに、稍や心に應じ手に得たらん思ひありき。さりながら、卿はいかに在りつらん、貧道は餘りに古くより二王(羲之獻之)を習ひし爲めにや、南帖の温豊なる處残りて、筆どかくに意に隨はず、方明先生の執筆法を聴き、また虞世南、歐陽詢、褚遂良等の、北方の碑板を見て、始て顏真卿が楷書の妙を知り、大いにこの風を揮はんと思ひし折柄、此の秘策書寫の願を發して、幸ひに其の機を得たり。尙ほ

幸ひにして卿の御校讐を得て、心類に觸みけるが、試みに卿の筆力に比ぶれば、貧道の太く劣れるを悟り、夫れより筆に丹精を籠めて、一心に力を著ひしかば、少しく楷書の極致に近きたるを覺え、この中一二帖は、後年に至りて誤つて卿の書と鑑するものあらんかし。是れぞ正しく秀才が策勵の賜ならずや」

手を拍つて放笑するに、逸勢も大口開きて高笑ひしたりき。兩人が笑ひ聲の自から鎮まる時、逸勢は愁然としてうち萎れつ。

「大徳は既に詔命を果されしかば、只今にても錦を故國に飾らるべし。我等は不幸にして渡音に爛らはす、山川兩郷の舌を隔て、未だ槐林(學校をいふ)に遊ぶに違あらず。唯だ習ふ所を温ねて、兼て琴書を學ぶども、日月は荏苒として資生都て盡きなん。殊に此國より給ふ所の衣服食糧は、僅に以て命を續ぐのみにて、束修を納れて書を讀むの用には足らず。かくしていかで廿年の期を待たるべきぞ。大徳少しく察し給へ」

「書生として留學の班に列なれども、逸勢は實に王孫の末なり、其の妹は二の宮の

妃として世に榮え、逸勢自身も才氣横溢して、現に大唐の儒林に於てすら、秀才の名を博せしに拘はらず、常に大學に出入する能はざるは、實に給する所の資金の乏しき爲めなり。空兼は夙より之れを察するからに、自ら奉ずるの薄き沙門の身とて、其の利し得たる物を割て、今までは逸勢の衣食を補ひ居たるなり。空兼は常にもなく力ある顔色を示して、力ある聲態にて慰めたり。

「惠果阿闍梨滅後の法海に、棹すべき筏のあらぬが如く、儒林に於ても卿の學ぶべき碩儒はなきにあらずや。韓退之とやらん、較や氣骨ある學匠とはいへど、潮州とやらんに左遷の身なれば、有れども猶ほ無きが如けん。速かに本國に還るべし」

「何に日本に歸れどや」

「然り。貧道も今日は歸らんとぞ思ふ」

「大徳も廿年の期を待すして、直ちに立ち歸らんと白さるゝや」

「師の遺命いと重し、貧道には疾く歸つて、國家の奉爲め、四衆の爲め、法を布く大任あり」

逸勢はこれに應へんともせず、深く深く嗟嘆したりき。

「大夫もこの三年が程に、心に得られつる智識、目に睹られつる政道の總てを、事毎に施すべき務めこそ在さめ。來ること我が力に非ざる如く、歸ることも亦我が志に非ず。卿に在つては、去留唯だ勅のまに／＼なるべく、貧道に在つては進退一に師命に隨ひなん。聞くべき道、求むべき法、利す所幾干もあらねば、之れだに果さば、即時に本郷に歸り去なん」

かくぞ聞きて逸勢は、殆ど一條の活路を開きたらん心ちしたりき。

「然らば我等も歸國すべし。大徳は定めて遣唐使高階真人に就いて、歸國を請はんとはし給ふならん」

「然り。若し委ねらるゝに於ては、卿の事は不肖ながら我等にてともかくも申請ひ置くべし」

「そは我等よりこそ願ふ所なれ」

兩個は期せずして面を見合せしまゝ、うち釋たる笑ひを交うるなりき。

逸勢が激賞して止まざりし龍原の碑文といへるは、故し惠果大阿闍梨を葬りたる、長安城東孟村の龍原なる大師塔の側、即ち阿闍梨の塋側に建てたる悲感碑なり。元和元年正月十六日、阿闍梨の遺骸をこゝに送りて葬り奉つり、四衆合會して悲感天を助かし、中にも空葉に在りては、瀉瓶の洪恩を思へば、胸裂け腸斷ぢなん悲痛あり、遂に同侶相謀つて墓碣を作り、大いに徳を表はしたり。其の文、其の書ともに空葉にして、『日本國學法弟子志獨空葉撰並書』と署し、大いに唐人をして、其文其書に感歎せしめたるより、遂に儒林の評噴々として、逸勢をして己を虚しうして喜悅に堪えざらしめたるなりけり。

是の日逸勢の助力せし寫經の校合も業を卒へたり。空葉はこれを三十帖に合して冊子に製さしむる事とし、直ちに西明寺を出て、宣陽坊の官舎に、高階太宰大監を訪問したり、己並びに逸勢が歸國を請はん爲めに。

空葉が出たる後にて韓方明は訪ひ來れり。逸勢は直ちに己の房に延いて、好める途とて筆を採つて書法の問答を始めたり。方明は自分の書法は決して自分の書法にあら

す、自分が空葉に授けたる書法は、初め蔡邕が神人より得て、崔瑗に授けたるまゝのものなれば、術夫人も王羲之も固より此の書法の外には出ざるよしを語れり。方明はまた自身の系統を説いて、知永、虞世南、歐陽詢より、二陸(東之、彦遠)、張旭、李冰陽を経て二徐に傳へられたるものにて、徐璜は即ち余が師なりと云へり。

また逸勢が執筆法を問ふに對して、筆と書とに應じて單鈎と雙鈎との別あることを説き、方明は五筆の法を明かにして、第一執筆、第二族管、第三撮管、第四握管、第五擲管に別ち、執筆以外は書家流の用うる所に非ずといひ、尙ほ執筆は便穩に在り、用筆は輕健に在るよしを言ひ添へて、詳しくは空葉和上に尋らるべしと結びたり。

折しも空葉の歸り來りしかば、方明は逸勢との筆談を止めて、威儀を正して空葉に接したるなり。

「和上、龍原の墓碣は日に添へて蕪苑に名を傳へ、遂には天閣に達して候ふぞ」
空葉は感きの目を臨りつゝ、肅しまやかに對へぬ。

「そは眞にて候ふやらん」

「仰せらるゝまでもなし。余は和上を僞るものに非ず」
 「先生の僞らせ給ふとは覺えざれども、中華は文學の源にして、長安は秀才の府に候はずや」

「去りながら此の事は極めて正確なる沙汰にして、既に拓本も叙覽に入りしとなり」
 空葉は愈々醜態の態度となりぬ。

「若し誤つて天覽の榮に入りしならば、そは阿闍梨大師の徳の、九天を動かしたるものにこそ候はゆ」

「惠果は三朝の國師なり、上にも御師依淺からざれば、固より其徳は忘れさせ給ふまじ。されど、叙覽在らせられしは、國師の法徳にはあらずして、其の文と其の書となりき」

「そは思ひも依らぬ御戯れを承はるものかな。文には一代の名家墨の如く、書には當代の二王雲の如し。海外の學法僧の文墨など、一掃して棄つべきものを」
 空葉は笑つて耳をも傾けざりき。逸勢は兩人の一語一句、更に心に解するものなけ

れば、句毎に空葉に尋ねれども、是れにも同じく笑つて答へざりき。
 方明は手を打つて空葉の注意を呼びつゝ、

「僞りならぬ證據には、或る内官の勅命を奉じて、余が方に内意を探りに來るものありき。勅證の趣きは他にあらず。長安宮の殿上に三間の壁ありて、王右軍之れに書を揮はれしが、幸ひにして、晋末の亂にも壞たれざりしを、歲月を経るまゝに、いつしか土落ち壁崩れて、今は書體もおぼろげになりぬ。其内二間は破損甚だしく、處々新たに塗り更へられたり。而も當代一人も藏之に似たる書風に堪能なる者なければ、其の壁の見苦しきこと言語の外なりとぞ。日本の僧空葉は藏之の書に巧みなりと、夙に叙覽に達し居たるに、今正しく墓碣の拓本を御覽せさせられ、是なる哉と思召させられしより、是非彼の僧を召して、藏之の筆跡を接がしめよとある勅證なり。余は其の内官と師弟の因あれば、貴僧の内意を承はりてよと頼まれしまゝ、此の事を告げ申すなり。いかで勅に應じ給はんや」

方明は慇懃に説き出して、一向に慇懃るなりき。空葉も亦慇懃に耳を傾けて、一什